

博士論文

戦時中インドネシアに派遣された日本女性作家文学論

―林芙美子を中心に

二〇二二年三月

立命館大学大学院文学研究科

人文学専攻博士課程後期課程

Fitriana Puspita Dewi

立命館大学審査博士論文

戦時中インドネシアに派遣された日本女性作家文学論

— 林芙美子を中心に

(The Study of Literature of Japanese Women Writers Dispatched to

Indonesia in Wartime Era — Focusing on Hayashi Fumiko)

2022 年 3 月

March 2022

立命館大学大学院文学研究科

人文学専攻博士課程後期課程

Doctoral Program: Major in Humanities

Graduate School of Letters

Ritsumeikan University

フィトリアナ プスピタ デウイ

Fitriana Puspita Dewi

研究指導教員：瀧本和成 教授

Supervisor : Professor TAKIMOTO Kazunari

戦時中インドネシアに派遣された日本女性作家文学論―林芙美子を中心に

論文目次

序章	
第一節	研究の背景 一
第二節	研究の視座 五
第三節	章たてと研究内容 九
第一部	林芙美子を中心に
第一章	林芙美子のインドネシアの紀行文の研究―「赤道の下」、 「南の田園」、 「スマトラ―西風の島」
序	一三
第一節	林芙美子とインドネシア；メディア、 ルーツと作品の概要 一七
第二節	宝庫とされたボルネオ―「赤道の下」の 一考 二五
第三節	ジャワにおける文化的アプローチ― 「南の田園」の一考 三五
第四節	三千キロメートルの旅を通じて― 「スマトラ―西風の島」の一考 四七
結	五三

第二章 林芙美子の「古い風新しい風」論―ボルネオの表象をめぐって……………

序……………六〇

第一節 想像されたボルネオ―アグネス・キース『ボルネオ―風下の国』の受容……………六三

第二節 現実のボルネオ……………六九

第一節 思い出のボルネオ……………七五

結……………八一

第三章 林芙美子「ボルネオダイヤ」論―ファセット多面体としてのボルネオ……………

序 地域研究の重要性……………八六

第一節 林芙美子のボルネオ……………九〇

第二節 植民地のプラトニックな恋愛……………九四

第三節 〈銃後〉の女の擬似的な愛国心……………九八

第四節 移動する女性の身体……………一〇一

結……………一〇四

第四章 林芙美子「荒野の虹」論―スマトラからの復員兵をめぐって……………

序……………一一〇

第一節 復員兵をめぐるタブラ・ラサ（白紙化）……………一一三

第二節	南方の記憶への反芻	一一一
第三節	「過去」と「現在」の切り替え	一二九
結		一三五
小結		一四二
第二部	他の女性作家	
第一章	小山いと子『椰子真珠』論—スマトラにおける多言語状況をめぐって	
序		一四五
第一節	スマトラ社会の複雑な多言語状	一五〇
第二節	曖昧な言語戦争	一五九
第三節	言語ヘゲモニーにおけるお常の役割	一六七
結		一七九
第二章	佐多稲子「挿話」論—音によるスマトラの描写	
序		一八〇
第一節	スマトラ農園におけるサウンドスケープ	一八五
第二節	不敵さの喪失	一九四
第三節	聴く過程における意識の懸隔	二〇二

結	二〇八
終章	一一三
参考文献	一一二
滞在マップ	一一七

序章

第一節 研究の背景

「大東亜戦争」の勃発した約三カ月後にあたる一九四二年三月八日、オランダ植民地政府が日本に無条件降伏したことによってインドネシア全域は日本の陸海軍の支配下に置かれた^①。日本軍政下のインドネシアでは陸海軍地区を三つに区分し、スマトラ島は陸第二五軍、ジャワ島とマドウラ島は陸軍第一六軍、ボルネオ（現カリマンタン島）とインドネシア東部は海軍の統治を受けた^②。この三つの管轄は石油の油田地帯の位置によって定められた^③。日本とインドネシアの支配・被支配の関係はマレーとシンガポールと同様に、軍政の形式がとられた^④。

西洋の植民地支配からアジアを解放するという名目で^⑤、日本占領の当初、インドネシア人は日本軍を歓迎していた。しかし、日本占領はインドネシア人にとって、オランダ植民地時代と変わらないばかりか、労務者や従軍慰安婦の問題などが生じたことで、現地の人々による抵抗運動が起こっていた。一九四四年九月、小磯國昭首相が「近い将来の東印度独立」という旨の声明を出したことに伴い、インドネシア側の独立運動を活発化した。しかし、日本政府の「約束」が実現化する前に、日本は降伏することになった^⑥。日本軍政

の撤退とともに生じた権力の空白を受けて、インドネシアの政治グループは、独立実現の機会だとして、一九四五年八月一七日にようやく独立宣伝が發布された。このようにインドネシアにおける三年間半の日本占領期が終結することになった。

戦前期より、日本の南進論議の中で、インドネシアは「資源の宝庫」として知られており、「アジアにおいて最大の石油生産地」などとも位置づけられた。さらに南方地域ではインドネシアの人口と面積がその半分近くを占めていたため、「大東亜共栄圏」の建設において有意義な地域とみなされた^⑦。特に、日中戦争以降、米国は日米通商航海条約を破棄したため、日本で消費される主要な生産原料が米英に依存していたため、条約が破棄された状況が継続すると日本経済に対する大きな打撃は不可避であった。それゆえに、日本の指導者は一九四〇年四月に南方地域の豊富な資源や物資を獲得する方針を立て、自給自足体制の重要性を訴えるようになった。同年七月、もともと満支を中心とした「東亜新秩序の建設」は、第二次近衛内閣が成立した後、東南アジア諸地域を含めた「大東亜共栄圏」の理念と構想に発展し、日本は南方への軍事進出の方針が強化することになった^⑧。

南方侵略の準備に伴い、日本国内において、一九三九年七月一五日に「国民徴用令」が施行されたことで、大幅な社会変化が生じた。「国民徴用令」は文学の領域にも適用され、陸軍省が大東亜共栄圏における文化工作の指令を発し、文化人、文学者、ジャーナリストなどが戦争協力に加担することになった。『文芸年鑑・二千六百版』には、南方諸地域にお

ける文化工作および報道の強化と維持のため、陸軍省が文化人から挺身報道宣伝事業に勤務する要員を募集したことが記されている^⑨。その結果として、一九四一年一月中旬に第一次南方徴用が発令されて以降、同年一二月より、マレー方面をはじめとして徴用作家が南方へ渡航することになった^⑩。

六〇名以上の文学者の中には、臨時徴用という形で南方に派遣された女性作家たちもいた。阿部艶子、林芙美子、小山いと子、美川きよ、水木洋子、吉屋信子、川上喜久子、佐多稲子などで、森三千代は文化使節としてインドシナに派遣された^⑪。臨時徴用作家の使命は南方徴用作家と異なり、『極秘 新聞、雑誌記者、女流作家南方派遣指導要領 陸軍省報道部』という別の要領で規定された。南方に派遣された女性作家は徴用作家もしくは従軍作家と違い、「陸軍報道部派遣作家」と呼称されたが、当時の文献資料には彼女らの肩書に「軍報道班員」とある^⑫。右記の要領によると、彼女たちの行動方針は、①「大東亜戦争一周年記念日ニ方内宣伝資料ヲ収集セシム」、②「現地ニ於イテ主トシテ左記事項ニツキ見学セシム」、③「現地ニ於ける行動ノ細部ハ現地軍ニ計画ヲ依属ス」と記述されている^⑬。②にある「左記事項」には、現地の戦跡の見学、軍司令官・軍参謀・司政長官・司政官・現地要人との会見、軍政浸透状況の視察などを含む。しかし、以上の項目以外にも、彼女たちは日本語の普及、戦意高揚と対敵宣伝という三つの徴用作家の文化工作の活動も期待されていた。

本研究は南方臨時徴用作家のうちに、第一班としてインドネシアへ派遣された女性作家の文学に注目する。研究対象としては、インドネシア全土を半分以上回った林芙美子を中心とし、林に同行した小山いと子、佐多稲子の文学作品の分析を本論文の第二部に位置づけている。美川きよも林らとともにインドネシアに派遣されたが、美川が執筆した作品は文学作品ではないため、本論文で論じる他の作品に鑑みて、インドネシアの経験に基づいた小説のみに研究対象の範囲を限定した。他の女性作家が執筆したルポルタージュや通信文書と共に今後の研究課題としたい

「南方視察」に派遣された女性作家は既に中国の戦争ルポルタージュもしくは戦地慰問の活動に従事した者たちであった。林芙美子の場合、一九三八年から一九四一年まで従軍作家陸軍部隊として中国の戦地に訪問し、佐多稲子と小山いと子も同様に一九四一年、戦地慰問のために中国に派遣された。管見の限り、「南方視察」に特定の女性作家がいかなる過程を経て選出されたのかを示す些細な資料が見当たらないが、中川成美によると、彼女たちの日本文学報国会での活動が考慮されたと考えられる^⑭。

一九四二年九月一日、陸軍省報道部が「南方視察」へと赴く女性作家たちに「旅行券」と「辞令」等の書類を交付したことから彼女たちの南方行が始まる^⑮。南方視察の指令について、小山いと子は「否応なくスマトラへ派遣命令を受けた。病気以外はことわれない」と述べている^⑯。現地での目的について、佐多稲子は『佐多稲子全集第四巻 私の東京地』(講談社、一九七八年)のあとがきにおいて「出版社各社からの数名のひと、婦人作家数人が動員され、「南方」を見て来てそれを記事にする」と証言し、美川きよはこれに加えて「果たすべき通信の量は五〇枚近い紀行文だった」^⑰と。女性作家たちは、林芙美子が朝

日新聞、佐多稲子が毎日新聞、小山いと子が読売新聞に所属していたことから窺えるように、各出版社もしくは新聞社に所属するかたちで南方に派遣された。

第一班所属の女性作家は、一九四二年一月三〇日に広島の宇品港から病院船で南方へ出港し、三週間の船旅を経たのち、一月一六日にシンガポールに到着した。シンガポールの戦跡を巡り、その後、ジョホール、ペナン、アロスターまでマレー半島を回った。二月下旬、各作家に分担された地域に自由行動が許されるようであり、個別で目的地に赴いた。林芙美子は二月九日にジャワ島のバタビア（現・ジャカルタ）へ、佐多稲子は二月二〇日に北部スマトラのアチェー港に到着した。小山いと子は本来ビルマに派遣される計画であったが、船旅中に盲腸炎に罹り、軍の手続きで「治安がよく、近いし気候もよいし涼しい高原もある」スマトラに赴くことになった^⑧。小山は北部スマトラのメダン市で治療を受けて回復した後、ジャワ島とバリ島を旅したが、スマトラに戻ると再び発病し、他の女性作家にくらべて帰国時期が遅れてしまった。そのため三カ月の南方派遣の計画は結局のところ二年間延長することになった。各作家の旅の順路および活動は次章以降で詳述する。

第二節 研究の視座

戦争とジェンダーの視点からみると、戦争における女性の役割は国や文化によって異なるが、基本的に女性が軍隊の働きを支えるか、「平和」の象徴として機能するというように、伝統的役割を担わされる。また、戦争のシステムにおいて男性は普遍的に出征し戦場の加

害者として見なされる一方、女性は子どもや高齢者と並んで戦争の暴力を受ける被害者として位置づけられる^⑨。すなわち「男性Ⅱ戦線、女性Ⅱ銃後」、「男性Ⅱ加害者、女性Ⅱ被害者」、「男性Ⅱ戦う主体、女性Ⅱ平和の象徴」という図式的なジェンダー役割が戦争システムには機能している。

一方で、ジェンダーと国家との関連性において、女性の役割はより活発化する。民族と国家の実施に関して女性は積極的に国家、政治、経済および軍事に協力することが要求される^⑩。戦時中の日本は国家総動員法によって女性は戦争を支える活動に動員されたが、出征する兵隊を見送り千人針を織たり軍需工業に従事するというかたちで、女性は戦争協力に参加したとしても活動場所が固定化されていたことによって女性、戦争、国家というアンビバレンスな関係性が見える。

このような環境の中で、国家の使命を背負って占領地に進出した臨時南方女性作家がいた。軍人と共に外地の戦線に渡った彼女たちは、支配者の側に立ちつつ活発に戦争協力を行なった。臨時南方女性作家は上に記した戦争とジェンダーの枠組みから見ると例外である。

戦後五〇年以降、文学や歴史、思想史といった分野で戦後の再検討の動きが活発になり、戦争の被害者から加害者意識へのパラダイム転換が起こっている^⑪。こうして現在、日中戦争から大東亜戦争までに渡る問題を新たな視角から検討する取り組みが始まっている。具体的に言えば、戦線に赴いた女性作家の戦争協力という研究が活発に取り上げられていることがその一例である。敗戦後、戦争に協力した作家たちは自身の戦争責任を追及されたため、しばらく戦争と文学というディスクリールに関する研究が空白化していた。しかし、

戦争の問題を再検討する研究動向を受けて、女性の戦争協力の問題を追究する研究が發展していく。中川成美によると、「戦後空間の中で無効化させられたエクリチュール（戦争賛美・擁護の言説）を現在に問うことの「意味」は、いまわれわれが認識している言説構造の弱点を知ることにある」²⁰。「女性と戦争」とりわけ女性が戦争に加担した／させられた問題をめぐる研究が看過されてきたことを受けて、本研究は、女性作家の戦争加担を背景に書かれた作品に光をあて分析しようとするものである。

前述したように、本研究が対象とするのは、林芙美子、小山いと子、佐多稲子を中心として、戦時中、インドネシアに派遣された女性作家の文学である。「女性作家」および「インドネシア」を研究対象とした理由は、そもそも南方に派遣された作家は男性の人数が多いため、「南方」をめぐる女性作家の研究がいまだに少ないという事実が挙げられる。一方で、南方諸地域のなかでも彼女たちが最も長期にわたって旅したり滞在したりしたのは、インドネシアであった。それゆえ、実際にインドネシアを舞台とした作品、もしくはインドネシアの経験に基づく作品が多くあり、彼女たちの南方行の中心だと考えられるため、本研究対象を採用した。

南方に派遣された女性作家の研究は、作家個人の戦争体験に注目する傾向が強い。例えば、長谷川啓は佐多稲子の夫婦関係の崩壊という作家の伝記的要素が与えた中国・南方での戦地慰問の経験や作家に課された戦争責任追及について厳密な考察がなされている。高京子は戦争協力に対する作家の主観性と戦後作家の成熟を明らかにした。中川成美は戦争とジェンダーの視点から林芙美子の戦争協力について検討した。山下聖美はインドネシアにおける林芙美子の足跡を辿る現地調査を中心にした研究を活発に行っている。無論、

これらの研究から明らかになったことは多いが、インドネシアという一つの場所を定点観測地として定め、現地での生活を体験した複数の作家を俎上にあげた研究がいまだになされていなかったため、本研究は、女性作家とインドネシアというテーマを研究対象とした。論者の観点からは、これまでの研究はほとんど日本人がなされている研究であるため、南方を日本帝国領土の一つの地域として見なす傾向があったと考える。しかし、実際のところは南方と一括りにされる各地域には政治様式や社会システム、文化の差異がある。この差異は、作家の行動をその地域に対する認識を考察するうえで重要である。本研究を通して、各地域の特徴がどのように作品に描かれ、どのように作家がその地域の特徴を把握したのかを検討するために、ミクロの視点から南方表象を考察する。

南方に派遣した女性作家の研究は、彼女たちの南方派遣を「緊迫感がない楽しい旅行」にすぎないと言った評価をよく受けた。例えば、高山京子が林芙美子による南方の紀行文を「ただの旅行記と大差がない」と評価し、長谷川啓は佐多稲子について「作家的好奇心を楽しんでいるような、日本の占領地を旅することの後ろめたさなどはいささかも感じられない気楽な旅行記さえ発表している」と指摘している。その結果、作家の南方経験を検討する研究は、戦時中の作品の場合、国家の命令に対する彼女たちの無力さを強調する傾向がある。一方、戦時中には語れないことを戦後に語ったとされる彼女たちの戦後作品は、戦争責任の追及を避ける戦略に留まる傾向がある。こうして、彼女たちの南方経験の本質が不問に付されたままとなっているのが現況である。

以上を踏まえ、本研究は以下の三つの問題を提起する。第一に、彼女たちのインドネシア体験を深く理解するために、どのようにインドネシアを見たのか、そして作品の中でど

のように表現したのか。第二に、「女性の移動と文学」という分析枠組みでは、女性が自国から離れると自立心を獲得し新たな生き方を見出すことが想定されている²⁸。しかし臨時南方女性作家たちは戦時中という特殊な時空間の中で国家の命令により外国へ行って、当時の権力から抑制を与えたため、以上の想定が彼女らに適用しがたい。軍政の厳密なコントロール下に置かれながらも、作家としての本心と女性作家というアイデンティティが彼女たちの表現にどのように影響したのかを検討する。第三に、植民地と女性の紀行文研究（*Women's Travel Writing and Colonialism*）²⁹の関わりを視野に入れて、なぜ女性作家が書いた紀行文もしくは旅に基づいた作品を手厳しい評価を受けることを検討し、インドネシアの旅に基づく彼女らの作品を再評価する。

本研究の目的は、以上の問題を中心に捉えて、南方に派遣された女性作家の文学におけるインドネシアの経験を照射することにある。

第三節 章立てと研究内容

右掲の問題を検討すべく、本研究は全体を二部に分けて南方に派遣された女性作家の作品を考察する。次章以降の構成と内容は以下の通りである。

第一部では、林芙美子を中心に、インドネシアを舞台とした作品における戦中と戦後の連続・非連続性、作中のインドネシアの位置づけを検討する。

第一章は戦時中に執筆された三つの紀行文、すなわちボルネオ視察の結果報告「赤道の

下「、ジャワ農村の共同体を描写した小品「南の田園」、スマトラ横断のルポルタージュースマトラー西風の島」を取り上げ、各地域の表象とその特徴を考察する。さらに各作品における作家の戦争協力の痕跡を探りつつ、現地に派遣された理由を検討する。最後に、ジェンダーと植民地主義の問題に焦点をあてることで、林芙美子の紀行文を再評価する。

第二章は、林の戦後作品、とくにボルネオ経験に取材した連載小説「古い風新しい風」を取り上げ、ボルネオを軸として作中における戦前から戦後にかけてのさまざまな転換点を考察する。表象上のボルネオ、現実のボルネオ、回想上のボルネオという三点に分けて考察する。この章でも作家が認識した「西洋の眼鏡」を探るため、アグネス・キース『風下の国』の受容を考察する。

第三章は、同じくボルネオに取材した短編小説「ボルネオダイヤ」を通して、植民地化されたロマンスを考察する。作品における一粒のボルネオのダイヤモンドを軸に、各人物にとって多面的な意味づけがなされるダイヤモンドの表象を検討しつつ、ダイヤモンドを通して愛情を象徴しようとした各人物と当時国家の圧性との関係性も考察する。また本作品の考察によって、林芙美子の戦争観、とりわけ「厭戦」の要素を析出する。

第四章は「荒野の虹」を対象に、戦後、スマトラから帰還した復員兵の自己喪失から自己発見に至るまでの過程を考察する。林にとってのスマトラの経験・記憶の二面性を検討し、作家の南方行の本質を究明する。

第二部は小山いと子と佐多稲子の作品を考察する。

第一章では、小山いと子『椰子真珠』を対象として、スマトラにおける多言語状況の中の社会・言語階層と旧帝国語であるオランダ語と新帝国語である日本語の間に生じている言語による権力闘争について考察し、作家のスマトラ認識を明らかにする。

第二章は佐多稲子「挿話」を対象に、スマトラに滞在した作家の心理的側面やスマトラに対する作家の知覚を把握するため、作品に登場するスマトラ農園の「音」を考察する。

注

- ① 後藤乾一『日本占領期インドネシア研究』（龍溪書舎 一九八九年一〇月、一三頁）
- ② 早稲田大学大隈記念社会学研究所『インドネシアにおける日本軍政の研究』（紀伊国屋書店 一九五九年五月、一三三頁）
- ③ 倉沢愛子『資源の戦争―「大東亜戦争」の人流・物流』（岩波書店 二〇一二年九月、二五七頁）
- ④ 前掲、④ 後藤乾一『日本占領期インドネシア研究』（龍溪書舎 一九八九年一〇月、一三頁）
- ⑤ 後藤乾一『東南アジアから見た近現代日本―「南進」・占領・脱植民地化をめぐる歴史認識』（岩波書店 二〇一二年五月、二五頁）
- ⑥ 同上、七八頁
- ⑦ 同上、七三頁）
- ⑧ 前掲、早稲田大学大隈記念社会学研究所『インドネシアにおける日本軍政の研究』（紀伊国屋書店 一九五九年五月、一一〇頁）
- ⑨ 『文芸年鑑・二千八百三年』（桃蹊書店 一九四三年八月）
- ⑩ 神谷忠孝、木村一信『南方徴用作家―戦争と文学』（世界思想 一九九六年三月、七頁）
- ⑪ 同上、八頁

- ⑫ 桜本富雄 『文化人たちの大東亜戦争―PK部隊が行く』（青木書店 一九九三年七月、四八頁）
- ⑬ 卷末資料「極秘 新聞、雑誌記者、女流作家南方派遣指導要領 陸軍省報道部」市川市文学館所蔵
- ⑭ 中川成美 「女は戦争を戦うか―林芙美子の戦時下」『語りかける記憶 文学とジェンダー・スタディーズ』（小沢書店 一九九九年二月、六七頁）
- ⑮ 望月雅彦 『林芙美子とボルネオ島―南方従軍と『浮雲』を巡って』（ヤシの実ブックス 二〇〇八年七月、一二四頁）
- ⑯ 小山いと子 『人生十色』（主婦の友社一九九〇年一月、二二四頁）
- ⑰ 美川きよ 「冬の夜話」『満洲公論』第三卷 第二号（満洲公論社 一九四四年二月）
- ⑱ 前掲、小山いと子 『人生十色』（主婦の友社一九九〇年一月、二一〇頁）
- ⑲ Joshua S. Goldstein. 2001. *War and Gender*. United Kingdom ; Cambridge University Press
- ⑳ Nira Yuval-Davis, Floya Anthias. 1989. *Woman-Nation-State*. London; MacMillan 六七頁
- ㉑ 前掲、神谷忠孝、木村一信 『南方徴用作家―戦争と文学』（世界思想 一九九六年三月、七頁）
- ㉒ 前掲、中川成美 「女は戦争を戦うか―林芙美子の戦時下」『語りかける記憶 文学とジェンダー・スタディーズ』（小沢書店 一九九九年二月、六〇頁）
- ㉓ 山出裕子 『移動する女性たちの文学―多文化時代のジェンダーとエスニシティ』（御茶の水書房 二〇一〇年一〇月八頁）
- ㉔ Sara Mills. 1991. *Discourse of Difference; An analysis of women's travel writing and colonialism*. London ; Routledge

第一章 林芙美子のインドネシア紀行文の研究

―「赤道の下」、「南の田園」、「スマトラ・西風の島」を中心に

序

本章は、戦時中のインドネシアでの滞在経験に基づいて制作された林芙美子の三つの作品を取り扱っている。「赤道の下」(『東京新聞』一九四三年六月一日より一三日三回連載)、「南の田園」(『婦人公論』一九四三年九月〜一〇月号)、「スマトラ・西風の島」(『改造』一九四三年六月、七月)である。各作品ではインドネシアにおける重要な地域について書かれており、「赤道の下」がボルネオ島、「南の田園」がジャワ島、「スマトラ・西風の島」がスマトラ島ということと、作品それぞれに地域の特徴を見ることがができる。全ての作品は一九四二年一月から一九四三年五月に渡るインドネシア滞在中の詳細な視察による成果である。

この三つの作品を選んだ理由を述べる。まず、南方の紀行文から、全集に収録されたのは「赤道の下」のみである。これは初出である「東京新聞」で全三回連載の中から第一回と第二回のみ収録されている。他は戦時中の雑誌や新聞に散り散りに掲載されているため、整理が必要である。高山京子が指摘したとおり、戦時下の林芙美子に関する研究を遅らせ

ている要因の一つとなったのは「戦時中に書いたものはあまりにも欠落していたため」であった^①。インドネシアに関する戦時中の作品の研究はあまり盛んではないということがわかる。

二つ目の理由は研究者の立場／目線である。例えば、鳥木圭太は「女性作家の見たへ南方」―林芙美子と佐多稲子のスマトラ―という論文を執筆した。論文の中で林芙美子と佐多稲子が書いたスマトラについての作品を対比的に考察した上で、作中における南方の描き方から作家の特徴性を明らかにした。しかし、「スマトラ」に関する作品から「南方」を見ることという視角に対して論者は疑問を持っている^②。南方の地域は社会や文化、政治などの特色が各自強いため、それらを共通とみなすことは危ういと考えられる。スマトラを見て南方を見るという視角は恐らく日本人特有の視点である。戦時中の南方は日本帝国領土として統一した地域と見られており、この見方は現在までも続いているという前提している。しかし、インドネシア出身である論者の視点からみると、南方の各国には文化や歴史や政治の相違点があるためミクロ的に見ることが必要ではないか考えられる。ここから、作家が描いた作品のなかで、各地域の特色性を把握できるか、そして作中において表すかどうかを本論の一つの問題提起とする。

最後の理由は作家の南方旅におけるインドネシアの意義を検討するにある。林芙美子は南方の様々な地域を旅して回ったが、その半年の中での四カ月間をインドネシアで過ごし

た。さらに、インドネシアに派遣された四人の女性作家の中でも、林芙美子のインドネシア旅はほぼ国土の三分の二に至り、他の作家と比較して林芙美子のインドネシア旅の範囲は広大であると言える。こうして、作家のインドネシア旅での空間と時間の側面から考えると、林芙美子にとってインドネシアとは彼女の南方旅の中心であると言えるであろう。他の南方地域と比較すると、インドネシアに関する作品の数がより多いという事実もこのような背景に基づくと考えられる。

インドネシアについての作品は時期によってジャンルごとに区別することができる。戦中には詩や従軍記もしくは紀行文という形で作品を執筆しており、小説はほとんど戦後に発表されたものである。本論は戦時期に書かれたものに注目し、一方で戦後の作品は次章に考察する。このように、作家が見たインドネシアの描写では戦中と戦後の差異を見ることができ、軍政の使命に対する作家のネゴシエーションの手掛かりも得ることができ。そして戦中で語れない・語れられないことの理由も究明できる。

戦時中のヘインドネシアものゝ研究状況を触れたい。これまで、南方に関する資料は望月雅彦の『林芙美子とボルネオ島く南方従軍と『浮雲』を巡って』(ヤシの実ブックス二〇〇八年)において多数紹介され、女性作家の南方旅を研究する人にとって研究の先端となってきた^③。また、山下聖美は二〇一一年より現地調査を中心にした「林芙美子とインドネシア」の研究を活発に行っている。続いて、中川成美は「女性は戦争を戦うか」

（『語りかける記憶―文学とジェンダー・スタディーズ』）においてジェンダーの視点から、戦争に加担した女性作家の作法と役割を明らかにした^④。この論文の中でも林芙美子の〈インドネシアもの〉が触れられている。しかし、いずれにせよ作品の内容に関する分析が充分でないと考えられる。

ボルネオ、ジャワ、スマトラについての紀行から作家がどのようなインドネシアを見たかという点において、先行研究から既に明らかになっているところがある。例えば、「スマトラ―西風の島」の考察より、鳥木は「当時の南方を紹介する紀行文に多く見られる、人種や民族を描く際のステレオタイプを林芙美子もまた踏襲していることが窺えるが、彼女はそこに止まらず現地の人々と積極的に関わり合いを持ち、彼らとのコミュニケーションを通して現地人の姿を描き出すとする」と指摘している^⑤。つまり、林芙美子は現地人との厳密な関係から南方とりわけインドネシアを見ているのである。また、山下聖美も「資源も重要であるが、林芙美子の関心はそれ以上に、この地において、どのような人々がどのように生活を営んでいるのかということにあった。人々への眼差しの深さ、これが林芙美子の紀行の最大の特徴である」と述べている^⑥。要するに、林芙美子のインドネシア紀行文においては「現地の人」が重要なキーワードである。

林芙美子文学の研究の中における従軍記の研究も実際の所あまり盛んではない。荒井とよみが言及したように「戦争責任の追求を不問にするというようなことではない、無視

がある」^⑦。単行本化した中国の従軍記は、「戦線」と「北岸部隊」の研究が進んでいるが、南方の従軍記の研究は現地調査のレベルだけで、全体的に双方の研究の数がまだ少ないと言える。それに加えて、それらの従軍記は痛烈に批判され、厳しい評価を受けた。例えば坂垣直子は中国の従軍記、『戦線』及び『北岸部隊』（一九三八年）について「従軍記でありながら従軍中の身辺記事が多く、しかも非常に非インテリ的である」と指摘している^⑧。一方で、南方の従軍記に対して、高山京子は作家の立場を批判し、紀行文に戦争が描かれていない理由について、作家の戦争協力の行動と性格は「作家としてではなく、一人の女性としてのものだった」と言い、作家的基盤の脆弱があり、林芙美子のルポルタージュは「どれもただの旅記と大差がない」と述べている^⑨。

右記の問題背景を踏まえて、本論は各作品の考察の中から三つの問題を提起する。第一はこの三つの作品の考察から、林芙美子がどのようにインドネシアを見たか、各地域それぞれの固有性を作中ではどのように表現しているかを明らかにする。第二はこの戦時中で書いたものが軍政下の命令で執筆されたため、作品における当時地域軍政の政策と作家の戦争協力との関係性を検討する。最後の第三に、ジェンダーとの関連性を視野に入れ、戦争や植民地という特別な空間で女性が書いた紀行文を再評価する。

第一節 林芙美子とインドネシア；メデイア、ルーツと作品の概要

本論で取り扱う作品を紹介する前に、林芙美子のインドネシア経験は当時のメデアでどのように描き出したかを簡単に紹介したい。インドネシアに滞在した間に、日本のメデアで作品を発表するほかに、滞在中の活動はインドネシアと日本の両方のメデアで掲載された。

例えば、林芙美子の到来の前、現地の新聞には作家の素描や人気作品などが紹介され、さらにいつインドネシアに到着か、どのような計画を立てられていたのかが記述されている。一九四三年二月一二日、東ジャワ州で行われた現地女性会との座談会のことも度々掲載され、作家のインドネシア旅における一つのハイライトになったと考えられる。この女性座談会については「Soeara Asia」(アジアの声) 日刊新聞で一九四三年二月一二日、一三日と一六日で連載された。記事の内容は座談会の準備、座談会時の写真が掲載され、座談会中に行われた林芙美子と現地女性との対話も現地語で述べられている。インドネシアのメデアは、当時林芙美子の来訪を、現地の女性運動に新しい風のような新鮮なアイデアや希望を齎す女性というイメージで打ち出していた。

一方、林芙美子がインドネシアで滞在した経験のなかで、日本のメデアにおいても注目されたのがジャワの農村の共同体である。この活動について『ジャワ新聞』一九四三年一月一六日で「林女子・サマサマ生活へカンポンで”美しき放浪記”執筆」という

記事で林芙美子のジャワの農村での共同生活の計画やその実績が掲載される。この記事においてジャワ農村で共同生活する目的は次のように述べられる。

原住民はみな日本の指導のもとに嬉しそうに働いているが、矢張り貧しい人はいらる、そしてこの貧しい人の生活のなかに私たち日本人が学ばなければならぬ尊いものがあるのではないか——こうした考えから私はこの尊いものを掴み、南の人々をよりよく認識するためにこの人たちの生活の中に融け込んでゆくつもりです。

続けて同月一九日において、現地での共同体に対する報道に連続して「純な心に胸打たれ……林さんの”新生活”を訪ねる記」という記事が掲載され、林芙美子の共同体への感想が述べられている。「なんといふ静かでせう、さうしてなんといふ落ちつきでせう。私はここにくるまでジャワの農村がこれほどに真な意味で美しいとはおもはなかつた」とこの農村への憧れが述べられている。この経験は南方研究に燃ゆる内地の人にとって何か貴重なものを齎すと記者の希望も最後に記述される。このように、インドネシアメディアと日本メディアにおける林芙美子のインドネシア経験のイメージの差異が窺える。いずれにしてもこの南方派遣の使命において林芙美子の存在や役割が照らし出され、報道班の一員として林芙美子は役目を果たしたのである。

本論で取り上げられる三つのインドネシア紀行文は林芙美子のインドネシア旅の順路を暗示している。林芙美子は一九四二年一二月の中旬、シンガポールからインドネシアのジャカルタに到着した。ジャカルタで一週間ほど過ごしてから、朝日新聞の飛行機で女性作家、美川きよとともに東ジャワ州へ赴いた。当時、南方における軍の宣伝班の広告活動が不足しているという状況があり、軍政は大東亜共栄圏を宣伝するために現地の新聞の発行数増加を要求する。それを達成するための軍政の一つの方針として、日本の新聞と現地の新聞を併合し、軍政管理の下で新創作新聞を発行した。朝日新聞は特にジャワとボルネオで日本語とマレー語のバイリンガルの新聞支社を設立した^⑩。この新聞支社の設立を支援することは林芙美子の一つの役目であった。それゆえに、東ジャワで三日間過ごしたのち、林芙美子は現地の視察とボルネオ新聞の設立を支援するため、一月一五日に南ボルネオ州バンジャルマシンへ出発した。

ボルネオでの三週間ほどの滞在から、林芙美子は作品を多数に執筆した。詩をはじめとして、「マルタプウラ」(『ボルネオ新聞』一九四二年一月二五日)、「雨」(『ボルネオ新聞』一九四三年一月二九日)、「タキソンの浜」(『ボルネオ新聞』一九四三年二月一五日)が次々と連載され、帰国してから一カ月の後、東京新聞でボルネオの通信物「赤道の下」が三回連載されている。以下のように紹介していく。

「赤道の下」の第一部において林芙美子はボルネオに到着した最初の感想、川を中心とする現地人の日常生活、戦前より継続されてきた日本人の事業を述べている。第二部ではボルネオにおいてオランダ政府が実施した人口政策「コロネーサシ」について作家が視察した成果が記述されている。コロネーサシというのは人口の少ないボルネオに他の地方から農業移民を移動させる政策である。最後の第三部で林芙美子が現地という言葉を日本読者に紹介している。ボルネオでは林芙美子が「マカンアンギン」（直訳…風を食う）という言葉に魅了され、この言葉は「南の田園」に再登場した。「マカンアンギン」、風を食ふと云ふのは、散歩の意味ださうだ。風を食うると云ふ語源はどこから出たのか、あまりにうがつていて、一人で微小してゐる」というふうに述べ、この言葉に魅了したようだ。

「赤道の下」によると、林芙美子は視察のために現地の部落まで足を踏んだが、やはり日本人スタッフとの接触が多かったようだ。作中では「ダイヤ族の顔は日本人そっくりで、おや誰かに似ているといったような顔にもあつた」と述べられ、恐らく短時間的に現地人と交流しており深く視察することがなかった。それゆえに、ボルネオに滞在した後のジャワ滞在に林芙美子が現地人との共同生活の提案をあげたことを推測する。

一九四三年一月六日林芙美子はスラバヤに戻り、六日後、スラバヤ州モジョケルト県トラウス村の村長の家に滞在し始めた。約二週間の滞在で、この村での正式的な活動は日本語教育の普及や農産状況の視察、区長と村長の会議に参加することなどである。ほかに、

林芙美子の個人的な活動として、彼女は村の収穫祭りに訪れ、村の周辺や市場などを視察し、村長の親戚の結婚式にも誘われたようであった。この村にはほかに日本人はいないが、現地人との交流には問題がなく、林芙美子は独自のネットワークを作っている。林芙美子の手帳によると現地の区長や県長などと仲良くして、モジヨケルト県長の案内で、隣の街、マラン市の市長の住宅で開催された饗宴に誘われたと記録があった。この県長との関係は林芙美子が帰国した後も続いており、一九四四年で発表した随筆「美しい言葉」において、帰国の六カ月後、モジヨケルト県長は林芙美子の東京の住宅に訪問したことが記述されている^⑩。

このトラワス村での共同生活は『婦人公論』で発表した「南の田園」という作品に一九四三年九月と一〇月に未完成の形で連載される。第一話には、「トドン」の挿話」とタイトルが付けられた。トドンという人物は林芙美子の案内に役する郵便配達の若い現地の男である。「トドン」の挿話は主人公、この場合は林芙美を指しており、トドンと共に村で活動している林芙美子の一日を語る作品である。作品の冒頭ではまさに現地人の朝の習慣に溶け込むように、林芙美子が冷たい水で水浴びしたり、トウモロコシのおかゆで朝食を摂ったり、現地のサロン（布）をスカートに腰に巻いたりなどで一日をはじめるところとが述べられている。ジャワ新聞の記事で記述された「林史の眼に映る原住民の真の生活描写」と言った評価のとおり、林芙美子は目を使い、周りの風景や個々の原住民について

厳密な視察を行っている。彼女は接触した各原住民の出身地、学歴、年齢、家族の経済状況を知り、この人たち一人一人の心の機微まで感じ取っている。

「南の田園」の第二部、「水田まつり」においても「トドンの挿話」と同様、ガイドと共に村の一日を語っている。百姓であったキホイは今回林芙美子のガイドになった。彼は日本語を小学校へ案内し、村の収穫祭りにも誘っていた。トドンおよびに、キホイの家族や職業や彼らのふるまいなどが林芙美子の視察対象となった。ガイド、案内者、運転手は作家とともに旅して回る人物たちであるため、旅中で目の前に存在する人々から視察を始めるのではないかと窺える。直接現地人との交流が足りない場合に、運転手や案内者が現地を見る窓のように取材の対象になる。

東ジャワから林芙美子は短時間でバリ島に旅をし、ジャワ島に戻ってからスマトラ島へ渡る前にバタビアに寄っていた。一九四三年三月三日に芙美子はバタビア（現ジャカルタ）から南スマトラのパレンバン市へ飛行機で出発した。手帳にはパレンバンの滞在中の活動はみずほ学園という日本語学校で教えることとパレンバンの油田掘削施設を視察したことが記録されている。パレンバンの最初の夜、林芙美子は「ケハヤマタハリ」（*Kahayabatahari*）という劇団を訪問し、舞踊の演奏を見に行った。二日間パレンバンで過ごした後、ジャンビ、パダン、ブキチンギ、メダン、ブラスタギ、アチェーという順路でスマトラの西方へ横断し始める。また北スマトラのメダンで林芙美子は多稲子と再会してい

る。メダンからシンガポールへ旅を続け、マニラを経由して日本に戻るといふふうには林芙美子の南方旅がおさめられた^⑩。

このスマトラの横断旅は「スマトラ・西風の島」(『改造』一九四三年六月一七月号)に語られている。これも「南の田園」と同様に、未完成の形で二回連載されている。恐らく未完成であることが全集に収録されていない要因であろう。「スマトラ・西風の島」は南スマトラのパレンバンに到着から西スマトラのブキチンギへの七六〇キロメートルに至る旅についての旅行記である。車の窓からスマトラの農園や村々を見ながら、スマトラの自然資源を視察している。この作品では旅が主要な活動であったため、林芙美子は旅に関わった人物のみ交流して、「南の田園」のような現地人との接触は描かれていない。

このように各作品はそれぞれの特徴を明確に打ち出しており、語り方の差異も見えて来る。論者は作家の滞在時間の長さや地方の自然、さらに各地域における現地の軍政の政策によって各作品の視察対象が異なると最初に想定している。

倉沢愛子が言及したとおり、南方における日本軍政の定型は殆ど統一であるが、各地方の異なる社会文化、経済、歴史、政治といったような特色に対しては、軍政が政策を發動する際にその地方の特色と調整しなければならないのである^⑪。南方の国々も旧西洋植民地のパターンが異なっていたため、各国において軍政の政策及び目的も様々である。これについて、中野聡は、東南アジアにおける日本軍政の組織や、占領地の戦前の政治体制・

行政機構などの在り方に応じて多様であったと述べた^④。尚、同じ欧米植民地でも、戦前に自治化や政府機構の現地人化が進んでいたことや対米英戦略との関連で、ビルマとフィリピンでは、それぞれ一九四三年八月と一〇月に日本軍占領下ではあるが形式的には独立政府が発足して軍政は廃止されたというように東南アジアの国々における政治の様相が明確にされた。一方で、蘭印、英国のマレー、英国のボルネオにおいては日本軍政が厳烈に実施されていた。それとくらべると、インドネシアは特別で、オランダ政府が現地人に西洋文化をあまり普及しなかったため、西洋の文化と西洋の精神の影響が薄かった。それゆえに、日本は大東亜共栄圏の宣伝を現地人に浸透しやすいと判断したのである。

第二節 宝庫とされたボルネオ―「赤道の下」の一考

南方へ出発する前に、林芙美子はいくつか南方に関する資料や本を読んだが、主に西洋人が書いた本ばかりだそうである。例えば、『週刊婦人朝日』で発表した最初の南方の通信物「南方だより」では、南方への興味を抱いた一つの要因はピエール・ロチの小説を読んだからであると述べられている。

別にロチ宗ではありませんが、私も少女の頃はロチのお菊さんや旅行記などを読

み、南の土地への旅を非常にあこがれて考へてみたものです。煙草の葉のやうな牛島のマライを地図で眺めてみますと、昔の人が極楽の絵を描いてゐたのはこの常夏のマライの風景ではなかつたのかとも空想されます^⑮。

また、東京を発した時、友人が贈った北ボルネオに暮らしていた英国人女性アグネス・キースの本「ボルネオ―風下の国」を読み、林芙美子の頭では「ボルネオ」という所を既に快樂の場所として空想が構築されている。「作家の手帳」（一九四六年）において、「英国人、アグネス・キース女史の風下の国と云ふボルネオの事を書いた小説を読んでボルネオで雇つた下男と下女のみをあつかつたその作品にどんなにか共鳴するものを感じたのです」と記述し、そこから林芙美子はボルネオに対して初めて非常な関心を持つのである^⑯。このようにして、南方へ出港する前に西洋人が構築した南方のイメージが林芙美子の中に内面化されている。

作品の考察に入ろう。まず、ボルネオが描かれた「赤道の下」から林芙美子がどのようにボルネオを見たか、そして作品をどのように表現したかを検討する。ボルネオは川を中心にする生活という特徴をもつ地方である。交通、経済、住宅、文化、土着民族の日常生活が街を分ける川々に頼っている。林芙美子はこのボルネオの特色性を十分に把握し、それを彼女自身の文学に還元する。

バンジェルの町の交通と云うものは水運の便以外には奥地へ行く自動車道がわずかに開けている位で、水上がまるで鉄道のような用をなしていた。町のなかを黄色いようなバリト河が流れていて、その支流のマルタプウラの流れも相当の河幅を持つている。珍しいことには、ここで土着民のメインストリートはみんな水に向かつて開けられていて、買い物をするにはプラウ（土民の船）に乗って行かなければならない。朝夕の河の上はまるで玩具箱をひっくりかえしたような沢山の船の往来である。一日このプラウの出入りを見てゐて飽きることがない。日本のお伽話に一寸法師が赤い椀の船に乗って箸のかいを持つてゐる絵があるけれど、こっちは雨傘ほどもある赤いまんじゅう笠をすつぱりとかぶつて、細くて平べつたプラウを漕いでいる図は一寸法師の物語のようでもあつた。

右記の引用はボルネオの風景が正確に描写されている。バンジャルに限らず、ボルネオ人の全ては殆ど川を中心に暮らし、川沿いに家を建て、家の入口が川に向かったため、家々の前に小舟が出たり入ったりする景色がボルネオの特徴である。ここでは川が道路の替わりとしてボルネオ人の移動の手段となる。

川面に数々浮いている小舟が作家の目にはまるで「玩具箱」と「一寸法師」のように

見えている。「玩具箱」と「一寸法師」の言葉遣いは子供の世界に潜入するように作家がボルネオの素朴さを照らし出そうという意図が窺える。他の作品と比較すると、例えば戦後に書かれた随筆「作家の手帳」においてボルネオは「人間はどこにゐるのかと不安になるほど大自然な景色」「何の物音もない森閑とした広い土地」といったように野性的に描写され、「赤道の下」で描かれた「清純」なボルネオの描写となんだか矛盾している。このように、戦中で描かれた「ボルネオ」は戦後に書かれたものは異なり、日本の読者が受容しやすいようにボルネオの表象が美化されている。

ボルネオの川の独特な植物、イロン・イロンという浮草が作家の目にとまる。「赤道の下」の第三部に次のように述べられている。

ホテルの裏にあるマルタプウラの河岸に出てみると朝夕の潮のひき具合で、濁つた水の上をすさまじい勢いで沢山のほてい草が流れている。これをウオ―ターヒヤシンスとも云うそうだけれども、インドネシア人はイロン・イロンと云っていた。根のかたまりあつたイロンの草が、潮流のかげんできしきしと音をたてて流れているのは何とも壯観である。水草の流れを見ていると岸の方が動いている錯覚にとらわれる。

(中略) 人の運命を浮草のよう　だたとたとえた歌もあつたけれど、イロン・イロ

ンの草の流れは第一に旅人の眼をひくものである。

このボルネオのイロン・イロンは作家の戦後文学に影響を与える。例えば、戦後の小説「浮草」や、また「南方文学」を代表とした『浮雲』も、その言葉は川上に浮いたり流されたりするイロン・イロンからの靈感だと思われる。『浮雲』において「ほてい」という言葉が登場する。さらに「浮雲」の言葉自体が作家の日記の断片（ボルネオにて）に初めて現れたため、ボルネオのイロンとの関連性が強く感じられる。川流に漂う浮草のイロンは「人の運命」と例えられ、一つの場所に固定せずに次々と移住するもしくは放浪するところが作家の人生を連想させる。山下聖美は「水の上を漂いながら、どこかへと向かっていくは林芙美子がボルネオ滞在中に目にした重要なモチーフである」と指摘している。以後、林芙美子は自身の文学観や人生観を見いだしていくというふうにボルネオのイロンを解釈している^⑩。

右記で引用した「イロン・イロンの草の流れは第一に旅人の眼をひくものである」との節は旅行者である作家の目に映っている。現地人にとってこの草は珍しいものではなく、常に無視される存在である。しかし、『放浪記』の冒頭で「私は宿命的放浪者である」と言った作家だという点を考えると、川に漂うこのイロンは「放浪者」や「旅行者」である作家の人生と何だか類似している。山下はこの「川の流れ」を「戦争」の事を暗示し、川

面に浮いているイロンは激動の時代に南方に派遣された作家のような流される人々として解釈する。作家の人生を反映すると、「宿命的に放浪者である」^⑧ 林芙美子は、イロン・イロンと同様に運命によって様々な所へ移転する。イロンの動きも作家の心理の揺らぎを反映している。戦争という不安定な時代に「すべて浮雲のごとく、今日再びこれらの美しき友情に逢う人たちもなく」と作家の日記で言及したことから、異国に派遣された仲間たちと二度と会えることができないかもしれないという不安が元に戻らないイロンの動きと一緒にであると解釈する^⑨。要するに、イロン・イロンは「運命」と「旅」といった作家の代表的な要素として表象される。

林芙美子のボルネオ滞在中の活動は主に二つに区別される。一つ目は現地で朝日新聞の支社の設立を補助することである。軍政は現地人への文化工作を実施するため、戦前からすでに存在した現地の新聞「カリマンタン・ラヤ」は朝日新聞に併合し、マレー語（インドネシア語）と日本語を結合したバイリンガルの形で新しくできた新聞「ボルネオ新聞」が設けられた。朝日新聞のスポンサーで来た芙美子は当時朝日新聞社員が言及したとおり「多忙を見かねて校正を手伝い」と記録が残され、作家の活動を間接的に想像することができる。その活動はボルネオの自然資源を視察することである。作家の手帳「ボルネオにて」の内容において、ほとんどボルネオの各地域における鉱山や林産資源や農林水産の事情が記される。ほかにはボルネオにおける労働不足や運送などのような自然資源を獲得する

ことに関する問題に注目する傾向がある。視察の結果は紀行に活字化され、「赤道の下」で次のように述べられている。

ゴムとか石油、ダイヤモンド、マンガンなんかも、特筆すべき産物だけれど、ともここでは紙数がなくて書ききれない。(中略)青々と水田が開けていて、若い日本の農林技師の人が、いまはせつせとこの移民の仕事をしておられる。このボルネオはスマトラや爪哇と違って、これからもどんどん人手のほしいところであり、土地は未開発の宝庫のように私には思えた。

右記の引用にはボルネオの資源が記されるだけでなく、それに関する問題も取り上げられている。ボルネオは天然資源に恵まれているのに、それを管理する専門家や労働力が不足したため、資源を取り扱うことに失敗した。林芙美子がボルネオの奥まで現地視察したことは当時のボルネオ自然資源を管理する努力の一つである。

労働不足の問題に関する対策として、戦前からオランダ政府が実施したコロネーサシ政策をやり続ける意見を述べる。コロネーサシは人口の密度が高いジャワ島から空地が多いボルネオ島のような地域へ農民を移住させる政策である。当時、日本軍政は各地域において自給自足の方針を立てたため、ボルネオにおける新しい水田の開墾や、鉱産の生産量の

増加のためなどといった理由で、ジャワからの農民をボルネオに移住させようと計画した。新しく来た労働者によってボルネオにおける農林産業や鉱業などの生産の増加を達成できると、ボルネオ地域における自給自足も可能であることが軍政の希望したものである。この方針が成功するとボルネオの豊富な自然資源を効果的に管理することが可能になり、これからのボルネオは「どんだん人手のほしいところ」になることが作中で表現されている。価値がある天然資源を多量に持っているのに、この土地がまだ磨かれていないため、作家は「未開発の宝庫」とボルネオを例えている。

ボルネオの代表的な自然資源といえば石油のことである。林芙美子が南方へ来る前の、彼女のボルネオの自然資源に関する知識は手帳で記されたとおり「ボルネオは石油の出たところしか知らない」。因みに日本にとってボルネオとは石油の生産地であることにすぎない。当時ボルネオに関する資料はほとんどが石油の油田地の情報であったため、林芙美子もボルネオに出発する前までは「多様な天然資源を含んでいる宝庫」というイメージがなさそうだった。ボルネオは蘭領の地域において南スマトラのパレンバンとともに石油の生産地として知られていたため、「石油に始まった戦争」と言われたほど大東亜戦争にとって重要な地域となった。

倉沢愛子は『資源の戦争』において日中戦争における日本の侵略的な姿勢に批判的であったアメリカは、一九三九年七月に日米通商条約破棄を通告し、石油の供給を制限し始め

たと言及している。そして一九三九年七月産国同盟が設立された後、アメリカは日本へモラル・エンバボーゴを発動し、対日輸出を禁止した。一方で満洲における石油開発の収穫は少なく、日本政府は南方から石油を獲得しはじめようと計画した。戦前からインドネシアに滞在した日蘭会商の海軍随員の海軍中左中節藤一によると、開戦という可能性も念頭に置いて滞在中情報収集にあたり、そのなかで石油対策についても調査を進めていた。中節は帰国後、海軍当局に、(一)ボルネオに特設燃料廠を設置すること、(二)そのためにタラカンとバリックパパンに工作隊を先発させることなどを提案していた。そして、それをもとに海軍では、一九四一年九月から日本軍による占領を想定した「南方油田復旧開発」構想を提案していた。従って、南方の占領地は主たる油田の区別に基づき海軍地区が定められている。南スマトラ州のパレンパンの油田地帯を陸軍、蘭領ボルネオのタラカン、バリックパパンの油田は海軍下で管理されている。このような理由で作家のボルネオ滞在は「大東亜戦争のための宣伝資料を収集すること」であり、南方派遣の目的を考える

と、ボルネオでの石油の確保という当時の現地軍政の政策と関わっている^⑧。

「赤道の下」は紀行というより現地の重要な情報のみ伝えられる通信物であり、フィクションの要素がまったく見えないという。全体の内容を見ると、この通信物から日本の読者へ伝えたいのはボルネオの日常生活の風景及びボルネオが持った自然資源の情報であると考えられる。この書物を通して、林芙美子の戦争協力がほのかに見て取れる。「未開

発の宝庫」といった表現は、遠く離れた資源が豊かな日本占領地が、日本読者に裕福の希望を生み出す意図を持っていると考えられる。

他の戦争協力の形は日本人と現地人のダイヤ族の類似性を強調することである。土着民のダイヤ族は「顔が日本人そっくりで、おや誰かに似ているといったような顔にもあつた」と作中で記述される。当時、日本が占領した国に対して実行した政策は「同化主義」といったレトリックである。「同化主義」はアジアを支配した西洋の植民地のパターンを見分けるため、最初はこの政策を台湾に適用していた^②。具体的な方法は言語を通して、日本人と同じレベルになるまで占領した民族に日本精神や文化などを吹き込むことである。他の戦略は日本と現地人の間で暮らし方や肉体的な類似を照らし出して、両方は同じ祖先から生まれた人種ということが新しい事実として宣伝される。

「赤道の下」における作家の戦争協力を考察した上で、やはり林芙美子は作品の執筆にあたって、作家というよりも報道班員の立場でたっているのではないかと考えられる。作品の内容はまるで通信ものであり、フィクションの様相がまったくみえない。

しかし、作家として、執筆意欲もしくは作家としての本心も検討が必要であろう。ボルネオの経験に関して、作家の本心を探るにはボルネオについての戦後の作品も見てみる。戦後に書かれた随筆「作家の手帳」は矛盾した形で「赤道の下」と連続したものである。「作家の手帳」において疎開生活の中で主人公はボルネオの記憶を思い出し、戦時中語ら

れなかった作家の戦争観もここに述べられている。戦時中に書いたもの、この作品を並べると変わらないのがインドネシアに対する作家の感想であることだ。戦時中と戦後の作品にも、ボルネオに対する作家の愛好が具体的に記述される。その一方、占領地での新しい開拓地の開墾に関する政府の政策について比較することによって批判的な要素を強調している。「作家の手帳」においてボルネオの農業を発達させるためジャワから労働者をボルネオ島へ移住させるオランダの政策を褒めつつ、同じく未耕作地満洲へ移動した日本人に対する日本政府の対応を批判している。「赤道の下」で記述したとおり、オランダの人口政策「コロネーサシ」は実施するまえに、必ず運河と住宅を造ってから移住を実施する¹⁰。しかし日本政府は満洲の開拓民に対してそのような準備を一切せず、「少しも平和な開拓にはならないのです」と作中で政府への作家の不満の声が述べられている。つまり、「赤道の下」で記述した「コロネーサシ」を通して、林芙美子は戦時中では語り得ない日本政府への批判をようやく「作家の手帳」で発言することになる。

第三節 ジャワにおける文化的アプローチ―「南の田園」の一考

「南の田園」を読むと、もっとも目に付くのが多量な現地語の登場である。作中にはカタカナで現地語の単語が多数記され、また日本語の言葉にも現地語でのルビが付けられ、

カタカナで書いた インドネシア語	インドネシア語 のルビ
ペナングア (Penanggungan)	木時計 (ケンロ ガン) Kentongan
タベエ (tabik) = 挨拶	事務室 (カント ル) (Kantor)
ガムラン (gamelan) = ジャワの伝統楽 器	田圃 (サワ) (sawah)
スウリヤ (Surya) = ヒンズー教の太陽 の神様	女中 (バブウ) (Babu)
パントウン (Pantun) = マライの四行歌	はい (ヤア、)、 奥さま (ニョニ ヤ) (Iya, Nyonya)
サッテ (Sate) = ジャワ風の焼き鳥	腰布 (サロン) (Sarung)
サロン (Sarung) = 腰で巻いた布	榕樹 (ウイリンギ ン) (Beringin)
バンブウ (Bambu) = 竹	羊 (カンビン) (Kambing)
ドリアン (Durian) = 果物の名	下男 (ジョンゴ ス) (Jongos)
ランビュタン (Rambutan) = 果物の名	水浴場 (マンデ ー) (Mandi)
ドクウ (Duku) = 果物の名	焼肉 (サッテ) (Sate)
アラマンデー (Alamanda) = 花の種	
チャンパク (Cempaka) = 花の種	何か歌って (ニヤ ニイ、ニヤニイ) (Nyanyi, Nyanyi)
ロンギン (Ronggeng) = ジャワの伝統 舞踊	水田 (サワ) (Sawah)
マカンアングン (Makan Angin) = 散歩する表現	小学校 (スコラ) (Sekolah)

作家がジャワの滞在から獲得した言語能力を見ることのできる。ボルネオに滞在した時日本ばかりと接触したことから比較すると、ジャワの農村での共同生活では林芙美子は様々な現地人との人脈を築き、彼らとの交流によって現地語の響きが聞こえる。それは左記の表でその結果、「南の田圃」で見られるように、現地語の響きが聞こえる。それは左記の表でまとめられている。

上記の一覧から、「ガムラン」、「サロン」、「パントウン」といったような現地の文化に関する言葉が作中には数多く記述される。語群を見ると、果物や水田等の言葉など、やはり村の暮らしから習得した言葉である。それらの言葉を作家は単に習っただけでなく、自らの生活にも使用した。例えばジャワで滞在する際に、林芙美子が「サロン」の布を腰に巻いた現地女性を真似した姿が映された写真が新聞に投稿された。現地人の生活にへ溶け込めるために服装、習慣、日常生活の在り方、交通などをまるで彼らのやり方どおりに真似していた。

彼女は事前に現地の新聞で作家として紹介されたせいにか、現地人から教えられたのが簡単な言葉だけでなく、文学的な言葉も幾つか紹介されていたそうである。例えば、「スウリヤ」(SURYA)という言葉は元の意味がヒンズー教の太陽の神様の名であるが、常にインドネシア文学では「太陽」を示す美的な言葉である。「太陽」を言う時は普通「マタハリ」(Matahari)と表記されるが、文学作品や歌や祈りなどのような文化的な文章において「スウリヤ」を使用することになる。「スウリヤ」の意味以外、林芙美子はこの言葉が孕んだ概念も把握したそうである。そのため「南の田園」の執筆に「マタハリ」より「スウリヤ」を登場する。このように彼女は現地の文学から受けたことは自分の文学へ還元するようになる。このような文学的な言葉は一般の村人から習得する可能性が低いと思

われるが、林芙美子は当時村長、市長や県長までといった教育を受けた上流階層の人物たちと交流があったため、この人達から文化的な言葉を教えてもらったのではないかと考えられる。

一覧に「パンタウン」という現地の四行歌がある。筆者は「南の田園」において水田祭りを見に行く時、ガメランの音楽を聴きながら、ピサンゴレン（揚げバナナ）を食い、チエンパカの花の匂いを吸い込み、ロンギンの踊を眺め、四行詩のパンタウンを聞かされ、全ての感覚で現地の文化を実感した。「南の田園」で登場されたパンタウンは左記のように記述される。

ジカ テイダ カルナ ブラン
マサカン ビンタング テモール テインギイ
ジカ テイダ カルナ トアン
マサカン カミ ダタン クマリ

林芙美子は村長のスプノウ氏からパンタウンの意味を説明してもらい、その瞬間「南国らしいこの歌にきょほれてゐた」と思っている。パンタウンに対する作家の興味が「作家の手帳」に記述されている。この随筆にも別のパンタウンがローマ字で紹介され、「世界

のどこかに文学の祭典と云ふものがもよほされたならば、このパントウンも参加して人々の心にうるはしい思いを呼びおこす事と思えます」と彼女がパントウンに對して持った感想が述べられる。彼女は現地の文学を含めて魅了されることになる。林芙美子とパントウンについて、山下聖美がすでに指摘しており、「彼女にとってパントウンは、時代や国家の制約を超え、心にしみいり魂を潤す芸術そのものであった」というふうに言及した²⁸。パントウンを歌うとき、必ず他人からの反応が要るため、「文学の祭典」のように共同で楽しめる文学である。恐らく、長い戦争で人々が戦ったりお互いに嫌悪を感じたりした当時の時代を踏まえて考えると、パントウンから生まれた調和と連帯感は何だか心を癒され、作家が言及したように「心にうるわしい思い」、久しく文学を楽しめる気持ちを呼び起こしたのだろう。

このように、作中で登場する現地の言葉、文学、祭りから「南の田園」においてジャワの文化を強調する作家のモチーフが窺える。中川成美が「新聞のコラムは「南方」の生活、風物を連載して、その「異郷性」に言及するとともに、そのはれやかな側面を強調した。民間一般にあった「後進地域」としての「南方」イメージを払拭して、文化的な成熟を伝えようというイメージ戦略は、多くの定型化した文章を量産していく」と当時出版したものが文化を強調する傾向にある理由を説明した²⁹。確かに報道班として派遣された林芙美子はこの使命に応じ、ジャワを描く際に「文化」の側面に捉われている。しかし、彼女は

作家としての「本心」も忘れず、戦後の作品でも現地の文学を紹介したことは使命と関係なく、ただ南方の滞在時、自分を魅了させたことを明るみに出すという意図も持つのではないかと考えられる。

「南の田園」から作家の戦争協力の形は大きく二つに分けられる。それは作中で具体的に記述されたことと作品を通しての作家の宣伝行動である。作中によると、農村滞在中のもっとも目立った戦争協力は「日本語教育の普及」である。「南の田園」の一部「トドン挿話」において日本語を教えるために毎日トラワス村の隣、タミヤチン（Tamiajeng）の小学校に通っていることが述べられる。逆に、第二部「水田祭り」においては林芙美子が校長との打ち合わせのために、タミヤチンの小学校へ初めて行ってみている。このように時間の感覚として第二部の「水田祭り」の方がトラワス村に滞在した最初の日々が示されている。

作家はジャワ滞在前にジャワ新聞で言及したとおり「南の人々をよりよく認識するため、にこの人たちの生活の中に融け込んでゆくつもり」といい、ようやくその意図を実現して、まるつきり現地人のレベルまで溶け込んで彼らの生活様式を模倣する。「トドンの挿話」では林芙美子がトドンの案内で村を視察している際に、畦道を歩き「私は白のゴム靴をぬいで裸足になった。トドンは吃驚していた。土地の女たちがするやうに、私も裸足だと云うと、トドンはにこにこ笑った」と述べられている。「水田祭り」にもキホイ氏とプリゲ

ンへ赴く時、暫く休憩を取って、弁当を開いて昼ご飯を食べた時に、バナナの葉っぱで包んだご飯を手で食べて、「私は原住民をするやうに手で焼飯をたべた」というふうで記述されている。

ロバート・テイアニーによると西洋の植民地では支配者と支配された人たちの間に線を引いて、支配者と被支配者間の交流と越境を禁じた。西洋の支配者は被支配者に他者性を強調する傾向がある一方、日本植民地の行政官は「同化」を日本帝国主義における規則的な方式として定めている。このレトリックはまず日本占領地が地理的、歴史的、文化的な有様の側面から日本と共通しているといった現実から生まれた思考である。二つ目の理由は占領地の人々を改変するため採用された「同化」の政策からである^④。つまり、占領した人に対して、日本は「他者」というギャップを削除し、親近感を湧かせるように努力をする。インドネシアの場合、日本は「東から来たお兄様がインドネシアを白人から解放しに来る」といった昔のジャワの哲学者、ジョヨボヨの予言を軍政に利用して、日本とインドネシアの関係を「兄弟」のように思わせるという錯覚を作り上げた。朝日新聞が創刊したグラビア雑誌「ジャワ・バル」（新ジャワ）一九四三年第五号においても、「親であり、兄である大日本軍の指導を信じ、ジャワのため、否、東亜民族の大東亜を防御するため約束すべきである」という文章が記述され、日本とジャワの間の植民地的な位置を明確にした^⑤。

作品に戻ると、裸足になったり、手で食べたり、現地人の服装を着たりした林芙美子はこの同化のレトリックの実習の例となる。前述のとおり、このジャワ滞在で達成する目的としては「南の人々をよりよく認識するため」及び「この貧しい人の生活のなかに私たちが日本人が学ばなければならぬ尊いものがあるのではないか」という二つが示されている。このジャワの農村から日本の読者へ何を教えることができるのか、まずは理解するために彼らの生活に濃密に接触していく。彼女は「支配者」として位置付けられているが、支配者と支配された人たちの間の隙間がなくなるまで活発に現地人のレベルまで溶け込んでいく。因みに、その村での林芙美子の存在は他者として見られることはなく、まるで現地人と同じように同化している。そして、現地に染まった林芙美子は日本読者がジャワの事を理解しやすくするために、ジャワと日本を繋ぐ「架け橋」の役割を果たしたのである。

確かに、ボルネオの紀行文「赤道の下」と同様に、「南の田園」にも戦争の色は一切描かれず、異国の自然や風物を楽しむ毎日のみ登場する。両方の作品で林芙美子は「支配者」である作家自身の立場には一度も触れず、ただの平凡な日本女性の姿を見せている。中川成美はこの作家の主体性と戦後文学の関連性について既に指摘しており、「もちろん、彼女が政治、文化の両面から「侵略者」であることに間違いはなく、それへの覚醒は少しも示されないが自然を前に考えた個の主体と「巨きい地球」をめぐる歴史と時間の問題は、戦後の旺盛な執筆欲となって形に与えられた」というふう⑧に言及している。しかし、例

えば現地人との座談会のような空間では、林芙美子は尊敬すべき作家として紹介され、現地の女性に「理想的な女」になる方法を導くロールモデルとしての姿が強調されている。因みに、作中では作家の位置が現地人と平等のように描かれようとしながらも、活動的に林芙美子が現地人に対して「支配者」もしくは「指導者」というようなヒエラルキーからくる錯覚を目立たせている時もある。しかし、メディアでよく宣伝されるのは「作家といふ立場からといふよりも日本の女性として」といったことであり、作家のそういった姿勢のみ注目されたため、最後までこの印象が残り、林芙美子の戦時中の作品にも評価にも影響を与えてしまったと考えられる。

林芙美子がジャワ農村で滞在したことは単に無作為な決意ではない。スラバヤ州内政部長守屋圭一郎の世話にトラワス村で現地人の生活を体験したが、やはりこの決意の背後に軍政の意図が付いてきたと考える。度々記述した山下聖美によると「林芙美子のトラワス滞在は、ジャワ村落における米の確保という、当時の日本軍の大きな意図のもとに現実した計画だったのではないかと推測した」と指摘がある^②。

肥沃な土壌に恵まれたジャワ島は昔からインドネシアで米の第一の産出地となる。ジャワ島の人口の多さを加えると、ジャワが経済的な発展性を持つのである。当時は戦争によって米の輸出入が日本の占領した地域のみ制限されたため、食糧不足を防ぐために軍政がその地域における米の農産を増加する方針が立てられた。ジャワ島の場合は自給自足

といった地域軍政の政策によって米の農産を増加するほかにもろこしや芋など食糧の多様化を要求することになった^⑧。このトラワス村における農業生産とその事情についての視察が林芙美子の使命の一つとなる。彼女の手帳の中に、トラワス村における米やともろこしや糯米の収穫結果の数字が記されている。このように、トラワス村を滞在先として選んだ理由が当時ジャワで軍政が実施した食料の管理と関連性があることは明白である。

「南の田園」は「極楽」のようなジャワ農村の風物を照らし出すだけでなく、村の人達の個々を徹底的に描写していることもこの作品の特徴と考えられる。林芙美子は彼女らの出身地、履歴、家族の背景などを厳密に描くことのみならず、彼女が何もかもわかつているような立場から村の人を見て語っている。その例の一つとして村長の女中、ワルシを描写する際に、ワルシの心の中を分かるように描いている。

女中のワルシは、郵便配達のとドンが好きであったが、気の弱いワラシは、とドンの姿を見るとすぐかくれてみたけれど、とドンの妹のナンカが石油を買ひに来ると、如何にもなつかしさうに走ってかへて、土間の上からにつとわらつてあいさつをしていた。

右端に腰をかけたスプノウ氏は、こんな貧しい家に、二週間もゐていただいた事は光栄ですとのべる。まだ三〇歳を超えたばかりの若い村長のスプノウ氏は、バタバヤの

医学大学を出たのだとかで、ドイツ語もフランス語も達者だった。

文中では女中のワルシと村長のスプノウが対照的に描写されている。ワルシという人物の、好きな人に対する小心な姿を描写することにより内面的な要素が強調され、村の女性の素朴な恋愛が愛らしく描かれている。一方でスプノウの描写は人物の性格を描くより、スプノウの教育と優秀な側面が事実にとりあげられている。スプノウの描写は事実として読み取れるが、ワルシの描き方はフィクションである可能性がある。山下聖美が言ったとおり、「『南の田園』は、実際の体験をもとに書いたフィクションとみた方が妥当であり、正確な記録そのものではない」。以上の引用にあるように、村長の説明は事実そのものである一方、ワルシの描写はロマンスの側面に捉われていたのである。どちらにせよ、作家の厳密な視察から生まれた登場人物である。

このような個々の描き方は女性が書いた紀行文と植民地との関連性を見ることができると。サラ・ミルスによると女性は帝国主義に関して辺境な位置に置かれたため、人物を描写するときに彼らにある人種の一部として表象せず、一方で個人として注目する傾向がある^④。作家は「南の田園」ではトドン、キホイ、スペノ、ワルシの人物に対して、彼らをジャワ族の代表した人物としてみならず、単に個人として描写している。男性作家が書いた紀行文の相違を理解するため、以下に男性作家の阿部知二が書いた小品文「ジャワの文化

とわれら」から引用したもののより植民地に関する男女作家の差異の一例を取り上げている。^⑩

まづ、あの島は一体どんな意味で「ジャワ、ジャワ」としきりにいはれてゐるのであろうか。―私は買う考へる。アジア大陸の東南の海にひろがり群がる東印度の無数の島々―それはいふまでもなく軍略的にまた資源的に、全世界が眼の色を変へてうかがひねらふのも無理はないほどに重大なところである。またアジア南方文化建設のためになくしてはならぬところでもある。そして、その中のジャワの島と例へとみれば、その全東印度の「丸の内」—でもいはうか、よく開け、交通の便に恵まれ、あの広大な前東印度の中心、―いはば人間の体において「頭」のやうな働きをしてゐるところである。

阿部知二は地球の視点からジャワをみている。南方だけでなくアジア大陸、また全世界に至るまで地理的に、軍略的、資源的にジャワを特別な地方と見て意義を強調している。地方がもった発展性の言及から南方文化建設への重要な役割を宣伝しており、東京の「丸の内」と並びに重要な場所として表現している。因みに阿部知二は南方地域全体におけるジャワの地方の重要性を強調しており、比較すると林芙美子はジャワの村の原住民を見て、

個々からジャワをミクロ的に捉えている。無論、植民地を描かれる男性作家と女性作家の差異を理解するため、上記の比較が不十分であるが、せめて植民地に関する女性作家の基礎的な特徴が以上の比較を通して究明できる。

第四節 三千キロメートルの旅を通じて―「スマトラ―西風の島」の一考

「スマトラ―西風の島」は「赤道の下」と「南の田園」と比較すれば、内容からみると完全に紀行文の形である。作品全体はスマトラの南部から北の方へ赴く作家のスマトラ三千キロの旅の経験について語られている。作品は二部に分けられ、第一部は南スマトラの首都、パレンバンに到着してから隣のジャンビ州までの縦断に注目し、第二部ではその続きから西スマトラ州のブキチンギまで到着したところで作品が未完成のまま終わってしまう。実際には林芙美子はスマトラの最北アチェーまで足を運び、北スマトラにも短期間訪れていた。北スマトラに任地された佐多稲子が言及したとおりシンガポールで林芙美子と別れて以来、二人はようやくメダンで再会できたのである。もしかすると、「スマトラ―西風の島」が最後まで続いたとしたら、第三部は西スマトラからアチェーまでの旅についての話であったのではと推測する。

紀行文の研究にあたって、作家があるところに来て、何を見て、何を感じて、何を書い

ていくのかは基本的な問題意識となる。しかし、紀行文は単に旅行の記録というものではない。特に、戦争もしくは戦時中という特別な空間・時間で行われた旅において紀行文は多様な意味を持つのである。植民地に関して、ミルスによると、紀行文は基礎的に植民地を拡張することと、ある占領地における植民地の規則を強化することという二つの役割を持った道具である^④。この場合は女性作家が書いた紀行文は植民地に何か貢献できているのかということ、男性作家が書いた紀行文にはない要素から、新たな解釈ができる可能性が無限にあるのではないかということと思われる。

「スマトラ―西風の島」については既に幾つかの研究がなされている。山下聖美は林芙美子の南方従軍についての現地調査の研究としてスマトラに関する作品の舞台に注目し、作家の足跡を辿ってゆく。その中で「スマトラ―西風の島」で記述された縦断中の町々に触れている。また作中で述べられたパレンバンにおける日本語学校みずほ学園を対象とし、インドネシアの日本語教育を課題として研究も進んでいる。ほかに、前述した鳥城圭太は「スマトラ―西風の島」を通して、林芙美子のスマトラ経験の考察も既にしてしている。スマトラ旅中で出会った人々及び彼らとの交流から林芙美子がスマトラを見ているという結論が双方の研究の共通点となる。しかし、この紀行文について不明なところや検討が必要な点はまだ多い。例えば、戦争宣伝の内容や日本にとってのスマトラの意義などについてはまだ触れられていないと思われる。

山下聖美が言及したとおり林芙美子の南方従軍中における行動の内容は、基本的にはきめられているはずだが、どの程度の自由がきいたのかなどといった詳しい事情には疑問が残っている^⑧。陸軍省報道部が発令した「新聞、雑誌記者、女流作家南方派遣指導要領」における南方派遣の方針の三つ目、「現地ニ於ケル行動ノ細部ハ現地軍ニ計画ヲ依属ス」に基づくと、やはり林芙美子の南方行動はいずれも林芙美子の自由に任されたにもかかわらず、各行動には軍政の政策との関係がある。スマトラへの縦断でも作家は現地の軍政の使命を背負っており、それがどのように作品に反映されているかを考察してみる。

まず、日本にとってのスマトラとりわけパレンバンの重要性を明確にする。前述のとおり、「南方油田復旧開発」によると、南方の占領地の海軍地区は油田地帯から区別された。インドネシアの場合はボルネオの油田地帯が海軍を担当に、南スマトラ州のパレンバンの油田地帯を陸軍の下で管理していた。パレンバンの油田地帯を取得したことは次のように説明される^⑨。

開戦前の一九四一年初めから、軍は、日本石油、帝国石油、日本鉱業などに対して南方石油開発のための人材と機材を供出する準備を進めるように命じ、各社はこれに向け準備をしていた。そしていざ開戦すると、通常の作戦に先駆けて、軍はまず各地の油田確保に乗り出し、早くも一九四一年一月一六日には英領ボルネオのミ

リ―及びセリアの油田を占領した。次いで、一九四二年一月一八日にタラカンに上陸、また二月一四日には、落下傘部隊を投入して南スマトラ、パレンバン周辺の製油所を占領した。

文中で記述された「落下傘降下部隊」によって、南スマトラ、パレンバンにのみ戦闘があったとわかる。故に、「スマトラ―西風の島」のなかにも、パレンバンで落下傘降下部隊の存在とパレンバンの石油を繋ぐ描写が記されており、次に引用する。

パレンバンは河と石油の街だ。黄昏ごろ船に乗ってムシ河の埠頭から河下へ下つてゆくと、兩岸に対して戦前のシエルとスタンダードの石油工場が見える。灰色の大きい建物は四園を圧するばかりだ。落下傘部隊の兵士の方々にまた感謝の想ひがうつゝてゆく。勇敢な兵士の方々よ！今日のこの光榮ある石油工場の煙を内地の人々に見せたい。

一九四二年二月二〇日にラジオで放送された「海軍報道班員の活躍」内容の中で、報道班の任務が詳しく記されている。その一部では「単に血なまぐさい戦場の中の真実を捕らえるばかりでなく、前線と銃後が完全に手を握り合い一体となって戦い抜くために、

敵の如何に巧妙なデマ宣伝も乗ずる隙のないようにすると共に、戦争全体の表象を細大漏らさず記録して、長く国民的感激と躍進の原動力たしめる名誉ある職務をもっている」というふうに言っている^④。「前線と銃後が一体となる」ように、架け橋として働く報道班員の責任は、遠く離れている占領地に対し銃後の人にどう親近感を湧かせるか、銃後の読者のことを考えつつ情報を提供することである。以上の引用で示されたように、林芙美子は内地の読者にパレンバンを石油の産出地として紹介するだけでなく、敵から石油工場を獲得した落下傘部隊の勇敢さも通信した。いずれにせよこのパレンバンで起こった出来事と風物を「内地の人々に見せたい」といった作家の意図が南方派遣の使命に軍政の目的として適切であろう。

右掲の引用からも作家がパレンバンで滞在する意図の手がかりが得られるであろう。ボルネオとジャワと同様に、滞在先はいつもとおり現地の軍政にとって有意義な地方である。パレンバンはボルネオと並び、インドネシアにおける最大の油田地である。陸軍担当地区スマトラの石油生産量が約五三〇キロリットル（全生産量の六七％）で、ジャワの油田地と加えると陸軍担当地区の生産量が総計七八％になった。この数字を見ると、石油生産地としてのパレンバンの重要性もわかる^⑤。のちに、なぜ林芙美子がこの地方に派遣されたかの理由も把握できるであろう。横浜正金銀行頭取席調査課の調査報告第七六号「スマトラ事情」で記述されているように「スマトラにおける石

油産地はパレンバン州が第一として、アチエー州、スマトラ東海岸州、ジャンビ州、之に次ぐ」、記された地方は林芙美子のスマトラ縦断の順路と一致している^⑧。さらに、このスマトラの旅行では林芙美子がパレンバンか、ジャンビかで現地の正金銀行の支店の社員と出会っており、戦前期から日本最大の外国為替銀行であった正金銀行がこの石油の貿易にも関わっており、林芙美子のスマトラ旅でも不可欠な意味をもつていと推測する。

インドネシア旅ではスマトラが最後の順路であった。作家は様々な所を見たり経験したりして地球に対する思考に変化があった。南方に来て、現実を見る前、南方についての知識について「暑くて住むに耐えがたい土地のみ」「幼い知識でしかなく」と語っており、スマトラについて知らないところが沢山あったのだ。林芙美子はパスカルの言葉を引用して、「人間といふものの大きいところを知らずに、獣に等しいことをあまりしばしば知らせるのは危険だ。それと同じやうに卑しいところをぬきにして大きいところばかりをあまりにしばしば知らせるのも危険だ」と述べている。この一章は作家の地球についての知識に当てはまると考える。因みに、ある地方の大きな部分のみ注目するだけでなく、低い立場からの視線でより徹底的な見方をすることも大事である。

そのため、今回「スマトラ―西風の島」では林芙美子は報道班員として、パレンバンの

石油やジャンビのゴム農園や椰子油農園のようなスマトラの資源についての情報を提供し、戦意高揚の責任を果たす徴用作家の側面から、落下傘部隊の描写による戦争の美化やアジアを指導する日本の位置を強調した。林芙美子は婦人の読者を視野に入れ、彼女らのために南方の日常生活についての詳しい情報を取り上げ、例えば南方の気候にふさわしい服装の素材まで教えてあげている。作中には「将来南洋へ来る婦人の為に、私はこちらの日常につかふ服装に就いて少しばかり書いておきたい」と記述され、女性作家から女性読者へ、役に立つ情報が通信されている。服装や洗濯の方法などといったようなささいな情報は絶対に男性作家が注目していない点であり、この穴を埋めるのは女性作家しかできない役割である。

結

「赤道の下」、 「南の田園」、 「スマトラ―西風の島」、 戦時中のインドネシアについて作品を考察した上で、結果は次のようにまとめられる。ボルネオ、ジャワ、スマトラを代表した作品の執筆で、林芙美子はその地方の固有性をしっかり把握して、それだけでなく、ある程度この地方の特色を自分の文学にも還元した。「赤道の下」では「川」を中心にした暮らしからボルネオを見て、川の流動性から引き起こされた感激が戦後作品への執筆欲になり得ている。ボルネオの自然は作家の人生と連想されるせいにか、南方の様々な地

方の中で、作家は特にボルネオに結び付けられるように、作家にとって宝庫のように貴重な場所として扱われる。「南の田園」の場合はジャワを「人」と「文化」から捉えてきた。村人との共同生活によって、祭りや結婚式や文学など現地人と接触しながらこの地方の魅力的な文化をも楽しんだ。さらに、この共同体は林芙美子の現地言語の取得に役立ち、それは「南の田園」で登場した現地語の紹介で反映されている。文学人である林芙美子も現地の文学に魅了されており、それを内地の読者とも共有しようという意図も含まれているのである。最後、「スマトラ―西風の島」においてスマトラを自然資源が豊かな巨大な土地として見ている。「パレンバンは石油とゴム」、「ジャンビは椰子油」、各スマトラ地方の名産物の違いを知っている。ボルネオとスマトラの天然資源はジャワの人々を合わせると、将来の日本において無限に重宝されるだけの役割を持つと考えられた。滞在先の選択については「ボルネオとスマトラが自然資源の獲得」、「ジャワが農産増加」という現地軍政の方針に従っている可能性があり、女性作家の南方の活動はいずれも日程的に自由と言われても、実際軍政の圧制を避けることはできなかつた。

現地での作家の活動と出会った人々は各作品においてジャンルを成形し、区別することができる。例えばボルネオでは日程が厳しうであり、現地人との交流も不足していたため、「赤道の下」は事実ばかり登場する。丸きり新聞のコラムの形で書かれている。「南の田園」は沢山の現地人と交流していたため、この出会った人々から生まれた関係や感情

やその人間性によってフィクションの要素を追加し、作品の形は小品文のように見える。その一方、林芙美子のスマトラ経験はほとんど道路上であるため、「スマトラ―西風の島」のジャンルは完全に紀行文である。

これまでは作家の戦争協力は薄弱と評価されており、前述のとおり高山京子が指摘したように「作家としてではなく、一人の女性としてのものだった」。しかし、この三つの作品を考察したところ、作家の戦争協力の形は多様であることがわかった。作中で描かれた日本語教育の普及だけにとどまらず、現地人と日本が「同化」するまで自分の特徴「民衆的」な人柄を最大に利用して現地人との間に親近感を生み出すこと、日本の将来のために南方地域の発展性を通信すること、南方の戦場で日本兵隊の勇敢さを照らし出して戦争を美化することによって、作家は実際活発に戦争協力に加担した。恐らく、今まで林芙美子の南方紀行文に対する評価の形は「彼女の中国従軍記と比較されるか」あるいは「男性作家が書いた紀行文を基準に評価されるか」であったと窺える。確かに、男性作家が書いた紀行文と比べると、戦時中に書かれた女性作家の紀行文には「個人的な描写」という特徴がある。しかしそのことは女性作家の弱点ではなく、「個々の描写」もしくは「ミクロ的な視点」は恐らく男性作家が見逃した部分であり、女性作家のみが気づく点である。

注

- ① 高山京子「林芙美子と戦争」『林芙美子とその時代』（論創社 二〇一〇年五月、一八
 助頁）
- ② 鳥木圭太「女性作家の見た（南方）―林芙美子と佐多稲子のスマトラ」『論究日本文学
 第一〇六号』（立命館大学日本文学会 二〇一七年五月、三頁）
- ③ 望月正彦『林芙美子とボルネオ島―南方従軍と『浮雲』をめぐる』（ヤシの実ブッ
 ク ス 二〇〇八年七月）
- ④ 中川成美「女は戦争を戦うか」『語りかける記憶 文学とジェンダー・スタディーズ』
 （小沢書店一九九九年二月、六六―七五頁）
- ⑤ 鳥木鳥木圭太「女性作家の見た（南方）―林芙美子と佐多稲子のスマトラ」『論究日本
 文学 第一〇六号』（立命館大学日本文学会 二〇一七年五月、三頁）
- ⑥ 山下聖美「林芙美子の南方従軍についての現地調査報告③ 「スマトラ―西風の島」 「荒
 野の虹」 「望郷」に描かれるスマトラ」『日本大学芸術学部紀要 第五七巻』（日本大
 学芸術科 二〇一三年三月、二三頁）
- ⑦ 荒井とみよ「林芙美子の従軍記」『文芸論叢 第五三号』（大谷大学文芸学会 一九九
 九年九月、三頁）
- ⑧ 桜本富雄『文化人たちの大東亜戦争 一部隊が行く』（青木書店 一九九三年七月、
 四〇頁）
- ⑨ 前掲、高山京子「林芙美子と戦争」『林芙美子とその時代』（論創社 二〇一〇年五
 月、一八九頁）
- ⑩ 朝日新聞「新聞と戦争」取材班『新聞と戦争』（朝日新聞出版社 二〇〇八年六月、二
 六六頁）

- ⑪ 林芙美子「美しい言葉」『日本語 第四巻一号』（日本語教育振興会 一九九四年一月、一〇三頁）
- ⑫ 南方従軍手帳（新宿歴史博物館蔵）
- ⑬ 倉沢愛子『日本占領下のジャワ農村の変容』（草思社 一九九二年六月）
- ⑭ 中野聡「植民地政治と南方軍政―帝国。日本の解体と東南アジア」『岩波講座 アジア・太平洋戦争 7―支配と暴力』（岩波書店 二〇〇六年五月、三頁）
- ⑮ 林芙美子「南方初だより」『週刊婦人朝日二〇巻一号』（朝日新聞者 一九四三年一月、二〇〇〜二二頁）
- ⑯ 林芙美子「作家の手帳」『林芙美子全集第六巻』（文泉堂 一九七七年四月、四三頁）
- ⑰ 山下聖美「林芙美子「ボルネオダイヤ」を読む」『日本大学芸術学部紀要 第五九号』（日本大学芸術学部 二〇一四年三月、三一頁）
- ⑱ 林芙美子『新版 放浪記』（新潮社 一九七九年九月、頁）
- ⑲ 前掲、山下聖美「林芙美子「ボルネオダイヤ」を読む」『日本大学芸術学部紀要』第五九号』（日本大学芸術学部 二〇一四年三月、三一頁）
- ⑳ 倉沢愛子「石油で始まった戦争」『資源の戦争 「大東亜共栄圏」の人流・物流』（岩波書店 二〇一二年九月、二五三頁）
- ㉑ Leo T. S. Ching. 2001. *Becoming Japanese; Colonial Taiwan and the Politics of Identity Formation*. London: University of California Press.
- ㉒ 山下聖美山下聖美「林芙美子とマレーの四行詩パントウン」『藝文攷 第二一号』（日本大学大学院芸術学研究科文学専攻 二〇一六年九月）
- ㉓ 前掲、中川成美「女は戦争を戦うか」『語りかける記憶 文学とジェンダー・スタディーズ』（小沢書店 一九九九年二月、六八頁）
- ㉔ Robert Thomas Tierney. 2010. *Tropics of Savagery; the Culture of Japanese Empire in Comparative*. London :

- ②⑤ 前掲、朝日新聞「新聞と戦争」取材班『新聞と戦争』（朝日新聞出版社 二〇〇八年六月、二六八頁）
- ②⑥ 前掲、中川成美「女は戦争を戦うか」『語りかける記憶 文学とジェンダー・スタディーズ』（小沢書店 一九九九年二月、七二頁）
- ②⑦ 山下聖美「林芙美子の南方従軍についての現地調査報告① インドネシア・トラワス村」『日本大学芸術学部紀要 第五五号』（日本大学芸術学部 二〇一二年九月、二六頁）
- ②⑧ 前掲、倉沢愛子「コメと戦争」『資源の戦争「大東亜共栄圏」の人流・物流』（岩波書店 二〇一二年九月、九〇頁）
- ②⑨ Sara Mills. 1991. *Discourse of Difference: an analysis of Women's travel writing and colonialism*. London; Routledge. (三頁)
- ③⑩ 阿部知二「ジャワの文化とわれら」『南方徴用作家叢書 ジャワ編（木村一信編）』（龍溪書舎 一九九六年一〇月、五五頁）
- ③⑪ 前掲、Sara Mills. 1991. *Discourse of Difference: an analysis of women's travel writing and colonialism*. London; Routledge.
- ③⑫ 前掲、山下聖美「林芙美子の南方従軍についての現地調査報告③「スマトラ」西風の島」『荒野の虹』「望郷」に描かれるスマトラ『日本大学芸術学部紀要 第五七巻』（日本大学芸術学部 二〇一三年三月、二二頁）
- ③⑬ 前掲、倉沢愛子「石油で始まった戦争」『資源の戦争「大東亜共栄圏」の人流・物流』（岩波書店 二〇一二年九月、二五八〜二五九頁）
- ③⑭ 卷末資料「極秘 新聞、雑誌記者、女流作家南方派遣指導要領 陸軍省報道部」資料（市川市文学肝臓）
- ③⑮ 前掲、倉沢愛子「石油で始まった戦争」『資源の戦争「大東亜共栄圏」の人流・物流』（岩波書店 二〇一二年九月、二五八〜二五九頁）

⑤ 横浜正金銀行行頭取席調査課 「スマトラ事情」 『調査報告第七六号』（一九三〇年三月）

第二章 林芙美子の「古い風新しい風」論―ボルネオの表象をめぐって

序

「古い風新しい風」は、大阪新聞社刊行の雑誌『新風』に、一九四七年一〇月―一九四八年五月の計八回連載された。この作品は林芙美子全集（本論では文泉堂版『林芙美子全集』を指す）には収録されていない。戦後の連合国軍司令部による出版物検閲で、『新風』もその対象とされ、現在ではプランゲ文庫に収められている。ここで、プランゲ文庫について簡単に説明しておく。戦後、日本が連合国軍司令部に占領された時、言論統制があるもの、或いは事実に基づかない報道が記載された出版物は、戦史室長ゴードン・ウイリアム・プランゲによって、アメリカ合衆国のメリーランド大学に移送された^①。この一群の出版物をプランゲ文庫と呼んでいる。一九九二年から一九九七年の五年間でメリーランド大学と国立国会図書館がプランゲ文庫の保存共同事業を行い、現在日本では国立国会図書館の憲政資料室でマイクロフィルム形式の資料を保管している。

林芙美子と雑誌『新風』との関係に触れておく。『新風』誌は戦後一九四六年一月の創刊で、敗戦という未曾有の状況下に新人文学者の土台となるべく創造された。新生日本の未来のため、正しい方向を示す者は青年文化人に外ならないというのがこの雑誌のマニフェストである^②。つまり、この雑誌はこれからの日本の歴史を書き変える若い読者を想定し

ている。当時の担当編集者である平林敏彦によれば、作家林芙美子の文学は『新風』において再生された。一九四六年二月『新風』の第二号に掲載された詩「智恵の種」は、詩としては林芙美子の戦後第一作であると推測される。続いて第三号には短編小説「仮寓早々」が掲載された^③。そして翌年、雑誌の理念に調和する「古い風新し風」の連載が始まる。

本作の発掘は、森英一氏が「林芙美子資料紹介」（金沢大学人間社会学域学教学類紀要三号）で「古い風新しい風」の一部（第一回と第二回）を紹介したことによる^④。後に山下聖美氏が「林芙美子『古い風新しい風』を読む」（日本大学芸術学部紀要六四号）にテキスト全文を紹介し、林芙美子文学における作品の位置づけも試みている^⑤。しかし、本作がこれら以外で論じられた例はない。

「古い風新しい風」は戦前から戦後にかけて、若い女性が様々な転換点を迎える作品になっている。中でも内地から外地ボルネオ島へ、そして再度内地へという移動は、作品そのものの雰囲気大きく変える転換点として興味深い。

主人公の桑重和子は尾道の女学校の英語教師であったが、二カ月勤めた後の休暇に東京へ戻り見合い結婚をした。相手は医者で、翌春には日本の会社のボルネオ島支社への赴任が予定されていた。和子は結婚相手には興味がわかず、ボルネオの新生活ほうがやや魅力を感じた。昭和一三年（一九三八年）に結婚し、南ボルネオのバンジャルマシンへ移住した。しかし、和子にとってボルネオでの生活は単調で、毎日何も用事がなく、淋しい土地

で退屈であった。愛情を持たない夫との間に女の子が生まれ、南美子と命名された。ところが、東京に残してきた母が亡くなったという知らせを受け、和子は南美子をつれて帰国したが、日本とアメリカとの戦争が勃発したため、ボルネオに戻ることは絶望視するしかなかった。やがて東京も空襲が激しくなり、和子は南美子連れて北信州へ疎開した。その時、尾道の女学校教師時代の同僚で美術教師だった金山登が訪ねてきた。金山登は、和子が退屈なボルネオ生活中に思い描いていた人物である。終戦を迎え、和子は東京に戻り金山と同棲生活を始めた。和子は夢にまで見た男と一緒に暮らしているにもかかわらず、ボルネオいる夫を度々思い出した。最後は、夫の死が知らされ、南美子が夫の母に連れ出され、和子が金山の子供を産んだところで物語が終わる。

本作に登場するボルネオ島は、林芙美子自身が昭和一七年（一九四二年）末に、軍政部報道班員として朝日新聞社の後援を受け訪れた土地である。マレー半島からインドネシアへ渡り各地を視察する中で、ボルネオ島には二三日間滞在した。また、ボルネオは詩や紀行文や小説など多様な作品に用いられている題材でもある。しかし、望月雅彦の指摘によれば、林芙美子のボルネオ来島は事実ではあるものの全集に収録されていない作品も多いという^⑥。本論では本作におけるボルネオ表象と人物との関連を取り上げ、林芙美子作品におけるボルネオの位置づけを考察する。

まずはボルネオが登場する林芙美子作品について触れておく。戦後作品にボルネオが初

出するのは「ボルネオダイヤ」(『改造』一九四六年六月)である。この作品は戦時下のボルネオが舞台となっており、ボルネオが現在軸で描かれている。その他に「浮雲」(『風雪』一九四九年一月)、にも、わずかながら回想形式で登場している。小説ではないが、「作家の手帳」(『紺青』一九四六年七月、一二月連載)に、疎開生活中にボルネオを回想した場面が記されている。これは林芙美子自身の南方に対する考え方やイメージを読み解くための、手掛かりとなる随筆である。「夢一夜」(『改造』一九四八年六月)は、「作家の手帳」をもとに小説化したものであり、もちろんここにも回想としてボルネオが登場する。

本論で取り上げる「古い風新しい風」はボルネオを三つの視点から表象した作品である。主人公の和子はボルネオを、まず想像し、実際に赴き生活空間とし、帰国して思い出していく。このように、ボルネオが視点・空間・時間を転換させて描かれている。この本作において特徴的な三つの転換に注目し、林芙美子によるボルネオ表象を論じていく。

第一節 想像されたボルネオ―アグネス・キース『ボルネオ―風下の国』の受容

まず、日本とボルネオの関係をおさえておく。日清戦争の勝利にとともに、遠洋航路も相次いで開かれ、貿易や移民を軸に海外進出が高まっていた。更に日露戦争で日本の軍事力は欧米からも認められるようになり、明治四四年(一九一一年)には不平等条約が全

廃され、列国と対等の立場に立つことになった。また、ロシア南下の脅威が取り除かれたことで、日本の進出は南方へと広がっていった^⑥。第一次世界大戦中は欧米からの輸入が途絶え、代わりに日本からの輸入が拡大したこともあり、日本の南洋進出が活発になった。大正八年（一九一九年）にはヴェルサイユ条約が締結され、日本は旧ドイツ領南洋諸島の委任統治領権を獲得した。

石油やゴムなど自然資源が豊かなボルネオ島も南進地のひとつである。ボルネオへ来島した日本人の嚆矢は行商人で、原住民の家で訪問して薬、雑貨、洋服を売り歩いた。余裕ができた行商人は店を構え、「Tokio Japang」（直訳…日本の店）と呼ばれて昭和初期まで人気を博していた。また、「Tokio Japang」は日本企業の資本投資の契機ともなった。現地で日本企業の増加にともない、内地から派遣される社員も増えていった。南ボルネオの歴史記録を見ると、アジア太平洋戦争以前から日本人の医者、写真家、商業者、漁業者、農園企業者等が、既にボルネオに活動拠点を持っていた^⑦。

作中においては、この南進ブームは尾道女学校での教え子の兄や和子の結婚相手がともにボルネオ島へ派遣されるという設定に見てとれる。南進政策によって得られる、より豊かな生活を求めて、当時は南方への移民が流行となった。同時に、「青年会」、「婦人会」、「日本会」という名のもとに作られた現地人との共同体によって、ボルネオへ移住した日本人は現地人から歓迎された^⑧。これもボルネオへの日本進出の要因といえる。戦前にも

既にボルネオには日本企業が設立されていた。本作では、嘉隆が「ニ殖産」という「南洋ゴム」を扱う企業の医師としてボルネオに赴任することになる。この「ニ殖産」は木材とゴムを中心に掲げていた野村東印度殖産のことを指している。第一次世界大戦後の影響により、大正七年（一九一七年）から翌年にかけてゴム価が暴騰し事業が拡大していくなかで日本の野村東印度殖産も、南ボルネオのバンジャルマシンでゴム事業を開始した^⑩。

本作連載第一回ですでに「ボルネオ」という言葉が明記されている。ここでは、主人公和子の同僚である秋子によって述べられている。この場面は、秋子が教え子を心配して個人面談しているところであるが、教え子の兄が「ボルネオ」にいたことが唐突に明らかにされるのである。読者は、この唐突感によって「ボルネオ」を印象づけるに違いない。さらに秋子が「ボルネオつて遠いわねえ」と言ったところから、当時の女学校教師には「ボルネオ」が、遠隔地というくらいの認識しかないことがうかがえる。

連載第二回で、東京に戻った和子の見合い相手は、ボルネオ赴任予定であることが明らかになる。この見合い前の和子の心情は、以下のように述べられている。

どんな男かは知らないけれども、和子は、ボルネオと云ふところに心が誘はれた。暑い國に行つてのびのびと暮す事も悪くはないけれども、只、相手の職業が、醫者だと云ふことに何となくこだわる。

右記の引用により、ボルネオには「遠隔地」以外にも、「暑い国」「のびのびと暮らす」といった生活空間の表象もあることがわかる。和子は自分の結婚には無関心でありながら、ボルネオへ移住することの方には心はずませている。いったいボルネオについてどのような期待をしているのか。東京に生まれ育ったこの女性は遠く離れた異国に移住することに関心を持ち、素晴らしい空想を膨らませているに違いない。和子の頭に思い描かれたボルネオの表象を窺い知るため、ボルネオ渡航前の作家の経験を探ってみる。林芙美子は南方へ出発する前に、米国女性作家アグネス・キースの『ボルネオ―風下の国』を読んでボルネオに関心を持った。それは「作家の手帳」^⑩に以下のように書かれている。

あと数週間で正月が来るのだけれど、私は数年前の正月を、南ボルネオのバンジャルマシンと云ふところで、過した事も思ひ出しました。永遠の暑熱にむされてゐる森林の国ボルネオの町は、思ひでのなかでも感動深いもので、米國人、アグネス・キース女史の『ボルネオ―風下の国』と云ふボルネオの事を書いた小説を読んで、私は、ボルネオで備った下男と下女のみをあつかったその作品にどんなにか共鳴するものを感じたのです。(中略) 私は、東京を發つ時、友人にこの書物をおくられて、ボルネオには非常な關心を持つて出掛けました。

アグネス・キースは、英領北ボルネオの林務官兼農業監督官であった英国人ハリ・キースと結婚し、一九三四年に夫に同行して北ボルネオにわたり、五年間を過ごすことになった。ボルネオでの生活や周囲の人々や現地人との交流を手帳に記録し、一九三九年『ボルネオ―風下の国』、原題を「Land Below the Wind」と言い、一九三九年一月に英国で出版、翌年にはアメリカでも刊行された。アメリカでは八万部を売り上げるベストセラーとなり、『アトランティック』誌の月刊ノンフィクション賞を受賞した^⑩。同年一月、野原達夫訳で日本版も刊行された。

『ボルネオ―風下の国』に続いて、一九四八年「三人は帰った (Three Came Home)」、一九五一年「白人の帰還 (White Man Returns)」をアメリカで刊行し、この三作品をボルネオ三部作と呼ぶ。『ボルネオ―風下の国』はボルネオの大自然の美しさや異民族に対する理解が、暖かいユーモアを交えて描かれており、新鮮な感覚をもたらす作品であると他の二作より高く評価されている^⑪。

本論では『ボルネオ―風下の国』を、林芙美子がボルネオ渡航時に読んだという『作家の手帳』の記述から、本作「古い風新しい風」の登場人物の渡航前の形象及び現地での生活を探る手掛かりとする。特に現地の使用人とアグネス・キースとの交流の部分はもっとも彼女の目を引いた。恐らく、和子が想像した「のびのび暮らす」とはアグネス・キース

のボルネオ生活、幾人もの使用人に囲まれて、なんの苦勞もなくのびのび暮らすことができる生活を暗示している。

さらに、和子が想像した「のびのびで暮らす」ボルネオは、「田舎の保守的な空気の中に退屈しきっている」尾道や、「平凡な家」があり「活々してゐる」東京とは異なった、新たな生活空間として造型されていく。

林芙美子がボルネオを訪れたのは戦時中のことであるため、「古い風新しい風」に描かれる戦前のボルネオを彼女は体験しなかった。そのため、既にボルネオに滞在していたアグネス・キースの体験を借りて自分の想像を造形している。しかし、アグネス・キースの『ボルネオ―風下の国』の中で、なぜ使用人の部分にもっとも興味を持ったのか。現地人に対するアグネス・キースのまなざしを借りて自分の「世界」を作ることとは正木恒夫の『植民地幻想』に述べられている「西洋眼鏡」^④という言葉を想起させる。

ヨーロッパに遅れることおよそ四〇〇年、日本はアジアに一つの「世界」を作ろうとしていた。大東亜共栄圏である。それはいうまでもなく、日本「近代」化の政治Ⅱ経済的帰結であった。この過程は日本人を頂点とし、「南洋」の「原住民」を底辺とするピラミッド型民族観の形成と同時に進化した。日本はヨーロッパから受け取った価値の序列を組み替え、自らが作り出した「世界」にそれを適用したのである。この現象をさして、日本人が「西洋眼鏡」をかけたと評した人がいる。

オランダや英国領土における現地人と西洋人の関係は「主人」と「助手」の立場として表象される。これは一九〇〇年代から戦後までのインドネシア文学にもよく描かれた。西洋人はいつも主人であり、バアブの下女やジョンゴスの下男、運転手、ベビーシッターという役割を務めるはいつも現地人であった。すなわち、一つの西洋人の家庭には多数の現地人が働いていた。『ボルネオ―風下の国』に描かれている西洋人の主人キース夫婦も同様である。こうした考えを受けて、南方が日本帝国の手に落ちた時、林芙美子はボルネオへ渡り、支配者の立場である「主人」を意識しながら、「西洋眼鏡」、この場合は「アグネス・キース」の眼鏡を借りて、現地における生活空間を空想していた。

第二節 現実のボルネオ

昭和一三年の一月、和子は小野嘉隆と結婚してボルネオへ移住した。しかしボルネオ島での生活を送るうち、渡航前に抱いた幻想と現実とは徐々にかけ離れたものになってゆく。想像から現実への転換は段階を経て進んでいった。

日本を出港しシンガポールに到着すると和子は「異郷を魅了する」という想像と現実との転換を実感する。小野夫婦はシンガポールから汽車でマレー半島を経由してボルネオへ赴いた。「ジョーホルの美しい城見物や、マラッカの海邊の町家、クアラルンプウでの見物や」は初めて外国へ行った和子にとっては「見るものはすべて珍しい風景ばかりである」。道中

に見た景色や植物や建築などは日本のそれとは極端な対比を見せていたが、そのめまぐるしい変化は和子を慰めてくれた。暫くの間愛情がない結婚を忘れて、和子は「修学旅行」に出ているようなわくわくした気持だった。

しかし、ボルネオに到着した後、和子は「想像から現実への転換」を少しずつ実感する。

バリト河口の濁水をのぼって、マングローブの原始林のなかを、ゆっくり船が走ってゐるのは、旅づかれのした和子には、耐えがたい旅愁をそそられた。賑やかな所から、急に、原始的な淋しい土地へ来たせいか、和子は、空想してゐた所とは遥かに遠い土地へ来たやうな気がした。

ボルネオ島は熱帯雨林や大河に全体を覆われており、「アジアのアマゾン」とも呼ばれている。現在でも南ボルネオの地元住民は河岸に家を建て、河面を交通路とし小舟で往来し、商売や運営なども河で行っている。つまり、地元住民にとって河は生活空間の中心である。ボルネオの奥地にはダイヤク族やバンジャル族などが住み、近代化から取り残され、自然とともに生活している。

ここでは、和子がボルネオの原始的な風景を目の当たりにした時の感想として、現地の様子が描かれている。作品における場所の移動とともに、和子が想像したボルネオから現

実のボルネオへの転換も行われている。「賑やかな處」とは、船旅で立ち寄ったシンガポール、ジョーホル、マラツカ、クワランブウ（原文ママ）、ジャワ、スラバヤである。これらの都市で観光もしている。しかし、ボルネオに到着すると、急に文明から離れた寂しさに襲われたのであろう。

また、本作でボルネオの生活環境は、左記のように描写されている。

クオレと云ふ、ダイヤ族の下女と、チマンと云ふジャワ人の老人の下男がゐた。そのほかにも、古い車體だったが自動車を一台あてがはれてゐたので、新しくサンダアカン生れの運轉手も備つた。

和子のボルネオ生活は想像していたものとそれほど違わなかつたかもしれない。身の周りには数人の使用人が居て「のびのび暮らす」ことは叶つただろう。この部分は林芙美子がアグネス・キース『ボルネオ―風下の国』^⑤を参考にしてこの現地人像を造型したと考へられる。アグネス・キースは作中で、次のように現地人を紹介している。

支那人の娼婦二人、アルサップといふムルト族の家僕、ダヤック・ムルト族の少年、爪哇人の庭師、三匹から一ダースの範圍のシヤム猫雜種、一匹の犬、二匹の手

長猿、それに時々一匹のオラン・ウタン、來たい時に來て勝手に行つて了ふジャングルの動物、それに夫と私といふことになる。

このように描かれた和子の生活は、林芙美子の南方滞在とは明らかに異なる。林芙美子は軍政統制下で戦争視察という特命を受け南方へ派遣された。一ヶ所に長期滞在することはなく、常に移動を伴う旅行者としての生活であった。宿泊は軍政が用意したホテルに泊まるか、現地人の家に泊った。朝日新聞社の現地支社「ボルネオ新聞」は、本部を大和ホテル（現在 *Swiss Bell in Banjarmasin*）に置いていた^⑥。林芙美子は朝日新聞社の所属であり、ボルネオ滞在中はこのホテルに泊まっていた。帰国後発表された紀行文「赤道の下」^⑦には、ボルネオ滞在中の活動の一部が記されている。

小舎がけでランプのとぼしい燈の下で、青写真をつくっている若い鉦山技師の人にも逢ったけれど、ここでは日本人は私達二三人だけですが仕事に忙しくて少しも淋しいとは思いませんと云っておられた方もあった。

右記の引用より、林芙美子のボルネオ滞在は「古い風新しい風」の和子の生活は対照的であると分かる。因みに、和子のボルネオは作家のボルネオ体験に基づいたことではなく、

アグネス・キースの『ボルネオ―風下の国』の受容性が見える。主人公桑重和子は『ボルネオ―風下の国』アグネス・キースをモデルにして、林芙美子の想像と体験したことと重ね合わせて造形された人物であろう。

ボルネオ滞在が長くなっていくにつれ、和子の退屈感は増していく。

三ヶ月ほど過してあるうちに、和子は段々この風景に退屈して来てゐた。夜になると河口の汐が満ちて、庭口にまで水びたしになる時があつた。嘉隆は夜になると、社員クラブに出掛けては将棋を指す事を愉しみとしてゐた。

和子が想像していた「のびのびと暮す事」は、現実のものとなつた。そして「のびのびと暮す事」は、何もすることがなく暇であることも理解した。本来英語教師であるから、和子の語学力はボルネオ生活に何の支障もない。また、本作第一回で和子がボードレールについて語り、秋子に「感想私録」を貸していることから、外国の書籍にも造詣があることがわかる。つまり、和子は教養もあり自由主義的な女性として形象されている。

オランダの總督閣下夫人の招待に呼ばれる時に役立つためには、流ちょうな英語を使ひたいと思つたのも一つだけけれども、何にしても退屈な長い一日を過すには、英語

や馬來語を勉強する事が何よりもの退屈しのぎになる。

しかし、ボルネオでは教養や自由主義は必要ではなく、仕事もしなくていい。ここでは、夫の添え物として受動的な立場に置かれているのみである。いつの間にか、女兒も生まれた。周囲から祝福されているのに、生まれてきた一人の存在を見て不思議な感情を抱いている。そのような時、秋子から金山登と親の反対を押し切って結婚したという知らせが届く。そして和子は、自分の理想が「のびのびと暮す」結婚生活にあると過信していたことに気づき、自分の人生を人任せにしてきたことを後悔した。その感慨は作中で、左記のようになら述べている。

バンジヤルの朝夕は退屈なものであった。あゝこれが心に描いてゐたボルネオの景色だつたのかと、晝寢の白い蚊帳なかの（原文ママ）、子供に添乳しながら、深い溜息をつく。

では、この退屈から、如何に解放されるのだろうか。和子は理想を求める人物であることが、右記の引用からも汲み取ることができる。秋子から結婚の知らせを受け取った時、和子は以前に金山登が言った「忘れがたいひとです」という言葉を思い出していた。そし

て和子の「思ひ出は色あせないまゝ」である。

金山と、二度目に銀座で逢った時、和子は、二三日あとに結婚の式日をひかへて、馬鹿にセンチメンタルになつてゐたせいから、このまゝ金山が引きさらつて行つてくれぬものかと、心の中では妙な冒険を考へてゐた。バンヂヤルへ來てから、和子は二度ほど金山の夢を見た。(中略)サオジンと云ふ運轉手は和子と同じ年位で、ムルツト族の如何にも高地生れらしい強さを持つてゐた。何處となく金山のおもかげに似てゐて和子は好きであつた。

隣に夫が寝ている現実の退屈さを紛らわせるかのように、色あせない思ひ出の中の男性の夢を見る。理想家である和子は、常に現実に満足できないのである。子供にもそれなりの愛情を注ぐ平凡な夫、愛情がわからない結婚生活、無感動だった出産、和子のボルネオという現実には退屈に染められていった。

第三節・思ひ出のボルネオ

本作第三回目の最後には和子の母の急逝が知らされ、早くも帰国が持ち上がる。和子が

退屈から逃れる機会を得たともいえる。また作者による物語の転換の意図もあろう。林芙美子にとって平凡な夫婦生活は、創作意欲がわからないテーマであったのかもしれない。しかし本作は、この急転換によって激動の時代と人間心理劇が描かれていく。

和子は帰国する時、生まれたばかりの南美子連れれていく。日本に戻ると、母は知らせのとおり他界し、弟は出征し、秋子と金山登夫婦は満州に行ってしまった。和子を思いやれる人は、誰もいなくなっていた。昭和一九年（一九四四年）和子は南美子とともに、女中の故郷がある北信州に疎開した。日々追い込まれていく生活に疲れ自殺を考えるものの、南美子の将来を思うと生きていなければならぬ責任を感じていた。そこへ金山登が現れたのである。

ここで、ボルネオ滞在中に夢見ていた男性は、目の前に現実となって存在している。しかし、和子の脳裏にはボルネオにいる男性が浮かんでいるのである。そして、深い考えもなく二人は結ばれ、翌朝別れる。この時点で和子の金山登に対する思いは、現実味を帯びて激しさを増していく。そして、金山登との将来を考えながら、苦しい疎開生活をおくつていくのである。

終戦を迎え、和子はボルネオにいる嘉隆はどう思っているのか思いやった。嘉隆が戦争に勝つと信じていたことに対し、嫌味を言いたい気持ちになっている。ここは、新しい時代を迎えて、自身も過去に縛られることなく生きていこうという決意とも読み取れる。

和子は東京に戻ることにした。部屋を借りるために知人を訪ねていくが、この一家にも、出征してスマトラへ行っている者がいる。そこへ行く前に、和子は空襲の焼け野原でコンパクトを取り出し、身支度を始める。このコンパクトは、嘉隆がスラバヤで買ってくれたアメリカ製の銀製品である。コンパクトの鏡は父の顔とそっくりな南美子の顔を写し出した。鏡は反映の機能を持ったため、鏡に映った南美子の顔は嘉隆の思い出を呼び起こす。このコンパクトを通して、ボルネオに残る夫と内地にいる和子と南美子は精神的に繋がり、三人は昔ボルネオと一緒に暮らしていた頃を思い出している。戦後の東京と豊かで平穏な生活だったボルネオやジャワが対比されている。

和子は金山登と同棲しつつ嘉隆の帰りを待つことになった。しかし二人の生活は、糊口をしのぐ程度に過ぎない。和子はいい仕事も見つからず、美術教師であった金山登は絵で生計を立てようとするが、はかばかしいとはいえない。閉塞感に満たされた生活と狭い部屋は、ただ南美子がいることで二人をつないでいるに等しかった。そんな折、和子は金山登の子を宿した。生活苦に加え、妊娠による精神不安から、金山登と春江の仲を疑いだした。

ここで和子は、金山登の喜びとは裏腹に、嫌な気分になっている。そして、なぜが嘉隆の姿を思い描き「太陽の輝くボルネオの、バンジャルの日々」を心にしみるように、思いつくのである。和子が退屈だと言って逃げ出してきたボルネオ生活は、戦後の苦境にあえ

ぐ日本での生活と対極に置かれている。ボルネオで潜在的存在であった日本と金山登が顕在化すること、和子に現実を突き付けることになる。また、現実を前にして潜在的存在となったボルネオと嘉隆に、和子は思いを馳せていく。和子には、理想家が現実につか
って挫折する形象がちりばめられている。

終戦から一年四ヶ月ほど経って、嘉隆死去の知らせを受け取った。和子は復員服の若い男性から嘉隆の遺髪を受け取り、終戦から三ヶ月後に発狂して自殺も同様に亡くなったという経緯を聞かされた。文書類は一切持ち出せなかったとも言われた。この後、和子は金山登と口論し、嘉隆の遺髪を燃やしてしまう。和子にとって嘉隆は唯一、自分を平穏な豊かなボルネオ生活に戻すことができる存在であった。しかし、嘉隆が死んでしまった今となつては、その希望は叶えられなくなった。和子にとって潜在的存在である平穏で豊かなボルネオでの生活は、永遠に過去の思い出に留まることになり、顕在化することはなくなったのである。和子と平穏で豊かなボルネオを有機的につながぐものは、南美子のみとなつた。

ボルネオの思い出にはいつも嘉隆の姿がつきまとう。まるでボルネオと嘉隆は一体化であるかのように描かれている。和子が初めて嘉隆のお見合い写真を見た時、平凡でつまらない男というのが第一印象だった。嘉隆の描写はどういうわけか和子が感じたボルネオの退屈さに通じるのであろう。

帰国後和子が嘉隆を軸にしてボルネオの記憶を反芻しているのは何故か。内地での現実を受け入れたくないため、過去の「つまらなくてもよかった」ボルネオのノスタルジアをかきたてるのである。ボルネオの物理的な思い出は「南美子」の姿に凝縮される。おそらく和子にとって南美子は唯一の美しい思い出であり、自分の身体が生んだ現実である。南美子の描写は受動的で、あまり活躍をすることもなく、つねに和子と行動を共にする。ここでは南美子と和子が一体化しているように、帰国後のボルネオの思い出はずっと和子に附着している。悲惨な戦中や戦後の生活の中で、絶望に苛まれた和子は何度も自殺を考えるが、子供の事を考えて思いとどまった。要するに、「南の美しい」記憶のおかげで、和子は生き抜くための精神力を持ったのである。このようなパターンは『作家の手帳』中の記述にも見られ、主人公は冬の疎開地の苦しい毎日の中で「自然と人間のたわむれ、素朴の風物で現世の童話」のようなボルネオの思い出に慰められた。

作品の最後には嘉隆も南美子の存在も消えて、男の子の出産に象徴される新しい時代を迎える。嘉隆は病気で亡くなり、内地に戻ったのは彼の遺髪だけであった。和子はその遺髪を焼いて、もう自分の結婚や人生が終わると思った。子供の出産の時、南美子は親戚の家で遊んでいて、なかなか家に帰ってこなかった。そして南美子の不在のままに作品は終わる。嘉隆の存在が灰燼に帰すとともに、南美子の存在も消え去る。ボルネオに関わる物理的な存在も思い出も完全に失われ、同時に無名の新しい子供が誕生したことで、作品の

結末はすべてが白紙に戻ったかのようにして虚無的に終わる。この瞬間にボルネオである「古い風」が、戦後の日本である「新しい風」に転換されたのだと解釈できる。

「外地の思い出」は最後に消え失せるという傾向は西正彦『外地巡礼』^⑧が次のように述べている。

敗戦後の「民族題移動」は、大量の記録文学を日本の市場に出回らせました。多くは従軍経験や決死の引揚げ経験を美化したり、「外地」での生活をノスタルジックに回想したりするものでしたが、戦後作家の使命はこういった懐古趣味に対して、文学という名の防波堤を築ことにありました。

「南方の思い出」は林芙美子の戦後文学によく登場する。やはり八カ月間の南方旅行における生活は、悲惨で物不足な戦後の実像とは対照的であるため、南方に対する郷愁を強く感じたのであろう。しかし「古い風新しい風」に於いては南方とりわけボルネオの思い出は完全に消し去られ、新しい時代が迎え入れられる。恐らく右記の引用に述べられたように、新時代へと向かう雑誌『新風』によって林芙美子は「南方の郷愁」といった懐古趣味を脱却するという使命を与えられたのであろう。

林芙美子はここで失う／失われたものの、大きさや価値を述べているのである。日本が

戦争で失ったものが、甚大且つ重大なものであったことを比喩的に述べていると考えられる。また、新しい時代は未熟でありながら、将来に期待が持てるという林芙美子の時代感でもあろう。

結

本論では「ボルネオ」を時代の転換点に置いている。戦前には、はるか遠くにある島、穏やかな気候の土地、欧米人が住む植民地、様々な原住民が住む大自然、資源豊富な開発価値のある所等、日本人が期待や希望をもって想像していた。日本の南進政策もあり、各界各方面に南方の魅力が宣伝された。その一環として、アグネス・キースの著作が翻訳され、日本の一般読者層にも広がっていたのである。本作では秋子や和子が、その一般読者にあたる。また、各界という意味においては嘉隆が医師であるところから、南方に赴いた研究者の表象といえる。ボルネオで生まれた南美子は、南方で産出される資源ともとれる。それぞれが、期待し／され、希望を持ち／もたれた存在である。林芙美子が登場人物に託した戦前という時代の「風」であろう。

嘉隆と和子が結婚生活を送っている「ボルネオ」は、南方赴任者の現実である。林芙美子が南方視察で得た知見と、アグネス・キースの受容によって描かれている。アグネス・キースの『ボルネオ―風下の国』では、下男下女等が引き起こす様々な事件や、現地の動

物の行動、ジャングル探検と、悲喜こもごもの話題で彩られている。しかし本作では、そのような事件は一切描かれていない。これは、林芙美子の如何なる意図なのだろうか。林芙美子作品に描かれる男女は、往々にして平凡な結婚関係ではない。つまり、林芙美子にとって平凡な生活は話題性に乏しく、作品にしがたかつたのであろう。しかしながら、八回の連載であれば、「退屈な」結婚生活を挿入することで物語の転換が可能になる。林芙美子は「退屈」という「風」を吹き込んで、読者に新展開を期待させたのかもしれない。

日本に戻った和子にとって「ボルネオ」は、思い出となる。ここでは、戦中戦後の苦境にある日本での生活が現実であり、たえがたいものとして描かれている。和子が「ボルネオ」で思い描いていた金山登は、実態をもって存在している。実体のある金山登は、和子に精神的苦痛を与える。和子は無意識に「ボルネオ」を思い出すのである。この「思い出」のボルネオは、他の林芙美子作品にも共通する点である。「作家の手帳」にあるように、林芙美子はボルネオをパリと並べて「楽園」に挙げている。つまり、林芙美子のボルネオの思い出が、林芙美子そのものを執筆活動に向かわせているのかもしれない。この楽園を描くことで、作品に「風」を吹かせている。

ボルネオが登場する林芙美子作品を年代順に並べると、「ボルネオダイヤ」(一九四六年)本作「古い風新しい風」(一九四七年)「浮雲」(一九四九年)となる。「ボルネオダイヤ」は、まさにボルネオを舞台とした短編で、現地で生活する日本人が描かれている。つまり、

「今ボルネオ」にいる日本人を中心にした作品であり、これは林芙美子が南方視察をして
いる際の実感が伴っていると考えられる。これに続く本作は、「想像されたボルネオ」「現
実のボルネオ」「思い出のボルネオ」が描かれており、「行く前」「現地」「土産／思い出」
という時間及び空間の移動がある。つまり、後続の「浮雲」につなげるための架け橋のよ
うな作品となっている。「浮雲」は周知のとおり、南方生活が全て回想形式で描かれた作品
である。林芙美子がベトナムを訪れたという記録は手記や随筆に残されていないが、ベト
ナムの回想が人物造型と物語の展開において重要なテーマとなっている。また、伊香保で
二人が出会うボルネオから帰ってきた男が、物語に大きく影響する。この作品で林芙美子
はベトナムを樂園と見立てているのではないだろうか。樂園は常に想像にのみ存在し、決
して現実には立ち現れないものである。そのため、実際には行ったことのない場所を設定
し、林芙美子が樂園に挙げたパリとボルネオの融合を試みたのではないだろうか。つまり、
フランス植民地であり東南アジアに位置するベトナムは、最適のロケーションであったと
いえる。

このように、林芙美子は本作で、戦前・戦中・戦後の日本が激動した時代を取り扱って
いる。戦前の民主主義と自由な風潮は、女学校教師の生活態度や女学生の駆け落ちに表象
されている。戦争に至るまでの閉塞感、見合い結婚や家庭に収まる主婦が象徴している。
戦時下の困窮した生活には、まさに林芙美子が疎開した経験が反映され、戦後の混乱と虚

無感は金山登と和子の葛藤として描かれている。林芙美子が実感した激動の「風」が、本作に凝縮されていると言えるだろう。

注

- ① メリーランド大学プラング文庫 <https://www.lib.umd.edu/prange-ja>
- ② 「編集者の手帳」『新風第一巻第一号』（大阪新聞社東京支社 一九四六年一月）
- ③ 平林敏彦 「林芙美子について——一九四八年「新風」」『現代詩手帳 第五七巻 第四号』（思潮社 二〇一四年四月、四二〜四三頁）
- ④ 森英一「林芙美子資料紹介」（『金沢大学人間社会学域学教学類紀要』二〇一一年二月）
- ⑤ 山下聖美「古い風新しい風を読む」（『日本大学芸術学部紀要 第六四号』（日本大学芸術学部 二〇一六年一月）
- ⑥ 望月雅彦『林芙美子とボルネオ島く南方従軍と』『浮雲』をめぐって』（ヤシの実ブックス 二〇〇八年七月）
- ⑦ 後藤乾一『昭和期日本とインドネシア』（勁草書房 一九八六年三月）
- ⑧ Suriansyah Ideham『*Sejarah Banjar. Banjarmasin*』（Balitbangda Kalsel 二〇〇七年六月、四二五頁）
- ⑨ Meta Sekar Puji Astuti『*Apakah Mereka Mata-mata? Orang-orang Jepang di Indonesia (1862-1942)*』（Penerbit Ombak 二〇〇八年、一一一頁）

- ⑩ 野村康三『野村徳七の海外事業——野村東印度殖産株式会社と野村ブラジル農場』
 (敷島印刷株式会社 一九九七年一〇月)
- ⑪ 林芙美子「作家の手帳」『林芙美子全集 第六卷』(文泉堂 一九七七年三月)
- ⑫ Agnes Newton Keith、『Land Below The Wind』 Natural History Publications Kota
 Kinabalu 二〇〇四年刊行、一九二九年十一月、英国 Michael Joseph Ltd, London
 初刊、一九四〇年一月、米国 Little, Brown & Co. Boston 再録、日本語訳一九四〇年
 一〇月三日 省堂刊)
- ⑬ 林ひふみ「アグネス・キースのボルネオと日本(一)」『ボルネオ—風下の国』(『明治学
 教義論集 第五—三号』(明治大学教義論集刊行会二〇一六年一月、五一頁)
- ⑭ 正木恒夫『植民地幻想—イギリス文学と非ヨーロッパ』(みすず書房 一九九五年七
 月、二四二頁)
- ⑮ アグネス・キース『ボルネオ—風下の国』(三省堂刊 一九四〇年一〇月、三〇頁)
- ⑯ 水戸康夫(元ボルネオ新聞社員)「楽しき」とのみ多かりき」『戦時回想録』(南ボル
 ネオ会 一九九七年一〇月、五五九頁)
- ⑰ 林芙美子「赤道の下」(三)『東京新聞』(東京新聞者 一九四八年六月一三日)
- ⑱ 西正彦『外地巡礼—「越境的」日本語文学論』(みすず書房 二〇一八年一月、一九
 頁)

序 地域研究の重要性

南方についての林芙美子の著作は、おおむね三つのジャンルに区別できる。まず、戦中に発表したルポルタージュ・紀行文・詩など、また南方での取材を記録した手帳・日記など、そして戦後に発表した小説である。うち、戦中のもものは時局の要請に応じて書かれており、その内容は必ずしも彼女の本心を反映しているとは言えない。

戦後、さまざまなしがらみから解放された林芙美子は、これまで書けずにいた南方での体験を小説の題材として投入するようになる。もちろん彼女の戦争協力を踏まえるならば、それをかつての抑圧に対する反発や、戦争の悲惨さの告発といったように単純化して語ることはできない。ともかく、戦後の「南方もの」の位相を明かにするためには、前述した三つのジャンルを横断的に用いる必要がある。

林芙美子の「南方もの」のなかで、もっともよく知られているのは『浮雲』である。すでに『浮雲』と南方についての論文も数多く発表されているが、じつのところ、彼女が『浮雲』の舞台であるベトナムに足を運んでいたことを裏付ける資料はみつからない。それどころか、手帳や日記をみる限り、彼女がベトナムに立ち寄った可能性はほとんどない

と言える。すなわち『浮雲』は、実証的な意味では（南方もの）とは言い難いのである。一方、林芙美子は南方での多くの時間をインドネシアで過ごしている。彼女は取材のためにスマトラ、ジャワ、バリ、ボルネオ島など、およそインドネシアの三分の二に及ぶ地域をめぐり歩いている。実際、『浮雲』以外の戦後の作品の多くは、これらを舞台としている。彼女の（南方もの）を研究するにあたり、ベトナムよりもインドネシアを重視せねばならないのは、以上のような理由からである。

ここで林芙美子のインドネシアでの旅程をふり返ってみたい。彼女は一九四二年一二月九日、インドネシアの首都ジャカルタに降り立ち、約一週間滞在した後、東ジャワ州のセラバヤ市へと向かっている^①。

手帳によれば一五日、さらにセラバヤから飛行機で南ボルネオ州のバンジャルマシン市へと向かっており、ここでは二三日間もの時間を過ごしている^②。すなわち彼女の南方での本格的滞在は、ボルネオからはじまると言ってもよく、山下聖美が指摘するように、ボルネオは彼女の文学的活動のスタート地点となっている^③。

林芙美子はこのボルネオにまつわる、さまざまな作品をのこしている。滞在中には詩「マルタプウラ」を『ボルネオ新聞』の一九四二年一月二五日に、「雨」を一月二九日に、「タキソンの濱」を二月二日にそれぞれ発表している。これらの詩にはマルタプウラやバンジ

ヤルマシ市といったボルネオの地名が登場している。さらに帰国直後、ボルネオの風物や地元住民の生活、オランダ植民地時代の人口管理政策などについて、「赤道の下」という紀行文として『東京新聞』の一九四三年六月一日から一三日まで三回連載している。

また戦後作品においては「ボルネオダイヤ」(『改造』、一九四六年六月)、「作家の手帳」(『紺青』、一九四六年七月)、「古い風新しい風」(『新風』一九四七年一月)、「一九四八年五月」などにボルネオがたびたび登場する。このように林芙美子の「南方もの」において、ボルネオはもつとも多く描かれている。彼女をここまで惹きつけたボルネオの魅力とは一体何だったのか。

例えば、戦後作品の中では唯一、タイトルにその地名をつけている「ボルネオダイヤ」では、ボルネオが次のように描かれている。

こゝでは地球が動いてゐる感じなのだ。兩岸の家々は水に向かつて店を開いてゐる。呉服屋の前にも船を停めて買ひ物が出来る。米屋も雜貨屋も水ぎはであきなひが出来るのだ。小舟自身もコオヒイをあきなつてゐたり、タバコを並べて楫をゆるく漕いでまはつてゐるのもある。布袋草フクロクサの根をかきわけて真裸の子供が泳いでゐる。人間と自然とが、この河筋だけ戦争とはおかまひなしにたはむれあひ、犬ころのやうにふぎけあつて如何にも愛らしい自然の国を創つてゐるのだ。ボルネオの人たちにとつては、

戦争ぐらゐ迷惑なものはないであらう。

ボルネオ島は東南アジアのマレー諸島に属し、北はマレーシアとブルネイ、南はインドネシアの国土となっている。ボルネオは熱帯雨林に覆われ、蛇のように長い河が這っている。南ボルネオに住んでいる地元住民は河岸に家を建て、河面を交通路とし、小舟で商売や運輸なども行っている。地元住民にとって、河は生活空間の中心である^④。特にダイヤク族、ボルネオの奥地に住み、自然と共に生活している。

すでに戦火は南方全域へと広がっていたが、このボルネオだけは「人間と自然がたわむれあい」ながら、^⑤河^⑥のようにゆっくりとした時間が流れている。林芙美子是这样したボルネオの印象を、登場人物の口を借りて、「静かだねえ、戦争なんて何処のことかと思ふ位ね」と述べている。実際、南ボルネオにはオランダ人が少なく、また日本軍が到着する前にほとんどが撤収したために、林芙美子が訪れた頃のボルネオには、まだ戦鬨らしい戦鬨は行われていなかった^⑤。

林芙美子はこの平穏さの中で、しばし戦争の現実を忘れることができたのだろう。彼女は「作家の手帳」^⑥において、その生命感に満ち溢れた美しさを、郷愁とともに左記のように語っている。

バンジヤルマシンの一日は、夕方、規則的に訪れて来る豪雨と、螢と、食用蛙と、犬の遠吠えと、河を埋めて流れる布袋草のいとなみと、食堂の皿の上にむらがる蠅と、路上の焼鳥屋の椰子油のランプの光と、かつと照りつける太陽のめぐみとの連続です。（中略）何だか、人間の魂をゆすぶられるやうな原始的な素朴な美しさがあふれて、何千里も離れた故郷の姿がもうろうとかすんでくるのです。家族というものがなかったら、私は一生ここで埋もれていたいやうな気持ちになっただけでした。

ここでも「河」は、ボルネオの象徴として描かれているが、その「河」と並んで、人々の生活や自然のいとなみといったボルネオの多面的な美しさを表しているのが、「ボルネオダイヤ」のタイトルにもなっている「ダイヤモンド」である。

このことは、あるいは「ボルネオダイヤ」における人物形象にも明らかである。主人公の球江という名は、「球」と「江」、すなわち「ダイヤモンド」と「河」を連想させる。また「ボルネオダイヤ」は舞台として「マルタプウラ」を登場させることで、ボルネオを二つの空間にわけている。ひとつはバリト河の支流で、バンジヤルマシンの市内を二つに分けている「マルタプウラ河」、もうひとつはダイヤモンドの採掘企業センターとして知られている「マルタプウラ市」である。

作中で球江はタンバガンという小舟に乗ってマルタプウラ河で舟遊びをし、その直後に

マルタプウラ市のダイヤモンド鉱区で働いている恋人の真鍋からダイヤモンドの原石を貰う。作品のタイトル「ボルネオダイヤモンド」がこの場面から取られていることも含め、どうやら林芙美子は「ダイヤモンド」に何らかの象徴的意味をもたせようとしていたらしい。本論では「ダイヤモンド」を手掛かりに、「ボルネオダイヤモンド」と林芙美子の戦後作品の位置づけを明らかにしたい。

第一節 林芙美子のボルネオ

林芙美子「ボルネオダイヤモンド」は一九四六年六月、雑誌『改造』に発表され、翌年の六月に関東出版社から刊行された単行本『淪落』にも収録された。この小説は一九四二年一月から一九四三年五月までの約六ヶ月間にわたる作家の南方体験に題材にした作品である。なおくり返すが、彼女は当初、その南方体験を詩やルポルタージュに描いていたが、戦後にいたってその媒体は小説へと移ってゆく。そのなかで「ボルネオダイヤモンド」は、もっとも早い段階に発表された小説である。

林芙美子は南方を旅した際、一九四三年の正月を南ボルネオ州で過ごし、数日間滞在している。当時、現地の新聞『カリマンタン・ラヤ』は文化工作のために接收され、朝日新聞社のもとでボルネオ新聞社として再編されていた。彼女は朝日新聞社をスポンサーとし

て南方に出向いたため、現地では『ボルネオ新聞』などへの掲載がつねに意識されていたらしい^⑦。

こうした事情もあってか、彼女のまなざしは、はじめからややボルネオをびいきである。

このボルネオはスマトラや爪哇と違って、これからもどんどん人手のほしいところであり、土地は未開発の宝庫のように私は思えた^⑧。

また肌身離さず持ち歩いていた手帳には、首都のバンジャルマシン市を中心とした取材のほかに、資源開発についてのメモが残されている^⑨。

ボルネオの石油

第一等

ダイヤモンド

年二千か三千カラット

一万六千カラット

買入半年

今後は年三万カラットに登るだろう

マンガン―マルタプウラ（ボルネオのマンガン）　プレハリオ方面で探す。相当有望

この走り書きからは、林芙美子がボルネオの数ある資源のうち、とくに（ダイヤモンド）に注目していたことがわかる。彼女が書きとめているように、この翌年ボルネオでは三万カラットが採掘され、さらに翌々年には六万カラットの採掘が見込まれていた^⑩。

この頃、軍需産業の拡大によって、砥石などにつかわれる工業用ダイヤモンドが大量に必要となり、現地では軍のお抱え企業による採掘がはじまっていた。例えば、軍が「野村東印度殖産株式会社」に出した指令書には、国家的使命としてダイヤモンド開発にあたるようにとの注意が並んでいる^⑪。

南部「ボルネオ島」工業用ダイヤモンド鉱区は海軍の管理に属す。之が経営委託は其の社に対する特殊権益の賦与には非ず、貴方に於ては真に国家の代行機関的使命と榮譽とを確認し、誠意之が開発経営に従事せられ、以て国家の要請に応へらるべきこと^⑫。

ダイヤモンドをめぐるボルネオ開発の国策的性格について、もう少し林芙美子の言及がほしいところだが、残念なことに彼女が内地の新聞社に送った原稿には、「ゴムとか石油、

ダイヤモンド、マンガンなんかも、特筆すべき産物だけれど、とてもここでは紙数がなくて書ききれない」と省略されている。ただ、ダイヤモンド鉱山で働く若い日本人技師の姿が、彼女には「涙ぐましい」と映ったらしく、「ここでは日本人は私達二三人だけが仕事に忙しくて少しも淋しいとは思いません」という彼らの健気な言葉を紹介している^⑬。

このようなダイヤモンド鉱区の視察を下敷きにしたのであろう「ボルネオダイヤ」は、球江という運命のむくままにボルネオへと流されてゆく女性と、真鍋というボルネオのダイヤモンド鉱区で働く技師、そして内地にいる妻の三人の日本人の姿を描いている。

作品は球江がボルネオへと渡ったいきさつを回想するシーンからはじまる。球江は女学生のところ、毎日軍需工場を通う生活に嫌気がさし、卒業をまたず家を出た。上野駅の食堂で働いている時、コックの男と付き合っていた。彼との肉体関係によって、球江は妊娠した。子供を出産したのち、男は球江と相談せずに、子供を他の人に渡した。収入がなく配給ももらえない球江は男に頼りきりの生活から解放されるべく、ある日、熱海の旅館の主人に誘われるまま、南方のボルネオ島で働くことを決意した。

しかし、旅館の主人は約束を破り、球江は現地で身売りをせねばならなくなった。球江の客の中から、ダイヤモンド鉱区で働いている真鍋という男と出会った。真鍋は毎夜球江を訪ねてきたが二人は肉体関係をもたない。内地に妻子を残して来た真鍋は球江との関係

に将来性がないことを感じている。ある日、眞鍋は自分が掘り出したダイヤモンドを球江に与え、「内地へ戻ることがあったら指輪にきなさい」と言った。しかし、現実的な球江はダイヤモンドの魅力を認めず、「財産」として金にすることを考えている。それ以前に、実際眞鍋は「もつとも素晴らしい」ダイヤモンドを内地の妻に贈ったが、夫の意図を見当違い、妻は愛国心からそのダイヤモンドを政府に供出した。

次章からは眞鍋、妻、球江のダイヤモンド観をみてゆき、林芙美子の多面的なボルネオ表象を捉えたい。

第二節 植民地のプラトニックな恋愛

作品では、眞鍋が大学で採鉱を学んでいた頃、採掘企業である「N殖産」がボルネオへと進出したことになっている。この「N殖産」のモデルは、先に言及した「野村東印度殖産会社」のことであろう。

もう少しこの「野村東印度殖産会社」について述べると、「野村東印度殖産会社」ははじめボルネオでゴム事業をおこなっていた会社であり、その前身は「野村商店」の南洋事業部がつくった「蘭領ボルネオ護謨工業株式会社」である。その後、一九四一年の「南方占領地行政実地要領」によって南方進出企業への統制が強まると、「野村東印度殖産会社」は

軍からの委託をうけて、ボルネオでのダイヤモンド採掘を任されるようになる。かくして「野村東印度殖産会社」は、多くの社員を内地からボルネオへと派遣することになるのだが、その中には眞鍋のような若い技術者も含まれていた。

眞鍋は大学の採鉱冶金科を出ているため、ダイヤモンド採掘の苦労や、宝石としての価値を熟知している。彼はダイヤモンドを産業資源として扱う立場にしながら、心のどこかでは宝飾品としての価値を捨てきれず、〈ダイヤモンド〉に「美しい女」を重ねている。作中の言葉を借りれば、彼は〈ダイヤモンド〉を見るたびに、「柔い女の肌を空想」しているのである。

そのため、眞鍋は自分の手で掘りあてたダイヤモンドを妻や球江に与えている。ダイヤモンドを周囲の女性に与えるというこの行為は、そのまま彼の女性関係に置き換えることが可能である。ここで、林芙美子が眞鍋をどのような人物として描いているかをもう少し見てみよう。

軍隊といふのは、一つの土地を占領するまでは勇ましく突き進んで何も考へるひまもないけれど、一つの土地を占領して、そこへ落ち着いてしまふと、名誉のある軍隊の規律は、平和的なものに臆病になり、落ち着きがなくなつてくる。四圍が平穏になればなるほど、軍隊の規律は乱れはじめてくる。濁つてくるのだ。眞鍋の場合もさ

うであつた。占領地の鉱区を整備して走りまはつてゐるうちは、生命を賭けるほどの思ひではあつたのだけれども、ぼつぼつ結果が現はれ始めてくると、眞鍋はもう退屈でやりきれない思ひに苦しめられてゐる。日本人によく似たダイヤ族の、バブウ下女の歩く姿に茫然とみとれてゐたり、鉱区で砂を洗つてゐる馬來人やジャワ人の女たちの中から、美しいかたちを何となく求めてゐる卑しさに赤面することもあつた。

何より注目すべきは、男性として彼の側面が、ひとたび目的を達成すると、途端にモラルや規律を失つてしまふ「軍隊」と並置されている点である。戦争の混乱さのなかにあらわれる平和と、その平和によって混乱する男たちの性は、占領地におけるひとつのパラドックスをあらわしている。作中で眞鍋はダイヤモンドを砂から拾いだす現地の女性に欲情するが、こうした性の対象化は、占領者の道德的退廃として描かれていると見るべきであらう。

このことは、あるいは植民地における搾取の関係とも無縁ではない。ボルネオのダイヤモンド採掘はほとんどの場合、前近代的な手作業で行われるが、その担い手の多くは女性である。この現地語で「Pendulangg」と呼ばれる作業員は、ポンプで川から水を抜きながら土砂を分離し、フライパンのような道具を休まずに振り動かすことで、ダイヤモンドの粒を濾過する^④。

ダイヤモンドは軍需産業に不可欠な材料であり、とくに海上輸送が途絶してからは、当局は現地の資源とともに、現地の女性労働力を大々的に搾取した。眞鍋が現地の女性の泥にまみれた手からダイヤモンドを取り上げるといふ行為そのものが、占領者の欲望をあらわしているとも言える。

ここで慎重にしたいのは、眞鍋がこうした「名誉」と「欲望」の板挟みとなっている自己に、きわめて意識的な人物として描かれている点についてである。ここに彼と球江とのプラトニックな恋愛が挟まってくる。彼は彼女が娼婦であることを知っているが、肉体関係を求めることはない。彼は彼女に対して、あえて禁欲的であることによつて「名誉」と「欲望」との葛藤からの解放を目指すのである。

球江の体を一夜の慰みものとすることは、禅で云ふところの、念の無念との究畢平等を意味することで、一瞬の情火がさつと過ぎてゆけば、また明日の朝は平和な世界が、眞鍋を悠々と落ちつかせることが出来た。このように言えば聞こえはいいが、ようするに彼は別のかたちで球江の体を利用しているのだ。

実際に眞鍋はこの関係が、かえって不純なものであることを自覚している。球江にダイヤモンドを与えたのは、おそらくは罪悪感のあらわれであろう。彼の「内地へ戻る」ことがあ

「つたら指輪にしなさい」という言葉は、球江との関係を一時的なものと考えているために出たものだが、それを彼はどこかで戦争のせいにもしている。

戦争でなかつたら、君と結婚したいと考へてゐるんだけど、どうにもならないぢやアないか（中略）ここは戦場で、軍隊があるんだぜ。俺だつて軍属でもなかつたら簡単なんだけど、どうにもならないぢやアないか。

このように、眞鍋にとってのダイヤモンドは誠実さと不誠実さ、純粹さと不純さの象徴として描かれている。一粒のダイヤモンドには、妻への理想的な夫としてのふるまいのほかに、現地の女性への欲望や、現地妻の球江への禁欲などが含まれている。そして、こうした欲望の固まりであるダイヤモンドを女性に贈ることだけが、彼にとっての罪滅ぼしなのである。

第三節 〈銃後〉の女の疑似的な愛国心

次に眞鍋の妻のダイヤモンドを観てみよう。彼女は「外地」にいる夫の眞鍋から、「大粒なもつとも素晴らしいコバルトダイヤモンド」を贈られる。しかしこのダイヤモンドを

個人の所有物にはせず、数日のうちに国に差し出す。そして夫に「あなたの気持ちを無に
しなかつたことを讃めてください」と書いた手紙を送るのである。

この行動は、夫の視点からは「愛国的なきもち」からのものとして説明されているが、
それにしてもこの愛国心は観念的で、どちらかと言えば当時の新聞やニュース映画が紹介
していた軍国美談に近いと言えるだろう。加納美紀の『女たちの（銃後）』によると、戦
時下のメデアは、眞鍋の妻のように戦場から遠く離れた（銃後の女）たちの愛国心を煽
る役割を果たしていた^⑮。

ダイヤモンドをただちに政府に供出するという眞鍋の妻の行為は、（銃後）の女性の戦争
協力として読み取れる。彼女は、夫がお国のために「外地」で働いているのだから、自分
も同じように役に立とうと考えたのであろう。この「国防婦人会」的な精神は、政府から
国民に植え付けられたものであり、作品では眞鍋の妻が（銃後の女）のステロタイプとし
て描かれているのである。

あるいは、妻がダイヤモンドを供出したもう一つの理由として、一九四〇年の「奢侈品
等製造販売制限規則」、いわゆる「七・七・禁令」をあげることができる。これにより、彼
女はダイヤモンドのような贅沢品を身につけることができなかつたとも考えられる。

「七・七・禁令」の主たる目的は、おおむね次の三点であった。まずは、「ぜいたく品製
造のために使われる資材、動力、燃料等を、戦時国民生活に必要な物品の生産、供給の維

持確保に活用すること」、また「ぜいたく品購入のために使われる余剰購買力を、貯蓄の強化、公債の消化等に転換せしむること」、そして「戦時国民生活の刷新、緊張を図ること」である。

こうした「七・七・禁令」を後押しするかのようになり、当時、大日本婦人会が刊行していた雑誌『日本婦人』には、家庭のダイヤモンドの回収についての記事が掲載されている。「空の決戦へ―ダイヤモンド・銀・白金を應応召させませう」という見出しにつづいて、ここには女性が供出する貴金属類が、いかに戦争継続に役立つかについて書かれている^⑥。

ダイヤモンド、銀、白金はどれも航空機、電波兵器等の生産に無くてはならぬ資材なので政府では目下、交易営団、中央物資活用協会を通じて徹底的買ひ上げを行つてゐます。買ひ上げ期間は、ダイヤモンドは本年八月一五日から向かふ三ヵ月間、銀は一〇月上旬から来年三月一杯、白金は九月一日から十一月一五にちまで。買ひ上げ場所は、指定百貨店又は中央物資活用協会が臨時に指定した場所で、隣組の回覧版ではまたは勤奨員が家庭へ知らせます。但し家庭で売つたり町の個人商店へ勝手に売らぬやう注意して下さい。買ひ上げ場所へ現品を持ってゆけば責任を以つて鑑定の上、即金で支払われます。価格はダイヤモンド一カラットに付き千五百円基準の許可価格に依り、銀は、銀製品の場合は含有純銀量一匁に付き三五銭、銀地金又は之に準ずる

ものは一七錢五厘五毛、白金は地金代と加工賃を入れて一匁約六一円の割です。催促をまつまでもなく、最後の一つまでいますぐ進んでお役に立てませう。

内地でこうした情報の只中にいる眞鍋の妻は、決してダイヤモンドを身につけることはしないであろう。そこには抑圧を含んだ愛国心が存在する。彼女はダイヤモンドを受け取ることと夫の気持ちに配慮しながらも、国民として戦争協力に加担することを選択がない。ここでボルネオ産のダイヤモンドは、二人の愛情の象徴というよりは、内地と外地、もしくは「戦線」と「銃後」をつなぐ疑似的な愛国心の象徴として描かれているのである。

第四節 移動する女性の身体

作品で球江は、かつて同棲した男と、女の子をもうけたことになっている。しかしその女の子は、男が相談もなく他人に渡してしまったため、それ以来会っていない。その後彼女は、ボルネオで眞鍋にダイヤモンドを贈られるが、このダイヤモンドははじめ、この生き別れたわが子を想起させるものとして描かれる。

球江は枕の下からダイヤモンドの包みを出して、もう一度明るいとこで、ダイヤ

モンドをしみじみと眺めた。ふつと、何の関連もないのに、別れた子供の顔が眼に浮かんで来た。黄色をおびた石の色が冷く光つてゐる。ダイヤモンドを手にするといふことは、生まれて始めての経験で、球江にとつては微妙な気持ちだつた。指にあててみると、笑くぼのある寸のつまつた指には一寸淋しい石の色だ。心のなかで、私、ルビーの紅いのがよかつたんだけどと球江は正直のところさう思つてゐた。こんな石がそんなに高い物なのかしら、価値の高い割には魅力がないけど、お神さんはよく宝石屋を呼びとめてはダイヤモンドの品さだめをしてゐたけれども、このダイヤモンドをお神さんに売りつけてやらうかしらとも球江は思つてゐる。

堀口は林芙美子の『浮雲』を例に、内地から外地へ移動する女性の身体と国策との関連について考察している。これによると、女性「外地」への移動は、直接的には国策との関連をもたない場合であつても、間接的にはその一部として機能している。どこか自由意志のようにも思える女性の「外地」への移動は、しかし実際には帝国の拡大と足並みを揃えているのである^⑩。「ボルネオダイヤ」において、球江は流動的な人物として描かれているが、家出、同棲、ボルネオ行と移動してゆく彼女の身体が、内地から「外地」への帝国の拡大を意味していることに注意すべきである。

なお堀口の視点を借りれば、内地から外地への球江の移動は、国境を跨ぐ身体の旅で

ある。球江は妊娠をへて、自ら運命が人並みのものではないことに気付く。身体の変化とともに球江の人生にも変化が訪れるが、それでも球江は自身の身体に所有権を持たない。球江が産んだ、すなわち自身の分身であるところの女の子は見知らぬ人間の手に渡り、ポルネオでは娼婦として自身の身体を見知らぬ男に任せ、さらには眞鍋には彼の贖罪の媒体として利用される。球江の身体は当初、内地の窮屈さからの解放という目的で移動したものの、ついにその身体に自由が与えられることはない。

ところで山下聖美は、球江がダイヤモンドを眺めるシーンについて、彼女はここで子供を肌の一部として体感していると説明している^⑧。なるほどそのような見方もあるが、実際にはダイヤモンドは眞鍋との恋愛の行方という関心事にも向けられており、失われた過去であると同時に、取り戻すべき現在でもあると考えられる。ダイヤモンドの輝きは、彼女にとっての内地と外地、記憶と現実、過去と現在を結びつけるのである。

また球江の身体の運命は、採掘されるダイヤモンドの運命とも重なっている。〈河〉から掘りだされたダイヤモンドは、はじめ現地の工場に運ばれ、ダイヤモンド砥石などに加工されたのち、ふたたびどこかの軍需工場へと出荷されてゆく。その間、ダイヤモンドは美しさを評価されることなく、つねに実用的な資源として使用される。ダイヤモンドは球江と同様、戦争によって輝く機会を奪われていると読める。そしてこの悲しい運命を共有しているがゆえに、球江はダイヤモンドを「淋しい」「つまらない」と見なし、ダイヤモ

ンドを「財産にする」ことを決意するのである。

山下は「ボルネオダイヤ」の分析をめぐって現地の植物イロンに注目し、林芙美子ははじめ「河」を漂いながらどこかへと向かっていくイロンに、その文学観や人生観を仮託していたと指摘している。これがやがて『浮雲』へとつながってゆくのだが、一方で「河」から掘りだされるダイヤモンドは、半ば強制された女性の身体の移動という、もうひとつの深刻なテーマを投げかけていると言えよう。

結

「ボルネオダイヤ」を考察したうえで、いくつかの考えを述べたい。「ボルネオダイヤ」は日本占領地に移転した日本人の物語である。現地人の視点から見ると、真鍋、球江、澄子は支配者の立場で位置されるが、実際は彼、彼女らも軍政の圧制から脱出することができない。球江らは窮屈な内地から逃げだして、外地でも自由を希望するが、結局その自由をなかなか手に入れられない。球江と澄子は自分なりの解放を見つけるほかはない。つまり、この作品は占領側である日本人の人物を占領地の贅沢な生活を描写することよりも、彼、彼女らが感じていた「不自由」や「植民地で搾取への罪悪感」やモラルと行動の間の葛藤に閉じ込められたことを描写している。

作中における一粒のダイヤモンドはボルネオで行われている日本植民地の多面的な現

実を凝縮したものである。このボルネオのダイヤモンドには軍属である真鍋の「支配者である現在の行動」と「将来の名誉」の間の葛藤、占領地における日本軍政の失政への怒り、植民地による現地の搾取への失望が反映されている。このボルネオのダイヤモンドは真鍋の妻にとって、家長である真鍋との愛情に留まらない。それは天皇への愛国心でもある。球江にとって、このボルネオのダイヤモンドは二度と戻れない過去、支配された自分の身体、戦時中の不安定な恋愛の反映であるともいえる。言い換えれば、ボルネオのダイヤモンドは愛情を表象する媒体になるはずであるが、当時の国の抑圧によってその気持ちを伝えることが失敗になった。作中における日本人の間のロマンスは圧制にさらされたり、不自由だったりしたという事実を通して、「国に支配された日本人のロマンス」を作家は戦争の一つの側面として見ている。こうして、ボルネオのダイヤモンドに纏わる表象は「美しい愛情」ではなく「日本人の切なさ」を暗示している。

作品の中で、ロマンスが支配されている人物はダイヤモンドと関わる人物のみに制限されていない。悲惨な末路をたどっていた澄子と兵隊のロマンスはその一例である。二人は現地に化けて逃げようとしたが、それがばれたため兵隊は死刑執行され、彼氏をなくした澄子は絶望し、最後に自殺した。澄子は真鍋と球江と同様に、自分のロマンスを国、この場合は地方の軍政の圧政から解放することができず、ある意味で国は国民のロマンス（感情）を支配していると読みとることができる。作品の結末に、慰安婦たちはタキシム浜へ

行って弁当を開いて、「赤い海」を眺めながら、慰安婦のまさきが「戦争なんて何所のことかと思ふ位ね」と言及していることは、作中における「死亡」、「窮屈」、「恐怖」、「残酷」などのネガティブな雰囲気と対照的である。戦争がない場所において、日本人が「国によって殺されること」、「国の政策による恐怖と不自由」を実感することは林芙美子が捉えた戦争ではないかと窺える。ボルネオのダイ球江の人物形象はダイヤモンドの描写とパラレルである。詐欺によって南進にしてきた球江は異国で慰安婦として働かせたため、球江の身体が軍隊に利用されることになった。球江は自分自身の価値がわからず、その価値が他人によって実用的な価値として一方的に彼女に位置づけられている。それゆえに、球江は真鍋が贈ったダイヤモンドに対して、その美的な価値を認めず、実用的な価値で判断して財産にすることを決意した。ボルネオのダイヤモンドも同様、植民地によってダイヤモンドの鉱業が軍政に搾取された。そのダイヤモンドは遠くの日本へ移送され、「愛国心の象徴」になったり「軍需工場」で利用されたりというような実用的な用途でダイヤモンドの美的価値が消えてしまう。

作家は「ダイヤモンド」をボルネオの象徴と位置付け、ボルネオに対する自身の親近感を浮かび上がらせようとしている。なぜなら、まずボルネオの自然は作家の人生と連想させ、ボルネオの河で浮いているイロンの草が作家の流動的な生き方と共通している。戦中で書かれたボルネオの紀行文「赤道の下」において、芙美子はボルネオ島を「宝箱」と表

現したため、ボルネオは貴重な場所として作家の記憶に残っていると考えられる。南方の経験に基づいた作品数を数えると、ボルネオについての作品がもつとも多く執筆されたという事実から、作家の南方文学の中でもボルネオが注目すべき地域ではないかと窺える。しかし、この作品に対して批判すべきところがある。黒田秀俊『軍政』^⑩でのべられたように、南方へ渡航した船で林や黒田と同乗した女性慰問者の中に、林は球江のモデルとなる人物を発見したのではなかと推測する。そのため、当時ボルネオには日本人の慰安婦が言ったという事実がある。歴史的に、作品の舞台となるバンジャルマシン市には民生部下で現地女性の慰安所が設置された。現地の資料によると、当時バンジャルマシン市の役所の近くに、トゥラワンという現地女性の慰安所があるという記録が残っている^⑪。林芙美子がこの事実を知っているかどうかは不明だが、作中に日本人の慰安婦のみ注目した作家の客観性を疑う。

執筆時期を視野に入れると、この作品を執筆した作家の意図を把握できる。林芙美子の戦後文学は「外地」と「内地」、「過去」と「現在」、「記憶」と「現実」の間の揺らぎが文学のテーマの一つである^⑫。特に、外地を舞台とした戦後作品は内地の敗戦現実を向かいつつ、戦時中、占領地で過ごした贅沢な生活の記憶を背負うという模様がかなり多い。しかし、「ボルネオダイヤ」は戦後で書かれた作品にもかかわらず、戦中における外地の現実について語っている。このように、戦時中で作家が語れなかったことは「タイムマシン」

の機能を果たす「ボルネオダイヤ」を通してようやく戦後で語ることができたのである。

注

① 美しき緑の島―林芙美子さんのジャワ印象』『ジャワ新聞』、(ジャワ新聞社 一九四二年一月一日、二頁)

② 南方従軍時のメモ類、このメモは東ジャワ州とボルネオの滞在の間に使ったメモだと推測される。内容はジャワの農業事情や人口、農村滞在中の活動、現地人との交流、南ボルネオ到着日などの記録である。

③ 山下聖美 「林芙美子『ボルネオダイヤ』を読む」(『日本大学芸術学部紀要 第五九』(日本大学芸術学部 二〇一四年三月 頁))

この林芙美子とボルネオとの関係については、望月雅彦が『林芙美子とボルネオ島く南方従軍と『浮雲』をめぐる』(ヤシの実ブックス 二〇〇八年)にまとめているが、その視点はまだ『浮雲』にとどまっているため、再検討が必要であろう。

④ Suriansyah Ideham 『Sejarah Banjar Kalsel』(バンジャルの歴史)(Balitbangda Provinsi Kalsel. 二〇〇三年六月、二九六頁)

⑤ 同前、三二〇頁

⑥ 林芙美子「作家の手帳」『林芙美子全集第六卷』(文泉堂 一九七七年三月、四七頁)

⑦ 望月雅彦『林芙美子とボルネオ島く南方従軍と「浮雲」をめぐる』(ヤシの実ブックス、二〇〇八年七月、六三頁)

⑧ 林芙美子「赤道の下」

⑨ 林芙美子ボルネオ手記 一九四三年 (新宿歴史博物館蔵)

⑩ 野村東印度事業計画書」(外務省外交史料館、一九四四年二月二一日)

<https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/1istPhoto?LANG=default&BID=F20060904>

09375091632&ID=M2006090409375291650&REFCODE=B05013004200

- ⑪ 野村康三『野村徳七の海外事業——野村東印度殖産株式会社と野村ブラジル農場』（敷島印刷株式会社、一九九七年一〇月）
- ⑫ 工業用ダイヤモンド鉱区委託経営に関する指示事項」（外務省外交史料館、一九四二年七月八日）
<https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/listPhoto?LANG=default&ID=F2006090409375091632&ID=M2006090409375291650&REFCODE=B05013004200>
- ⑬ 林芙美子「赤道の下」『東京新聞』（東京新聞社 一九四三年六月一日）
- ⑭ L. K. Spencer, S. David Dikinis, Peter C. Keller, Robert E Kane. *The Diamond Deposits of Kalimantan, Borneo*. 『Gems & Gemology』 (Gemological Institute of America 一九八八年七月、六七頁)
- ⑮ 加納美紀『私たちの（銃後）』（イザラ書房、一九九五年八月、一七頁）
- ⑯ 「空の決戦へ——ダイヤモンド・銀・白金を応召させませう」『日本婦人』（日本婦人会 一九四四年一〇月、一九頁）
- ⑰ Noriko Jane Horiguchi. *The Body Politic in Modern Japanese Literature: Bodies of Woman and of the Japanese Empire in Yosano Akiko, Tamura Toshiko and Hayashi Fumiko. s Writing*. Dissertation. Faculty of Asian and Middle Eastern Studies. University of Pennsylvania' 二〇〇三年、博士論文）
- ⑱ 前掲、山下聖美「林芙美子『ボルネオダイヤ』を読む」（『日本大学芸術学部紀要 第五九号』（日本大学芸術学部 二〇一四年三月、三二頁）
- ⑲ 黒田秀俊「国際法を犯して病院船に乗る」『軍政』（学風書店、一九五二年一二月、六〇頁）
- ⑳ Hindra, Eka & Kimura, Koichi 『Momoye Merek Memanggilku: Biografi Sejarah Jungun Ianfu di Indonesia』 (Eseni 二〇〇七年、五八頁)
- ㉑ 高山京子「戦後の成熟と完成」『林芙美子とその時代』（論創社 二〇一〇年五月、二〇七頁）

第四章 林芙美子「荒野の虹」論 ― スマトラからの復員兵を巡って

序

林芙美子「荒野の虹」は、『改造文芸』（一九四八年三月号）で発表された戦後の短編小説である。主人公の龍男は南方のスマトラから復員し、妻との別れや住家の喪失によって戦後の悲惨な現実に向き合っている。虚無感に襲われる中、龍男は偶然スマトラで滞在した時に知り合った、セキ子という女性と再会した。二人は南方の記憶を反芻しつつ、戦後の再生に向かおうとお互いに支え合う。

林芙美子の戦後作品において、復員兵、引揚げ者、戦争未亡人、家を焼失した者など、戦争で困難な状況に置かれた人物たちを登場させた点に庶民感情へのこだわりがみられることは川本三郎がすでに指摘したところである^①。戦争で被害を受けた人々の心を、林芙美子が「私はやはりどうしても書かずにはいられないのだ」と述べた点に窺えるように、庶民の暮らしは彼女の戦後作品の主要なモチーフである。^② 復員兵のテーマに関して、林芙美子自身の言葉で、左記のように言及されている。

昭和二〇年の一〇月に私は東京へ戻って来た。そして初めて「雨」を書いて新潮社

に発表した。名古屋へ旅をして、雨の降る駅頭に、始めてみすばらしい復員兵の姿を見て、私はさうした人々の代弁者となつて、何か書かなければと云ふ思ひにかられた。麗しき脊髓、夜の蝙蝠傘はその一聯の作品である。何のモデルもないものだけれども、私の心の中には、非常に泥土にまみれて、かつての戦場の露と消えた兵隊に対しての思ひが消えることなく明滅しているのだ。戦場の墓表と化した若い生命に対して、私はその人々の息を私の筆で吐き出してみたい願ひのみである。^③

林芙美子の戦後文学のなかで、復員兵・引揚げ者を描いた作品の例を挙げると「夜の橋」一九四六年、「麗しき脊髓」一九四七年、「うず潮」一九四七年、「夜の蝙蝠傘」一九四八年、「荒野の虹」一九四八年、『浮雲』一九四九年〜一九五〇年などがある。しかし、林芙美子の戦後文学の中における占領地から帰還した復員兵・引揚げ者という主題の検討がまだ不十分である。おそらく中国地区や満洲から引揚げた作家と比較すると、林芙美子は外地から引揚げを具体的に体験したことがないため、作家の信憑性が疑われている。芙美子が言及したとおり「何もモデルもないけれども」、敗戦の社会で消え去った兵隊たちの姿勢を、自分の文学を通して息を吐きだそうという希望を抱くだけで、戦後の日本における復員兵・引揚げ者を視察しつつ、自分自身の南方体験を蘇らせ物語を創作する。

「荒野の虹」の舞台となったインドネシアの南スマトラ州のパレンバン市に訪問したこ

とが記録に残っている。林芙美子の「南方従軍記と手帳」によると、パレンバンに到着したのは一九四三年三月三日であった。最初の夜に林芙美子がケハマタハリという劇団の演奏を見に行き、劇団の女優たちとの交流を持ったことも手帳の中に記された^④。この部分は「荒野の虹」に登場する慰問団の女たちの素材となったと推測される。

復員兵・引揚げ者の問題に戻ると、田中宏巳は二つの言葉を定義し、「将兵が社会に復帰することを「復員」といい（：）一方、民間の邦人の帰国を「引揚げ」、引揚げの邦人を「引揚げ者」と呼び」と区別している^⑤。復員兵・引揚げ者の人数は朴裕河によると、植民地や占領地から引揚げて来た膨大な人々のうちの半分は復員兵だったが、民間人を合わせるとその人数が約六五〇万人にもものぼった。これは、当時の日本人の人口の一〇パーセントに近い数であり、社会問題になり得ることであった^⑥。

内訳、中国地区からの帰還者が大半を占め、蘭軍地区からの復員兵・引揚げ者は少ない（一四、八四一人）^⑦。しかし、いずれにせよ、内地に帰還すれば、皆同じ「帰還者」であり、同じ問題に直面することとなる。敗戦後の故郷という特殊な空間で、彼女等は、どのような場から何を語っていたのか。そして、何を語らなかった／語りえなかったのかという問題意識はすべての復員兵・引揚げ者に適用することができる^⑧。

本章は「荒野の虹」における復員兵、村上龍男に注目するが、そこには以下のような問題意識が二つある。第一に、引揚げ者に関する研究はその数が多い中国と朝鮮を対象とし

た研究が盛んだが、南方とりわけインドネシアからの復員兵についての文学研究は、管見なかぎりでいまだになされてはいない。第二に、林芙美子の戦後文学は女性を戦争の被害者として登場させることが多い一方、「荒野の虹」主人公が男性だということである。高山京子によれば、林芙美子の作品における女性の描かれ方は、作家生活を開始した時から本質的には変わっていないが、男性に関しては戦後新たに開拓したと述べているように、林の戦後作品を男性というジェンダーの観点から分析することは、従来の研究に対して清新な視角を与えうる^⑨。

以上をふまえて、本稿は三つの問題を提起する。まず、林芙美子はどのように復員兵を表象したのかを検討する。そして、日本に戻って以降、復員兵の龍男にとって南方の記憶がどのような機能を果たしているのかについて考察し、最後に龍男はどのような自己認識を形成したのかを明らかにする。

第一節 復員兵をめぐるタブラ・ラサ（白紙化）

坪井秀人は移動という活動とエクリチュールとの間の濃密な関係について指摘し、「移動する主体は移動していく土地を、彼／彼女の足によって物理的にトレースする」と言う。そのトールレス（痕跡）は、白紙の頁の上をトレースする文字、エクリチュールとの間に、「種

意味論的な相同性を持つ」。戦争は植民、疎開、移住、引揚げといった大規模な移動をもたらし、他者との交流によって発生する不安や変容、或いは葛藤などの新しいテクストを生み出す無限の可能性をはらむ^⑩。

復員兵・引き揚者が故郷に戻ったとき、眼前にした現実には焼け野原、家族、住家、職業の喪失など不運なことばかりである。坪井秀人の言葉によれば、この大喪失は「白紙（*tabula rasa*）化された空虚な土地、空虚なテクストである。論者はこの「白紙化」という言葉を借りて、「荒野の虹」における主人公が体験した戦後の虚無を考察してみる。

龍男は終戦二年目の春に、南方のスマトラから復員し、日本に到着したのち、ただちに妻の春江を探した。大空襲で家が焼かれたため、妻は中野の実家に戻って来た。戦争による六年間の別離の後、ようやく龍男は妻と再会できた。しかし彼は安堵感を味わう時間さえもなく、次々とより辛い現実に向き合うことになる。妻の住んでいる場所は妻の住家であるため、龍男にとって「自分の求めた住家ではなかった」。それに加えて、長い戦争で待ちつかれた妻が離婚を要求したことによって、龍男は家長及び夫という身分をも喪失する。龍男は内地に帰って以来自分の住むべき場所がなく、妻の所に戻ることに気が進まないでいる。

龍男の離婚に関しては、高山京子によって「二人が別れることになったのは、愛情がなくなつたためではなく、夫婦生活の空虚さに耐えられなくなつたから」という指摘がすで

になされている^⑩。二人の関係は結婚生活よりも、戦争による別居生活の方がより長かった。内地で空襲攻撃に対する恐怖感を抱いた妻は頼るべき夫がおらず、一人でその寂しさと恐怖を耐えなければならなかった。ある空襲の夜、家が焼かれている時に知らない男に助けられ、その瞬間春江の心の中の夫の存在が切り替えられた。もともと緊急な時期に夫が不在で頼るべき人がおらず、「どさくさまぎれの時は、そばにゐる男と云ふ男がとても英雄に見える」と春江が告白した。龍男も妻との長い別居が長引きにつれ、妻の顔が記憶から徐々に消えて行き、やがて内地の記憶と戦中の日常の現実が入れ替わっていた。それに加えて、外地で龍男は緋佐子という戦争慰問団の女性と関係をもっていたため、実は夫婦関係にもう何も残るものがないことは彼も自覚していた。

戦後の離婚増加について、法社会学の分野でも詳しい研究が紹介されている。

戦後離婚の激増した理由としては、(一)戦時中における急いだ結婚のうち離婚を来すべき備な結婚が相当多かったこと、(二)夫の死亡が確認されたために、離婚手続きを取られるものが多かったこと、(三)戦時中の夫婦の長い間の別居が、終戦を機会にして結婚解消にまで進んだものが多かったこと、(四)戦後の経済的困窮によって家庭生活の不和が増大したこと、などがあげられる。だが、当時アメリカ文化の影響もあって、個人主義的自由の観念のうえに立った近代的離婚が増加したことも否定できない。

戦争の影響で戦後の離婚率は急増した。高山京子が指摘したように、龍男と春江の別れは夫婦間の愛情が薄れてしまったことが原因ではなく、戦時中の長い離別によって二人はお互いに伴侶としての役割を果たしていなかったからである。春江は恐ろしい戦中の日々に頼るべき夫はおらず、龍男の場合は離別の時間が長くなるにつれ、妻の記憶が徐々に褪せて行った。夫の不在は春江に自立を促し、現実を見て現在で生きている。その一方、敗北者側の龍男は戦争責任や死者への罪悪を感じることによって過去を背負っており、現在を生きる妻、過去に縛られている夫では、もとの結婚生活に取り戻すことはできない。

前述した戦後アメリカから齎された個人主義と自由主義という価値観は、作中では春江が体現している。戦時中、男性の存在に頼っていた春江は敗戦後、自活するようになった。そして、春江は夫に対して心の中に積み重ねた不満を伝えることができるようになり、自立した生活を求め、夫である龍男に離婚する。彼女は、自分の自由を優先するのである。一方で、春江が把握した自由に対して、龍男は「自棄になり、ぢいっとものに耐へてゆく我慢の心がうせてゐると云ふ事だった」と感じている。つまり、春江が自由を見出すほどに、龍男は仕事や居場所、自分のアイデンティティを失い、無気力に陥るのである。長きに渡る戦争中、銃後の女は男性が不在であるために自立せざるを得ないという要因はあ

るにせよ、結果的に自由を手にすることとなった。それに対して、男性は戦争責任や死者への罪悪感に束縛され、戦争が終わっても自由という感覚をなかなか手に入れることができない。復員兵にとつてたつた一つの解放とは戦争による「死」からの解放である^⑭。

復員した後、離婚のほかにも、龍男が目撃した空虚は作中で次のように描かれている。

群衆の中に在る快感は、数の増加を快しとする神秘的な現はれの一つだ。全体は数である。数は全体の中にある。数は個人の中にある。心酔は一つの数である……。酔ひに煙つた頭のなかに、ボドレエルの言葉がゆらゆらと動く。自分もその一つの数の数だぞ。この数の数が、只、平凡にこゝを歩いてゐる。こゝは東京と云ふところだ。焼けて跡かたもなき街に、こつぜんと現はれたバラック市街の東京……。その侘びしき都会の従僕である自分が一個の頼りなき数の数として生きてゐる。東京の過去が失はれた如く、自分の過去も亦一切合財を含めて失はれてしまった。

戦時中、長期間、国家総動員の政策の下で、人々は国民として集団的に行動した。しかし、敗戦後、彼らの紐帯を解体され、集団は個人に分解してゆく。田中宏巳の言及のとおり、日本本土を守ることができなかつた日本兵は軍事的には無価値になつていたのである^⑮。龍男の場合も、軍隊の一部であり、その身分は軍隊の集団に預けられていたが、敗戦に

よってその集団が解散した。「自分もその一個の数の数」といった龍男は自分をただの「数」、
「復員兵の数人」、「軍隊集団の一員」、戦後政策に関わる「データ」として存在しおり、自
分が軍事的な価値を持たないという現実を突き付けられ、自己否定に陥る。

復員兵が体験した喪失は日本帝国の崩壊と関連性について、筒井清忠は次のように述べ
ている。

アジア・太平洋戦争の終結にともなう日本陸海軍の軍人・軍属の「復員」は、連合
国の管理のもとに行われた敗戦国家としての「総復員」であり、変更後の国境線の「外
（＝外線）」に展開していた部隊はすべて武装解除のうえ本土に送還され、復員の完結
は日本軍の終焉を意味した。また同様に新たな国境線の「外」に在留していた民間人
（一般邦人）も曲折の末、最終的には私有財産を現地に残してすべて本土へ引き上げ
ることを余儀なくされた、「復員・引き揚げ」は戦争終結後に国境線の「外」に所在し
た日本人の「内（＝本土）」への移動を意味し、そのプロセスは、大日本帝国崩壊のプ
ロセスといふべきものとなった。^⑮

ポツダム宣言の受諾によって、日本の帝国主義体制が解体された。日本は外地における
占領地・植民地を放棄し、軍隊の武装解除した上、日本占領地の軍隊を本土へと送還し始
めた。外地において領土と軍隊をなくしたことによって大日本帝国が崩壊することになっ
た^⑯。このように、国である「日本」は龍男と同様、戦後「白紙」のような大いなる喪失を

体験し、新日本の建設に向かっていた。復員兵である龍男は、個人としての敗者という位置づけを超えて、大日本帝国の崩壊の縮図として読むことができる。

復員兵と引揚げ者は命がけの旅の果てに故郷に戻ったが、それから先の生活は確實と言えることは一つもない。朴裕河は中国・満洲からの引揚げ者について研究したが、中国・満洲からの引揚げ者が体験したタブラ・ラサは新たな「開拓民」という別の表現で示され、以下のように記述されている。

引揚げ者たちは植民地で得た財産と家族を失い、悲惨な体験の末に日本に帰り着いたが、帰って来た日本でも食料不足やその他の理由も手伝ってよけいもの扱いをされた。身寄りのいる人も必ずしも喜んで迎えられたわけではないし、住む空間を確保できなかった人たちは、各地の未耕作地へ移動させられた。つまり新たな「開拓民」となったのである。^⑩

特に満洲や朝鮮に移住した日本人は、内地での土地を売ってから家族と一緒に満洲に移

動していた。そのため、引揚げ後、彼等にとっての最大の問題は住む場所と仕事であった。内地には土地がないため、住む場所も仕事がなく、これからの生活がゼロから出発するこ
とへの不安しかなかった。さらに、何十年も外地で過ごした日本人には内地人との間に戦
争に関する共通の体験がなく、占領地で生まれた子供たちも日本にもどると「日本意識と
文化のギャップ」によつて、差別問題が発生した。復員兵の場合は、内地に家族がまだい
るため、実家へ帰ることができのだが、作中の龍男の場合は、彼自身の家族の事は描かれ
ず、以前妻と共に住んだ家は離婚によつて妻の所有になったため、復員兵の龍男も引揚げ
者たちと同様、住居の問題を向き合うことになる。

満洲からの引揚者が内地に戻り、本土に対する喪失感を抱くのはもちろんのことだが、
彼らはまた外地への喪失感をも体験していた。外地である満洲に生まれ育った世代にとつ
て、絆を持つ土地は本土よりも満洲のほうである。このように、満洲からの引揚者は外地
と内地、二倍の喪失感を感じている。しかし、龍男にはこのようなことを見て取ることが
できない。兵隊として戦場を転々としていた彼が特定の場所に絆を持つことはなかったの
だ。帰国して南方の記憶を反芻している際にも、南方は「今は遠い昔の霞の中に消えてし
まった」と言い、全ての出来事は二度と戻ることができない現実として受け止めている。

龍男にとって外地の生活は、ただみじめな毎日として記憶に残っている。しかし、その惨めな毎日の中にあつた唯一の幸せが緋佐子との関係だった。作品の結末に龍男が外地の六年間の意味について「あの緋佐子との思いでのためにはつぐなはれるやうな気がした」と結論を下している。南方の思い出は消えてしまうのではなく、緋佐子からセキ子へ移していくことため、龍男は最後まで外地とりわけスマトラに対する喪失感を体験することはないのである。

復員兵・引揚げ者の住居と雇用の問題に対して、当時、政府は彼らを各縣市町村に任せる政策を発令した。むろん、復員兵の場合は出征前の仕事に戻ることができ、引揚げ者の場合、内地に自分の土地を持たないため、政府が都市部に定着した引揚げ者に呼びかけ、旧軍用地や未開拓地への入植が進められた^⑧。朴裕河の言葉を借りて、引揚げ者を「新たな開拓民」と呼ぶならば、この「未開拓な土」「白紙のような」戦争帰還者の生活は必ずしも虚無だけでなく、生活を再建する機会としても読むことができる。これには林芙美子がこの現象を「荒野」という言葉で表現している。

第二節 南方の記憶への反芻

林芙美子は戦時中の体験に基づいた作品を数多く執筆した。全集に未収録、もしくは検

関によって掲載禁止の作品がある可能性が高いのであるため、全てを把握することができない。しかし、一つの大きなパターンとして、作品の主人公は戦後生活の悲惨な現実から逃避する行為であろうか、日本占領地の生活の記憶を反芻し、その時への旅愁を抱いている。作家が自らの体験の記憶を繰り返す態度は何の意味を持つか、記憶を様々な形で文章化し、再構成することには戦時中語れなかったことを表面化するか、現地での体験はどのように表象されるかという問題意識に基づいて、以降「記憶」と「表象」の観点から考察していこう。

作中において龍男という人物は南方の記憶を度々呼び起こしている。一度目は妻から離婚の要求とその理由を聞いた後、龍男は南方で「忘れがたない燭火のやうななつかしい思ひ出の女があつた」記憶を思い出す。戦場の月日が経つに伴い、妻の顔が「霞の向うに淡く閉されて」、戦友と故郷の話をしたけれども、その話を心に留めおくことはない。

この慰問女性との関係によって、龍男にとっての南方の記憶は一言で言えば「美味しい」といえるほどに甘美な記憶として存在している。それはなぜか、この緋佐子という名前の女性が龍男と接吻したとき、「あゝ、おいしかったわ……」と食事を味わったかのように表現し、その緋佐子の野性的な反応に対して龍男は「はまった飯のように」この記憶を心の中に刻みつけたのである。龍男、緋佐子、春江の関係は作中で食べ物によって表象され、左記のように描写される。

翌る日。龍男が遅く会社から戻って来ると、見覚えのある春江のブルウのジャケツが机の下にくしゃくしゃとまるめて置いてあつた。階下の親爺さんの話では、昨日はみんなで龍男を待つてゐて、ご馳走してゐたのがふいになつたと、奥さんがこぼしてゐましたよと云つた。小さい食卓の上に、折詰になつた五目寿司が置いてあつた。龍男は一口箸をつけてみたが、飯が固くぼろぼろで、味もそつてもなく、箸をすてしまつた。丁度、二人の持つた過去のやうに、固く冷えて、寿司の味をなさないやうなものだつた。

龍男と緋佐子の初めての出会いは南スマトラでのサツテ（焼き鳥）の屋台である。後ほど二人は肉体的な接触をし、「あゝ、おいしかつたわ」といった接吻後の緋佐子の反応から「食欲と性欲」の関連性が浮かび上がる。内地で不自由を感じていた緋佐子はレビュールとして外地（南方）へ渡り、外地の方ではより良い生活ができて、さらに龍男との関係によって彼女は精神的・身体的に満たされたのである。日本の外で、かつ外地で送る幸福な生活のなかで食べる「サツテ」は緋佐子の新たな生活を暗示する一方、龍男との「肉体関係」をも連想させる。安田徳太郎が『食と生の発端』で述べたとおり、食糧をたくさん手にいれることは、自分の食欲だけでなく、自分の性欲をもみたしている¹⁹。

同じく南方にいた慰問団女性のセキ子にとって南方は「調子が良すぎた」所として記憶に残り、さらに人間と自然のたわむれているような南方の風景に対して魅了されている。「私みたいな女にはあつらへ向きな所だったわ」と南方での自分の居心地の良さを見つめ直している。満洲と南方で慰問団の仕事をこなした女性の記録には、「戦争のおかげで奇麗なものを着て、美味しいものを食べさせてもらっています」と言った記述が見られ、占領地で緋佐子とセキ子のような慰問団女性が幸福な生活を味わったことを確かである^⑩。

対比として、食料不足の戦後の内地で妻の春江がお寿司を作り、その寿司はもともと龍男の好物だったが、二人の夫婦関係のように「今は固くて、冷たいもの」となる。龍男と緋佐子の関係は「美味しい過去」を示し、一方で龍男と春江の関係は「まずい現在」を表すのは戦時中食糧の確保が安定したスマトラと対照的な戦後日本社会の貧困の表象とも捉えることができる。さらに、龍男と接吻したあとの「あゝ、おいしかったわ」という緋佐子の発言を、龍男と一緒に寝ることが「痛い」と感じている春江の描写と対照することで、食欲から肉体関係への繋がりも見えてくる。

一方で、南方の記憶は甘美なことばかりでなく、龍男にとっても「怒気」を呼び起こすという二面性を齎す。龍男は黙々と戦争に加担し続けるに従い、その戦争の意義と目的が失われ、「空に向かって砲を撃ち戦っているのか」と兵隊の自己韜晦と猜疑に沈み込んでいく。兵隊たちにとって上司からの教義と戦場の現実が矛盾することばかりで何も信用でき

ることなく、すべての発火点の目的も分からなくなってしまう、今の戦いは自分の命を救うためだけのものである。戦争によつて、「無意味な年月の喪失」に向かっていることに彼が立腹したのも当然のことである。

龍男が覚えた不愉快さにセキ子も共感した。彼女は南方で居心地の良さを求めたにもかかわらず、実際その「調子が良すぎた」場所において二面性の側面があり、セキ子はそれを目撃して龍男に共感した。

「ねえ、あんたさう思はない？何だかあのころつて、あんまり調子がよすぎたのよ。まるでお金持ちのうちへ留守番に来てるやうだつて、その少尉さん云つたけど、日本が占領したつもりでいい気になつてつたけど、本当は留守番に行つてたみたいな戦争ぢやアなかつた？パダンの大和ホテルの前に教会があつたのよ。そこにオランダの女たちがしうようされてたんだけど、教会の裏口にいつも二三台の自転車がとまつてゐてね、私、妙だと思つてゐたの。華僑の商人が、いづれはオランダが再び戻つて来ると云ふので、化粧品だのタバコだの、お菓子だの信用貸しで売りに行つてる自転車なつて聞いたんだけど、いまになつてみれば、全く華僑のみとほしのよさつて、吃驚しちまふわね。根気のいゝのに呆れてしまふわ。―大變な犠牲を払つて留守番に行つてみたいなんですもの……」

日本帝国陸軍が一九四二年三月一七日に侵攻した後パダン（西スマトラ）は軍政の領土となった。その結果として一九四二年四月七日から、同年の一〇月二〇日まで日本軍政はパダンにいる千人のオランダ人男性をバンキナン島の收容所に移動させ、女性たちと子どもがパダン市内に残された^②。パダンにいたオランダ人は少なかったため、ここでの戦闘は激しいものではなかった。侵攻から四ヵ月後、第二〇五日本帝国陸軍の幹部がシンガポールからパダンのブキテインギに移転し、一九四二年八月より元富山県知事、矢野健三はパダン州長官として任命された。日本軍はパダン州からスマトラ島にかけて軍政を敷いた^②。

しかし、日本軍政が敷かれる前に、オランダはすでにこの地域での植民を容易に管理するため、社会構造を形成し植民地政策を確立していた。インドネシアでの民間企業においては華僑の経済の貢献が不可欠な要素となっており、ヨーロッパ人は華僑商人を通じて、インドネシア人との間に介在し、この両者を結ぶ商業を行なった。つまり、遠く昔からオランダ人と華僑は密接な関係を持っていたのである。

その一方、日本軍は大勢の人々の犠牲のもと外地へ戦いに出たものの、実際のところは現地でただの「留守番に行ってきた」に過ぎないというセキ子の観察からも、現地での事実は明らかである。とにかく、このパダンという所に戦争はなかった。日本は「持ち主の

不在」のパダンに来て自らの占領地としたが、実際パダンに住む人にとって、この地方はまだオランダのものであった。「華僑商人はオランダが再び戻って来る」の記述に見られるように、現地人にとってパダンにおける日本占領統治は暫定的な政治だった。因みに、内地で宣伝された戦争の偉績は現実とは異なり、現地人は占領者である日本を尊重することなかった。戦争によって利益を得る側のセキ子はこの事実に対して恥を感じながら、無価値な内地の国民の犠牲に対しても哀れに思っている。

南方に思いを馳せることにより、戦争で命を落とした人々の不幸な運命について、龍男とセキ子が共感し合うことができる。セキ子と出会って、龍男は戦友の須長を思い出す。須長はセキ子と付き合いがあったが、残念ながらアチェーのビルンで病気にかかって亡くなった。龍男は寂しいスマトラの土地に須長の骨を埋めながら、「死んだ者にとっては祖国なぞどうでもいゝ事には違ひない。只、生きてゐる人間のみが、死者の骨にも思ひ出や哀れみをかけてみせるだけだ。」と作中で述べる。セキ子も「戦争って大変だったわね。死んだ人が一番可哀想ね。死に損ですもの・・・。」と自分の戦争観を語った。川本三郎によると、この「死に損」という庶民感情の言葉によって林芙美子は戦争の悲劇を語り、「死んだ人が一番可哀想ね」という簡潔でまっとうな庶民の言葉から「終戦後」を見ている²⁰。

このように、龍男とセキ子にとっての南方の思い出にはそれぞれの二面性を持っている。龍男にとっての南方とは、食欲と性欲を満たす人間の生命力を暗示する場所にとどまらず、

兵隊としてこの場で目的を失った戦争への挫折に苦しめられた場所でもある。セキ子の場合は、南方は生活を楽しめる空間として記憶される一方、現地人に認められない不法な日本の占領は彼女の心に恥を感じた思い出として残っている。二人の間に共有される南方の記憶は寂しい異国の土で埋葬された須長の遺体のことである。とにかく南方は「性もしくは生」の象徴として読み取ることができただけでなく、「死」を暗示する象徴でもある。

一方、南方と対照的に描写されつつ内地にも微妙な二面性も浮かび上がる。春江が作った寿司もしくは龍男のために買ったふくば苺は夫に対する「性」と「生」の象徴として読みとるならば、内地も作中で漠然と「死」を暗示する場所として記述されている。それは龍男と初めて出会った日に緋佐子が言った言葉である。「南洋へ行くのはあぶないつて云ったけど、何処で死んだつて同じだと思つたのよ。内地は規則ばかりでとてもつまんないわ」。言い換えれば、外地で敵に殺される死が当たり前なことである一方、母国でも国の厳粛な規則によって命を落とす可能性もある。つまり、当時の日本人は外地であれ内地であれ、いずれにしても「死」へと向かう現実から逃げることはできないのである。

林芙美子は戦時中の中国と南方へ派遣され、戦場で兵隊とともに動き、彼らの戦闘を目にして活字化する活動を長期間体験した。しかし、終戦に伴ってこの兵隊たちの存在も消え去り、異国で死んだか、国土で流浪したか、社会に無視された。また、戦時中林芙美子は戦争宣伝の活動に携わったか、戦意高揚を喚起した国民は結局「死に損」となり、彼ら

の犠牲は無駄になってしまった。ここにおいて、作家は庶民の立場から戦争のシステムを創った政府に怒気を感じ「厭戦」の姿勢を見せている。戦時中には語られない戦場での兵隊たちの憤りや憂い、現地人に対する恥などは、南方の記憶を反芻することによってようやく表面化されている。

第三節 「過去」と「現在」の切り替え

林芙美子の戦後作品に登場する男性は戦争で疲れ切って心身創痕となる表象がかなり多く見られる。戦争で負傷した人、栄養不足で肉体的に貧弱な兵隊たち、故郷に戻っても家族を失った帰還者、男は頼りにならなくなり、虚無感と諦念に苛まれているように描写される。それは高山京子によると、男性は直接的に戦争とかかわったため、敗戦という現実をまともに受けており、さらに戦後で家父長制の崩壊によって権威を剝奪されたことで鬱屈感を抱いているということである²⁴。こうして、林芙美子の戦後文学において、男女を問わず、全ては戦争の被害者として登場させる。しかし、林芙美子はそれを社会問題にまでは広げることではなく、ただ庶民の立場に立って彼らの悲哀を個々に描いて行く。「個を超えた大きなもの、国とイデオロギーに問題を預けることはない」というふうには川本三郎も過酷な評価を下している²⁵。

林芙美子の戦後文学において、戦中と戦後もしくは「過去」と「現在」の間の揺らぎが作家の文学のテーマとなっている。男にとって戦後は戦中からの連続であり、戦争という過去を背負いながら敗戦の現実を見ている。一方で、女性は戦中において、男性の不在によって自力に頼るしかなかったため、戦後になると前向きに自活して現在を生きているという構図が林芙美子の戦後文学に見える。「過去」と「現在」の表象は高山京子が指摘したとおり、「現在を見て過去を思う」という構図はすべて、失われたものは二度と帰ってこないという喪失感に根ざしている^⑧。その変遷から発生した不安、葛藤、孤独と虚無感を物語化している。

龍男は故国に戻り、最初に目にした「焼けて跡かたもなき街」の東京を、軍属である自分の喪失と並べて見ている。「東京の過去が失はれた如く、自分の過去も亦一切合財を含めて失はれてしまった」。六年間故郷から離れた結果、故郷は記憶から褪せて行きすでに過去となってしまう。しかし、戦後国に帰還した後、頭に残る国土の風景が一変しており、東京に付属していた身分も失ってしまった。戦後の龍男は南方に戻ることができず、また今の東京に昔のものは残っておらず、南方と東京も両方過去になってしまった。今は敗戦後の東京を現在として向き合うほかに選択の余地はない。

復員した後、再生に向かう前には、「過去」と「現在」の切断が必要である。龍男の場合にはセキ子との偶然な出会いによって「過去」と「現在」を整える機会を与えられた。敗戦

の日本の現実において把持できるものがない人生の白紙化は、龍男には「地獄へ逝つてしまつた」のような無力感と孤独だけをもたらした。しかし、セキ子と再会した後、敗戦の中にも段々明るさが見えて来る。この微妙な変化には幾つか理由がある。

龍男はセキ子と再会したことで、ついに自分と共感できる人を見つけることができた。南方の思い出から、当時の快樂と内地人が知らない現地の内実まで、そういった事柄が両者をお互いに結び付けている。具体的な例を挙げれば、南方で病死した須長の思い出によつて、龍男とセキ子は「生き延びる」ことへの感謝と「死者への無念」という矛盾した感情を共通点として持っている。国のために戦つた挙句の果てに寂しい異国の土で埋められた須長の不幸な運命を考えれば、悲惨なことばかりと思える今の敗戦の日常はまだ良い。龍男はセキ子から緋佐子の近況を聞かされた。緋佐子は良い人と結婚して、子供も産んだ、市川で世帯をもっている。緋佐子の生活は「いゝひとみつからないし、相変わらずごろごろしてるんだけど」といったセキ子の状況と対照的である。セキ子は帰還後、空襲で家が焼かれて「裸ん坊」と言えるまですべての所有物を失つた。つまり、セキ子も龍男と同様、日本に戻つてきた途端、すべてが白紙と化したような大喪失を体験した。しかし、セキ子は自分の不幸な運命を把握しており、「人間の一人々々にだつて浮き沈みがあるのかまへもなく戦争だけには強くて」という彼女の野性的な精神に龍男は惹かれた。「あの女は何のかまへもなく現在を転落してゆく女だと思へる」と龍男が考えている。その瞬間、「あゝ、

おいしかったわ」といった接吻後の緋佐子の愛らしさはセキ子に乗り移った。女性へのノスタルジックな愛欲は陰気な焼けた街を照らし出すように「この世代は、暗くはない。暗くはないのだ」と龍男の心に希望が再び現れる。

妻との離婚によって、龍男は独りで居住することの気安さを発見する。今までの龍男の人生は兵隊として、夫として、自らの身分はいつも他人に属しており、自分のためだけに生きるという意識を持つことはなかった。しかし、独り住居ことによって、現在に向き合う認識を生まれてはじめて得たのである。

妻と別れると云ふ不安が、別れる前までは龍男の心を臆病にしてゐただけけれども、別れて生活を別にしてしまふと、をかしな事には、男の独り住居の気安さからか、こ々に生き残つたと云ふ存在の意識が感じられ、独りの強さが無限に広がつて来て、爽やかなものが身のまはりを風をたてて吹き抜けてゆくのだ。そろそろ立ちなほるべき時期が来たやうに気がした。戦争で六年間を空にしたと云ふ事に、いまでは何の悔いもない。自分の祖国には、まだ古い昔の何かがあると慾深い思ひで戻つて来た甘さもをかしいのだ。敗戦のみじめさがこの位のものならば、自分にはまだまだ幸せと云へるのかもしれない。

龍男は自己喪失から自己発見をしていく。兵隊の集団性から抜け出し、妻と別れることによって独り身の自由を味わっている。恐らく、出征から帰還するまでの六年間、彼は国のため生きてきたがこれからは自分のためだけに生きて行く。前述したとおり、戦後日本社会が集団主義から個人主義へと変化することによって、龍男もこの新しい爽やかな生き方を発見している。一方、セキ子との偶然の再会の後、南方の記憶を反芻することによって、異国で死亡した戦友達を思い出し、「生き残る」ことがもつとも大事なことでであると自覚することによって、今の人生を大切にしてく。ただの数」といった龍男の自己否定の表現は作品の後半においては、「数の数である己のささやかさも、この自然と並行して」と自分自身の価値を見つめ直している。「過去はもうないのだ」。結局龍男は過去との絆を断ち、現在を見て立ち上がる自分の人生を再建してゆくと決めた。

作品の結末では龍男が有楽町のカストリ屋で春江の義兄と出会う。義兄は自分の子供の話をして、「大きくなつたつて兵隊にとられる心配はなくなつたしね」と言う。彼の言葉は時代の変化を感じさせる爽やかな新しい風を龍男の心に吹き込んだ。「探し求めていたものを探り当てたやうな気がした」という龍男の言葉が最後に述べられる。作品は店の戸をしぶくしているなまぬるい雨風や、出入りする重たい泥靴を履いた店の客の描写で終わる。この場面は龍男の心象を象徴するように描かれている。すなわち、「なまぬるい雨風」が暗示する敗戦後不景気な日本の社会のなかで、これからの未開拓地の人生に一瞬現れた希望

を龍男が把持したということが表象されている。「荒野の虹」には「虹」という言葉は出て来ないが、作品の結末において、周囲にはまだなまぬるい雨風が強く吹いている中、龍男の人生は今まさに虹が現れるようとする雨上がりの状態に位置していると表現され、敗戦の惨めさから立ち上がることとその自己発見を暗示されている。林芙美子が「虹」という彩りの集まりを描いた作品にしたのは、若い読者を想定して書くという意図があったためである^④。

同時代の作品と比較すると、「麗しき脊髄」(一九四七年)が「荒野の虹」にもっとも類似する作品である。「麗しき脊髄」の主人公はビルマからの復員兵であり、満洲から引揚げた女性との瞬時的な交流のなかで、どうやら二人は戦争を経験した者どうしであるため心を通わせた。両作品は復員兵を登場させ、居場所の喪失と敗戦後日本に対する無気力を共有するという筋立てを共通している。しかし、「麗しき脊髄」においては、南方の記憶の描写は希薄であり、戦時中の経験について、「ニッパヤシの小舎の中から空を見て、自分のやつてゐることは何だらうと思つた事があつた」と曖昧に描写されていくにとどまる。「うず潮」(一九四七)においてもジャワから復員兵が登場するが、「麗しき脊髄」と同様、南方の記憶について「すべては夢ですよ」といった単純な述懐にとどまる。つまり、復員兵を巡る作品のなかで、「荒野の虹」だけが作品の構成として「戦時中」と「戦後」、「南方」と「日本」を同等の比重で取り上げていることになる。

「夜の蝙蝠傘」(一九四八)もまた満洲からの引揚げ者とスマトラからの復員兵を描出する。日支事変の戦乱のなかで兵隊の英助は右脚を負傷することになる。ようやく帰還しても、体に不自由を抱え、無職で妻に頼るしかない生活のなかで、英助は生きる価値を見出だせず、死を希求するばかりの暗然たる毎日を過ごしている。作中、英助の絶望感は、巡査として働くスマトラの復員兵の明るい性格と対照的に描かれている。巡査は「私は人を信じています」と言い、人が悪事を謀ることの裏には必ず理由があると考えている。「終戦と同時に、いまの陛下が御退位なすつて、皇太子殿下が天皇になつておいでだったら、世の中はもつとばあつと童話的に明るいのぢやアないかと思ひますがね」という言葉から、この復員兵が新しい時代を迎える戦後という時代の変化に対して楽観的な考えを持つていることが窺える。外地から帰還したという経験が多少とも彼らの世界観の差異を決定づけているように思われる。すなわち、林芙美子の作品における引揚げ者が死を希求し現在の生活を「地獄」と表現するのは、満洲での体験の反映であると考えられる。一方、スマトラの「調子が良すぎた」生活の記憶のせいから、復員兵である「荒野の虹」の龍男と「夜の蝙蝠傘」の若い巡査は悲惨な戦後に明るさを見出す人物として描かれている。

結

復員兵を描く林芙美子の戦後作品の中で、「荒野の虹」はもっとも詳細に復員兵の生を浮

き彫りにしていると考えられる。本作品は、龍男の「白紙化」の自己喪失から「虹」が出るまでの自己発見の過程を余すところなく語りきった。まさに「白紙」のように、龍男は帰国してから居場所や所属、社会的な立場を持たず無気力で、有能であった自分の姿を見失う自己喪失を体験している。龍男の無気力と自己喪失は、個人としては敗者を象徴とする一方、大日本帝国主義の崩壊の縮図という多面的な意味を持つことを暗示している。

作中における「南方の記憶」は龍男を無気力と絶望から解放する重要な役割を持つ。セキ子との出会いから南方の記憶を手繰り寄せることによって、龍男は戦時中の戦いと戦後の帰還という経験を共感できる他者を見つけ出した。セキ子は南方のイメージと結びついた「野性」という属性を強調される点に、彼女が龍男にとって南方の記憶を凝縮した存在であることが窺える。龍男が抱く「美味しい」記憶は緋佐子からセキ子へと移行し、龍男が「南方という過去」から抜け出し、彼の記憶は「現在で一緒に再生を奮闘する」、戦時中・戦後の経験を共有したセキ子へと移る。

作中における三人の女性は龍男に関連する「時間・空間」を象徴する。内地で待ち疲れした妻の春江は「内地の過去」を、南方で関係を持った女性慰問の緋佐子は「外地の過去」を、敗戦の東京で再会したセキ子は「内地の現在」をそれぞれ象徴している。作品の結末では「内地の過去」と「外地の過去」が全て消え去れ、最後に龍男が向き合ったのが「内地の現在」という事実、すなわち直面せざるを得ない敗戦の現実である。

作家の南方体験を考えてみれば、この作品を通して、林芙美子が戦争では語られないことを表面化したといえよう。戦時中に宣伝された「聖戦」という大義名分が現実には字義どおりの意味を帯びていなかったということを暴き出している。日本の植民地に出征したことを「留守番の家に行つて来た」と軽々に表現する言葉は、内地において絶対に流通しない、南方へ赴いた人々が感得した現実である。

前述のとおり、この作品の執筆において作家は戦後の社会から消え去る復員兵の姿をモチーフとして書き出したにすぎないのである。しかし、考察を重ねるにつれ、この作品は実際作家の単純な意図を超えていると言える。特に、「戦争による移動」というテーマは現代にいたるまで、避難民やディアスポラ文学といった文学のテーマにも続いてゆく。復員兵が感じた白紙化を読むことで、現代の国籍を失った（無国籍になってしまった）避難民の気持ちを理解することもできる。作家の南方体験という視点から見ると、これまではベトナムを舞台とした『浮雲』を中心にした研究が盛んだが、「荒野の虹」のようなほかの南方作品への研究はまだ不十分だと思われる。インドネシア出身である論者にとっては、今の時代に「荒野の虹」のようなインドネシアを舞台とした作品を読むことにより、日本のみならず、母国の歴史に関する知識が得られるという恩恵もある。

龍男とセキ子の描写から、南方派遣に関する作家の認識の手掛かりを得られる。同じ戦争加担者として、芙美子は龍男とパラレルな関係にある。多くの人々が戦争で犠牲になっ

た年月を「無意味な年月の喪失」と言った作家の挫折感を龍男は浮かび上がらせる。一方で、セキ子は、戦争によって南方の贅沢生活を体験することができた作家と同様である。言い換えれば、戦争の協力者である龍男は林芙美子の「作家」としての形象を担い、戦争による利益を得るセキ子は林芙美子自身の立場を表している。しかし、林芙美子が見た「戦争犠牲者」は戦争で損害を被った日本国民に限定されているため、日本占領下の現地人への罪悪感を見出すことができない。

「荒野の虹」には歴史的に不可視化された出来事がある点は批判されるべきである。林芙美子が南方から帰国したのは一九四三年の中旬であるため、その時から戦後まで、もしくは兵隊たちの帰還するまで、彼女は現地で起こっていた出来事を知らない。例えば、インドネシアにおける復員の帰還の準備は一九四五年九月下旬より一九四六年一月中旬まで時間がかかった。その間に、インドネシア国内状況の権威の変化によって帰還のプロセスは複雑の状態となった。終戦からほぼ半年を経った頃にはインドネシアの再占有を論じむオランダに対するインドネシアの独立運動が激化し、残留した日本兵のなかにはインドネシアの独立の準備に加担する将兵が多かった。独立運動は当時の政情を不安定化させたばかりでなく、日本人の復員を妨げる要因ともなった^⑧。この事実は他の東南アジア地域と大きな違いであるため、インドネシアからの復員兵の特異性と言える。しかし、作中において、この特異性が触れられることなく、龍男はただ「外地」から帰ってきた復員とし

て描かれている。さらに、復員兵に対する社会的排除や戦争犯罪者とする眼差しといった、復員兵を巡る社会問題を作品のなかでとりあげることにはなかった^⑥。作中では、復員兵である龍男がただ敗戦の虚脱を体験した個人として表象されているのである。恐らく、戦争の被害者として描写される龍男の人物を描くことをとおして、林芙美子は戦争に加担させられる側であった自分を彼と重ね合わせて、戦争責任の追求から逃避するのかと窺える。

注

- ① 川本三郎 「戦後が終わってから」『林芙美子の昭和』（新書館 二〇〇三年二月、三〇三頁）
- ② 林芙美子 『林芙美子文庫 第六（晩菊）』のあとがき（新潮社 一九四九年三月、三一七頁）
- ③ 前掲、『林芙美子文庫 第六（晩菊）』のあとがき（新潮社 一九四九年三月、三一七頁）
- ④ 林芙美子 『南方従軍記と手帳』一九四三年 新宿歴史博物館蔵
- ⑤ 田中宏巳 『復員・引き揚げの研究』（新人物往来社 二〇一〇年六月、一七六頁）
- ⑥ 朴裕河 『引揚げ文学論序説 新たなポストコロニアルへ』（人文書院 二〇一六年一月、一〇頁）
- ⑦ 前掲、連合軍の管理下に置かれた軍人・邦人の推定概数表『復員・引き揚げの研究』（新

人物往来社 二〇一〇年六月、一六七頁)

⑧ 天野知幸 「「満州文学」のゆくえ—GHQ/SCAP 検閲と地方雑誌の調査を踏まえた考察」

『京都教育大学国文学』(京都教育大学国文学会、二〇一三年二月、一一頁)

⑨ 高山京子 「戦後の成熟と完成」『林芙美子とその時代』(論創社 二〇一〇年五月、二一七頁)

⑩ 坪井秀人 「パラレルワールドとしての復員小説—八木徳「母子鎮魂」ほか」『「帰郷」の語り／「移動」の語り伊豫谷敏夫・平田由美編』(平凡社 二〇一四年一月、一六〇頁)

⑪ 前掲、「戦後の成熟と完成」『林芙美子とその時代』(論創社 二〇一〇年五月、二一四頁)

⑫ 川島武宜 『離婚 (現代家族講座 第五卷)』(日本図書 二〇〇八年四月、一一頁)

⑬ John W. Dower. 1999. *Embracing Defeat. United States: W. W. Norton & Company.* (八八頁)

⑭ 前掲、『復員・引き揚げの研究』(新人物往来社 二〇一〇年六月、二〇八頁)

⑮ 筒井清忠 『昭和史講義【戦後右辺】(上)』(ちくま新書 二〇二〇年八月、七〇頁)

⑯ 増田弘 『大日本帝国の崩壊と引き揚げ・復員』(慶應義塾出版社 二〇一二年一月、一五頁)

⑰ 前掲、『引揚げ文学論序説 新たなポストコロニアルへ』(人文書院 二〇一六年一月、一〇頁)

⑱ 前掲、『復員・引き揚げの研究』新人物往来社 二〇一〇年六月 二三一頁

⑲ 安田徳太郎 『食と生の発端』(光文社 一九五一年一〇月)

⑩ 馬場マユト『従軍歌謡慰問団』（白水社 二〇一二年一〇月）

⑪ Van Velden, Dr. D. (1963) *De Japanse Internerings kampen Voor Burgers Gedurende De Tweede Wereldoorlog (The Japanese Civil Internment Camps During the Second World War)*. Uitgeverij T. Wever B. V., -Franeker

⑫ 早稲田大学大隈記念社会学研究所篇『インドネシアにおける日本軍政の研究』（紀伊国屋書店一九五九年五月）

⑬ 前掲、『林芙美子の昭和』（新書館 二〇〇三年二月、三〇三頁）

⑭ 前掲、『林芙美子とその時代』（論創社 二〇一〇年五月、二一六〜二一七頁）

⑮ 前掲、『林芙美子の昭和』（新書館 二〇〇三年二月 三〇四頁）

⑯ 前掲、高山京子「戦後の成熟と完成」『林芙美子とその時代』（論創社二〇一〇年五月、二〇七頁）

⑰ 林芙美子「風琴と魚の町」『現代文学集 第一四巻』（鎌倉文庫 一九四六年六月、三三二頁）

⑱ 浜井和史『復員関係資料集成第六巻「南方の復員史」』（ゆまに書房二〇一〇年四月）第六巻は一九五七年発行された厚生省引揚援護局史料室編一九五七年の復刻版である）

⑲ 朝日新聞一九四六年六月九日で掲載された無名な復員兵の手紙には、彼が当年五月日に南方から復員してきたが、内地の人に冷遇され、敵対的な眼差しを投げかけられたと語っている。

小結

インドネシアを舞台とした戦中と戦後の林の作品の考察を経て、第一部では以下のような結論に達した。まず、インドネシアでの経験に基づいた作品はボルネオを舞台設定に選んだ作品が比較的多い。ボルネオの自然は作家の人生や文学観に結びついており、作家にとって特別な空間であったためだと考えられる。林芙美子の南方行はボルネオを中心にしたといっても過言ではない。「古い風新しい風」と「ボルネオダイヤ」を比較すると、出発前から帰国までの南方、とりわけボルネオに対する作家の認識の変化が窺える。出発前、林はパウロ・ローチやアグネス・キースといった西洋の作家による南国の表象を内面化し、西洋人が体験した南方に憧憬を抱いたが、現実の南方は想像とは異なり空虚であると感じている。それは、「古い風新しい風」において作家と立場が近似している主人公の「現実のボルネオ」に感じる退屈さに明らかである。一方、南ボルネオに渡って来た日本人についての物語である「ボルネオダイヤ」では、他人を描かれることによつてボルネオの多面的な現実を把握できた。

南方の記憶は最後にいつも「消え去る生きもの」に象徴される。南方の記憶を背負っている「古い風新しい風」の南美子と「荒野の虹」のセキ子の姿勢は、戦後の新しい時代を迎える最中に、どこかへと消え去ることによつて物語が終わる。これは南方の記憶を整理

する林芙美子なりのメカニズムだと考えられる。「消え去る生き物」によって象徴される南方の記憶は現在、目の前には存在しておらず、いつかまた「南方」と会える希望が孕んでいると解釈した。

作中で登場する女性は、戦前から戦後までと言う時期を超えて、内地と外地のあいだを移動する人物として描かれる。女性の登場人物と彼女らの身体性は時代と空間の変更とともに変動する。女性は内地と外地の間に移動し、外地で子供を産み内地で無くしたり、外地へ出発前に生んだ子供が失われたりしたという描き方は女性の移動と身体性との関わりは林芙美子文学の特徴ではなかいかと考える。球江にとって失われた子供はボルネオの現在点でからみる「失われた過去の内地」、一方で戦後の日本にボルネオで生まれた子供が消えることは現時点の日本から見ると過去の外地（ボルネオ）として捉えられ、女性は戦時中、内地であれ外地であれ、移動することによって自分の身体の固有性もしくは身体性の感を喪失するのである。

林芙美子の作品にはジェンダーの問題だけでなく、戦争システムの下で被害者になった男性の挫折の声も表面化している。「ボルネオダイヤ」における軍属の真鍋と「荒野の虹」の主人公である龍男の描写を通して、「現実の行動」と「将来の名誉」の間の葛藤、占領地で頓挫した軍政への挫折感が浮き彫りになるため、作家の戦争観が明確に現れている。林の作品には、戦争に反対するというよりも、個人の犠牲の原因となった政府の失政を受け

ての厭戦の傾向が見出される。結局のところ、たとえ日本占領地に移動して支配者の立場に立ったとしても、男女を問わず日本人は国家の圧力から逃れることができなかつたのである。

第二部 他の女性作家

第一章 小山いと子『椰子真珠』論―スマトラにおける多言語状況をめぐって

序

小山いと子の長編小説『椰子真珠』は一九四八年二月二〇日、中央公論より刊行された。初出誌が不明であるうえに、小説自体の入手も困難であり、国立国会図書館のデジタルコレクションでしか読むことができない。そのため、この小説は現在に至るまで、十分に評価されては来なかった。小山いと子は昭和一八年、陸軍報道部から命令を受け、林芙美子らとともに南方へと派遣され、『椰子真珠』の舞台となったスマトラ東海岸州（現北スマトラ州）で二年間ほど滞在することになった。スマトラ滞在の間に発病したため、他の作家たちが既に帰国したあとも、小山は二年間スマトラに残り、一九四四年末にようやく日本に戻った。南方へと派遣された五人の女性作家の中から、小山は美川きよと並んで、南方徴用作家としての研究が比較的少ない。小山は自らの南方小説『椰子真珠』と同様、「南方文学」研究においても十分に注目されて来なかったと言えるだろう。

『椰子真珠』のあとがきによれば、作品の前半はスマトラのメダン市の家とブラスタギのグランドホテルで書き上げたところ。作品の後半は帰国してから戦後に至るまで書き続けられたという。二年に及ぶ滞在期間に、小山はスマトラのソルタンの姫から農園で働く

苦力に至るまで親交を厚くし、「日本人よりもインドネシア人やオランダ人南方シナ人に多くの友人を持ちました」^①と書いている。また、「あとがき」にも、現地人の仲間たちのなかでもとりわけ張夫人というメダン市の華僑系インドネシア人がもつとも親しい友人であったと記されている。小山は帰国の日に張夫人から別れの手紙とあわせて大粒の「椰子真珠」を供された^②。二人の友情は戦後まで続き、張夫人は『椰子真珠』の執筆から出版に至るまで大いに支援した。それゆえ本作品は張夫人への感謝の印として見ることも可能である。

『椰子真珠』はスマトラの日本人女性の住家における多民族の共同体についての物語である。主人公の朝倉惇一郎は、油椰子栽培の土地を拓くべく、一〇年前スマトラに渡ってきた。現在はエステート・タナアエルラジャの支配人である^③。農園での水難の問題に対処するため、惇一郎はジャワ島へ渡り水難の問題を解決する方法のためにジャワ各地の研究所を視察した。スマトラへ戻る際に、北スマトラのソルタンの息子、メダンの華僑会長及び幾人かの白人と飛行機に同乗した。メダンに入ると間もなくブラスタギ市の山中に飛行機が不時着になってしまった。機内から投げ出された惇一郎はカポックの林に降下した後、山中に住んでいるバタック人の青年に救われた。彼はベラスタギ市にある日本人の自宅に惇一郎を運んだ。その家の持ち主は三〇年前に南進し、当初はいわゆる「からゆきさん」であったお常という女性であり、彼女は直樹の権造と^④呼ばれる青年とマレー人の

下男・女中数名と共に住んでいる。お常の家には、日本人の惇一郎だけでなく、オランダ人のセンベック、マレー人のアフマッド、中華系の楊といった飛行機不時着によって負傷した被害者がおり、彼らはそこで治療を受けていた。

『椰子真珠』は日本語で書かれた小説であるとはいえ、北スマトラのローカル性が色濃く見られ、登場人物は日本人よりも現地人のほうが多い。三人の日本人は、民族や社会階層、職業を異にした現地人もしくは外国人に囲まれている。それに伴い、作中では異言語が響き渡っている。舞台がスマトラであるため、マレー語（インドネシア語）はもちろんのこと、当時の北スマトラ社会に共存していたマレー語以外の言語、オランダ語、英語、中国語も使用されている。本論文が最も中心的に論じる問題こそ、作中で描かれるスマトラのこのような多言語状況である。

西成彦は日本文学における外国語の響きについて次のように述べている^⑤。

植民地支配の拡大を推し進める時代、日本の文学は見た目「一言語」で書かれているようにみえても、そこにはさまざまな異言語が鳴り響いていました。植民地地域の多言語状況を「写しとる」ことは、「ローカルカラー」を前面に出すうえで最も効果的な方法でした。そして敗戦後、植民地を失った後も、在日外国人のさまざまな作家たちがそれぞれディアスポラ体験、移住体験を踏まえながら日本語文学の多声化を試

みようとしています。

日本文学と異言語との接触について、西成彦は『外地巡礼…越境的日本語文学論』において「外地の日本語文学」という文学研究のための新たな分析概念を提示した。「外地の日本語文学」は日本語使用者が日本語との不断の接触・隣接関係を生きるなかから成立した文学であると定義されている。西は、「外地の日本語文学」の研究に吹かせない要素として、「作品の背後に、日本語でない異言語の響きを確実に聞き取るようにすることである」と述べたうえで、「異言語の影や帝国主義の爪痕と並んで重要なものに「外地日本人」の存在がある」と指摘している。なお、「外地の日本語文学」が大日本帝国の野望を担った帝国主義的な文学としての側面も持つということも銘記すべきである^⑥。

『椰子真珠』は外地の日本語文学のすべての要素を含んでいる。日本語で書かれた小説だとしても、マレー語やオランダ語、バタック語などの「異言語の響き」が「作品の背後」に確かに存在する。主人公は、戦前から既に南方に進出してきていたからゆきさんと農園栽培者であり、彼らは旧支配者であるオランダ人と被支配者であるインドネシア人たちとともに共同生活をしている。作品内の時間設定が曖昧であるため、論者は小山の執筆時期を反映して読解してしまう。この読解において本論文が目指すのは、異言語同士の交渉から、なぜ「戦争」が描かれていないのか、「戦争」もしくは「植民地」がそれらとは別の形で表

象されているのではないか、という問いについて検討することである。

『椰子真珠』には、多国籍の人物の間のコミュニケーションのパートナーが顕著に描き出されている。社会的観点から多言語状況を考えるとき、そもそもスマトラが多様な人々によって構成された社会であったという点は重要である。スマトラ社会は現地の複数の民族だけでなく、日本も含めて、中国、インド、アラビアなどからの移民も存在し、さらに支配者であったオランダ人と社会階層の上層に君臨した白人の農場栽培者という社会構想によって、複雑な多言語状況が出現していた。歴史的観点からみると、戦後までスマトラには共通語が成立しておらず、各民族が独自に自分の民族語を用いて、外国語を使って自由自在にコミュニケーションを図っていた。それゆえ、『椰子真珠』の登場人物たちもほとんどが多言語的を駆使する。彼らは会話の際に話し相手によって使用言語を切り替えるというように、使用言語を選択している。この言語選択によって注目すべき対話パターンが発生する。登場人物は異国人と対話する際に、奇妙にも自分の母語あるいは話し相手の母語を使わず、別の言語を用いることがある。コミュニケーションの場面で使用する言語は自分の意思で決めたものであり、その場においてその話し相手に限って使用する言語である。この恣意的な言語使用は一体何を示しているのだろうか。本論文の出発点には、スマトラの多言語状況の中で展開される多国籍の人物たちのコミュニケーションパターンに対する関心にある。

以上を踏まえ、本論文は以下の三つの論点について考察する。第一に、スマトラの社会で構築された多言語状況における各言語の位置を明らかにする。第二に、作中に登場する旧支配者の言語である「オランダ語」、新たな支配者の言語である「日本語」、独立に向けて奮闘する人々の現地語である「マレー語」との三角関係の間における「言語間の微妙な闘争」と呼びうる現象を分析する。最後に、「外地日本人」という要素をテキスト分析に導入し、「日本語」と「日本文化」との関係性を視野にいれて、多言語状況におけるお常の役割を明確化にする。

第一節 スマトラ社会の複雑な多言語状

『椰子真珠』では、異なる民族的出自をもつ登場人物たちが使用した言語のパターンがきわめて興味深いかたちで現れている。前述したように、各人物は母語以外の外国語能力を持つにもかかわらず、対話の最中で自由自在に使用言語を選択する。

まずはスマトラにおける多言語状況から考察したい。作品の舞台であるスマトラ東海岸州（現北スマトラ州）は人種、権力構造や社会階層の在り方において多様な社会である。スマトラ東海岸州の社会階層は人種や職業から構築され、さらにオランダ植民地及び海外からの移民も既存の社会階層を多様化した。当初はスマトラ東海岸州の現地の民族として

「マレー族」・「バタックシマルング族」・「バタックカロ族」が存在していた。それに加えて、自治権を持つソルタンの領地がとして、ランカットソルタン・デリーソルタン・セルダンソルタン・アサハンソルタン・シアックソルタンの五つあった。すべてのソルタンはオランダ植民者と結合していた。要するに、スマトラの社会階層においては、現地の貴族とオランダ植民者が上流の階層に位置づけられ、一般のマレー族、バタック族、ミナシカバウ族などが下級の位置に繋留されていたのである^⑦。

しかし、一九三〇年よりスマトラの栽培業が好況を呈したことに伴い、スマトラ東海岸州の社会は大きく変容した。中国やインド、国内のジャワ島及びスマトラの他の地域などからスマトラの農園に移ってくる労働者が激増したのである。移民の数は土着民族の人口を凌ぐまでになり、土着民族がマイノリティーの側に転じた。スマトラの農園主はほとんどが西洋人であったため、栽培業の増加に伴いスマトラにおける西洋人の人口も増えて来た。その結果、施設は現地人の必要性のためではなく、西洋人の生活を支えるために建設された。このように、ソルタンの権力を背景とした封建制度は、栽培業によって生み出されたエリートと西洋化した社会に取ってかわられた。それに伴い新しい社会階層が構築された。階層の最上位はヨーロッパ人の栽培者、事業者、政界関係者などが占め、次に土着民の貴族と西洋の教育を受けたインドネシア人の知識人や専門家、インド人と中華系の裕福な商人などが位置づけられ、最後に一般のマレー族、バタック族、ジャワ人の苦力が最

下層に留め置かれることになった。

以上の社会階層の変化は言語の社会的地位にも影響を与えた。階層変化に比例するように、最も社会的影響力を持ったのはオランダ語であり、マレー語がこれにつづき、中国語やミナンカバウ（西スマトラ州の土着民族）語は市場で常用され、下級のジャワ人の苦力が常にジャワ語もしくはマレー語を使用することになった^⑧。一八一一年から一八一六年に至るまでの五年間に蘭領が英国に支配されたため、英語が政治の場における正式な言語となり、スマトラの言語世界に入ってきた。その後は英語の使用がオランダ語にとってかわられても、英語が西洋人の栽培業者やシンガポールとマレーの英国領土との貿易関係者によって使いつづけられた。英語の使用者が少ないと言っても、スマトラの言語階層においては英語がオランダ語よりも下位だが現地語よりも上位に位置づけられていた。多言語状況の複雑性は宗教の多様性によっても促進された。当初はオランダ語がキリスト教の普及のために使用された。同時にアラビアやインドの商人が齎したイスラム教はマレー語の使用に伴い拡大した。このように、オランダ語はキリスト教徒の使用言語となった一方、マレー語はイスラム教徒が用いる言語となった^⑨。

作中でスマトラ東海岸州の多様性を最もよく表した箇所を以下に引用する。

ブラスタギは南方第一の避暑地といはれ、千二百メートルの高原にある。メダンか

ら美しいドライブウェイがついて約一時間。空の色や風のさやぎは秋のやうだが永遠の春とでもいうのか、ベゴニヤばらやガーベラがいつまでも咲き乱れ、その間にアラビヤ風や中国風や洋風の別荘が花に埋まるやうにして思ひの位置に建つてゐる。なだらかな丘の中腹にある壮麗なホテルの傍には木立にかこまれた清らかな大プールがあり手入れの行きとどいたテニスコートがあり広いゴルフ場がある。その向こうの丘には古代のミナンカボウ建築の屋根を巧に取入れたエキゾチックな学校の建物が油絵のやうにならび、ピアノだけでも特別な一室に一台づつまるで音楽学校のやうに何十台も備へ付けるといった贅沢さで、校舎や庭にはマレーやジャワやそのほか南方各地からやつて来た富豪の子女のたのしげな嬉戯の声がひびく。このへん一帯は南方には珍しく清らかな水の豊かなところで、温泉なども至るところに湧き出て流れてをり、砂糖椰子やピサンやドリアンの木の間にはみかんやコーヒーやカカオやアポカードの園圃がありバタック人のうちの里馴れた種族が素朴な笑顔で働いてゐる。市場には熱帯の芳烈なさまざまな果実のほか、白菜とキャベツとか時にはセロリーやアスパラガスなどもあり、小鈴をつけた馬車に乗った中国人コックやインドネシア人のバブウたちがそれらのものをいっぱい抱えて通る。市場の前に緑や黄色の自動車をとめて、従者に籠を持たせ活発に青物をみて廻る若いマダムもある。二つの火山を負い広いトバ湖を望み、目路のかぎり涯は雲に入る平原をみはるかす風光と、水と、豊かな

熱帯の富と、爽涼の気温と、これらものをひとつに集めていまは天上の樂園のやうなこの避暑地は開かれてからわづかに二三〇年だといふ。日本婦人を妻とする一オランダ医によつて見出されたと副えられてゐる。(『椰子真珠』六〇頁)

ここでは、自然や建築、そこに住まう人々などに焦点を当てることによつて、彩りあるブラスタギ街の描写が組み立てられている。多種の花々、野菜、果物などは多民族で構成された街の人々と並んで、この高原にある街の独特な風物となっている。その自然の中で、人々は日々の生活を営んでいる。しかし、この引用で注目したいのは、人々の行動や街の風景の描写よりもむしろ、彼らの社会的位置である。

戦前のスマトラにおけるホテルと別荘の所有者はオランダ人であつた。引用文にある「アラビア風や中国風や洋風の別荘」は、裕福なアラビア人やインド人商人たちが休日を過ごすために借りる別荘である。また、「ミナンカボウ^⑩建築の屋根を巧に取入れたエキゾチックな学校」とは、西スマトラで始めて設置された女性専用のマドラサのことを指している^⑩。当時、オランダ植民地政府の政策によつて、教育は貴族、政府で働く上層の人々の子ども、裕福な商人の子ども、オランダに留学した人もしくはオランダ学校の卒業生の子どものみ限られていた。引用文中で「校舎や庭にはマレーやジャワやそのほか南方各地からやつて来た富豪の子女のたのしげな嬉戯の声がひびく」と描かれているように、この

マドラスの生徒たちは社会階層の上位に君臨する人々の子どもたちである。引用文はつづいて学校から市場へと場面を移し、カメラのように視点を切り替えていく。市場ではオランダ人の妻である「マダム」の姿もあり、引き連れた従者に買い物の籠を持たせているという描写から彼女の社会階層が窺える。

注意すべきは、上に引用したブラスタギの風景描写には低い階層に属する人物たちも含まれているという点である。農民のバタック人は肥沃な土地が実りを結ぶように「素朴の笑顔で働いている」。さらに、自動車に乗った「マダム」と彼女の従者と対比するように、馬車に乗っている中国人のコックとインドネシア人のバブウ（下女）が市場で買った野菜や果物を自分の手で「抱えて通る」。確かに、南進した中国人は商業で成功する幸福な商人のみならず、苦力やレストランの従業員、もしくはオランダ人の住宅でコックとして働く中華系の人々も多かったのである。「インドネシアのバブウ」の描写は、彼女たちがジャワ島から移住してオランダ人の下女として働いていることを示唆するものである。当時、白人の家にはジャワ人の下女、マレー人の下男、中国人のコック、幾人かの現地人を採用することが珍しくはなかった。最後に、街の描写の中心で、日本人女性とオランダ人との結婚の記述もある。

前述したように、スマトラ社会でもっとも上位にあるのが西洋人のプランター（栽培者）である。プランターについて、作中では次のように述べられている。

プランターといへば、スマトラでは何物よりも敬愛せられた。軍人も商人もプランターに及ばなかった。教師や学者が尊敬せられるのはプランターを助けるが故であった。（『椰子真珠』七七頁）

当時のスマトラ経済は栽培業者を軸とし、西洋人のプランターが社会階層において最上のエリートであった。したがって、社会的な言語のヒエラルキーにおいても、オランダ語が最上位を占め、つづいて事業や政治の世界で用いられる英語がつづくオランダ語、英語につづいて、市場や現地の学校、農園などで使用される民衆的言語としての現地語が位置づけられる。このような言語的ヒエラルキーを背景として、当時のスマトラでは実際に、宗主国が現地語を下層階級の位置にまで圧迫するという言語植民地化が実行されたのである。

現地人は往々にしてこの言語階層を利用していたが、『椰子真珠』において現地人の言語階層の奪用は、奇妙な会話パートナーを生み出している。それは、ソルタンの息子アフマッドと中華系の楊の下記の対話に見ることができる。

ちがいますよ。遊びに行ったんぢやない、用事で行って来たのです。若いインドネ

シアの王族はむきになってオランダ語で抗弁した。

それには長すぎるテ。一と月の予定が半年にもなるのはね

楊は相かはらず訛りの多いマライ語に英語をまじへて喋っている。(『椰子真珠』八頁)

アフマッドは楊の言葉に反応する際に、母語のマレー語もしくは聞き手の母語の中国語を使わず、オランダ語で回答する。言語階層の観点から考えると、貴族であるアフマッドはプランターが属する階層の下に位置づけられている。楊の場合はメダ市の華僑協会の会長であるにもかかわらず、アフマッドはいまだに社会階層上は中位に甘んじることとなる。アフマッドが母語であるマレー語ではなく、より上位のオランダ語で楊と対話したのは、楊に対して、自分の社会的地位がより高いことを誇示するためだと考えられる。また、アフマッドの言語使用には、自身がオランダ語の教育を受けたという証拠を強調するという効果もある。当時、オランダ語教育は貴族に制限されていたため、インドネシアの間にも言語のヒエラルキーが生じていた。あえて母語ではないオランダ語を用いて自身の優位性を確たるものにするという言語使用のパターンは、オランダ植民地時代のインドネシア文学によく見られる。たとえば、プラムディア・アナンタ・トゥールの小説『人間の大地』では、貴族であり西洋文明化した自分の立場を強調するため、主人公シニョウ氏がインドネシア人同士の間でもオランダ語を使用する様子が多く描出されている。

楊はアフマッドにオランダ語を用いず、マレー語や英語で応答している。楊は「商人」かつ「移民」という二つのアイデンティティを持っているため、オランダとの政治的紐帯を持って、オランダ語教育も受けていないのである。それゆえに楊は商人の間で一般的に用いられている英語と現地語のマレー語で意思疎通を行うが、彼が中国語で答えられない理由はまず、中国語がマレー語のように広く使用される言語ではなかったことが挙げられる。中国語の使用は、中国人同士の会話に限定されていたのである。中国語は、インドネシア語が公用語化される過程で、確かに言語構造の面で多少の影響を与えた。しかし、マレー語、ポルトガル語、アラビア語、サンスクリット語などの異言語と比べて、インドネシア語の構築過程における貢献が少なかつたため、中国語は社会的によりマイナーな位置にあったのである。

『椰子真珠』が執筆されていたときには、インドネシア語はいまだにインドネシア全体で一貫して使用されてはいなかった。一九二八年い一〇月一八日で開催された「青年の誓約」によってようやくインドネシア語という共通語が生まれたが、それ以前にはマレー語、オランダ語、ジャワ語、あるいは民族語を各自が用いており、言語の統一がなされていない状態であった。言語が真に統一されるのは、戦後の一九四八年以降のことである。一九四二年より日本帝国主義がオランダ植民地主義を排斥し、新たな支配を開始した。大東亜共栄圏の文化建設の一環として日本語が普及することで、スマトラの多言語状況も多少の

変容を迫られたのである。

第二節 曖昧な言語戦争

日本語がインドネシアに入る前に、インドネシアで使用されていた言語は、ポルトガル語、マレー語、オランダ語である。現地語は、家族や同じ民族集団内という限られた範囲でのみ使用されていた。そして、オランダの植民地支配が始まる前には、マレー語とポルトガル語がインドネシアのリンガフランカとされた。マレー語は現地語と並んで文化人のエリートや改宗者、貿易業者の間の使用言語として設定された。ポルトガル語はアジア西部や東インドネシアの人々、ヨーロッパ人の間でも使われた。ポルトガル語は百年ほどアジア全体での接触言語になったため、「東のリンガフランカ」と呼称されていた。

このように、オランダは二つのリンガフランカを征服しなければならなかった。特に、ポルトガル語はヨーロッパ人の間でも使われていたため、オランダ語の使用が徐々に減少していった。それを予防するため、一六三六年、オランダの植民地長官アンソニー・ヴァン・デイメンはポルトガル語の使用を禁止する命令を出した。当時のオランダ植民地政府は、政治と教育の現場ではオランダ語を使用することを義務づけた規則を発令した^⑩。

大半のオランダ人は、現地人へのオランダ語教育の導入に対して抵抗した。支配者とし

てのオランダ人は、現地人がオランダ語を話すことで自分たちと同等の立場になることを拒絶したのである。被支配者たちとの境界を画定し、ヒエラルキーを確立・維持しようとするのが西洋植民地主義にたびたび現れる特徴である。しかし、現地人たちにとってオランダ語を学習することは、西洋に接近し、その文明と知識を習得するための通路であったと思われる。インドネシアにおける最初のフェミニストであるラデン・アジェン・カルテイニは、一九〇三年に発表したオランダ政府への手紙「Geef den Javanan opvoeding」(ジャワ人に教育を与えよ)のなかで「西洋文明を理解するために、オランダ語を乗り込んで、ヨーロッパの重要な出版物をすべて翻訳してジャワ人の目の前に置いてください」と述べているように、インドネシアの青年や知識人にとってオランダ語は、独立運動に役立つ知識を得るための重要な手段だったのである^⑧。

一九四二年三月よりインドネシアを占領下に置いた日本軍政の目的の一つは、インドネシアからオランダの影響を払拭することであった。具体的な戦略として、軍政はオランダ語の使用を禁止し、マレー語もしくはインドネシア語を共通語とした。オランダ語で書かれた店の看板、学校や会社の名称などはすべてインドネシア語に取ってかわられ、日本語とインドネシア語以外の出版物も禁じられた。一九四二年一月八日、オランダ統治以来、三百二〇年間にわたってバタビヤと称されてきたインドネシアの首都がジャカルタに変更されたように、街の名前もインドネシア語化された。ゆえに、日本占領下のインドネシア

では、日本語が普及すると同時に共通語としてのインドネシア語が進展した重要な時期となる^④。

『椰子真珠』のなかでは、オランダ語、日本語、インドネシア語というスマトラにおいて権力を持った三つの言語が共存し、お互いに対峙している。前述したように、スマトラには長らく社会階層と結びついた言語ヒエラルキーが構築されていた。スマトラの人々はオランダ植民地支配のもとにあっても、オランダ語を使用することで「自分の社会的地位を向上させ」「西洋の文明と知識を習得するために」「自発的にオランダ語を使用した。オランダ植民地期には、オランダ語を頂点に戴いた言語ヘゲモニーがスマトラ社会に普及したことで、植民者とオランダ語能力を有する被植民者の双方が利益を得ていたのである。日本語が導入される以前に、オランダ語とマレー語はそれぞれの領域を担い、社会的役割も整理されていた。オランダ語は政治空間を占有する一方、マレー語はリングフランカとして社会的空間で使用されるというように、これら二つの言語は重なり合わずに共存していたのである。

日本軍は東南アジアを占領し、大東亜共栄圏というスローガンのもとで文化建設を実施しようとした。軍政による文化建設できわめて重要な戦略として位置づけられたのが、言語政策であった。池田浩士は、『大東亜共栄圏の文化建設』のなかで、諸民族が一体となつて共栄圏を構築するのに不可欠な要素として、第一に言語が位置づけられていたと述べて

いる。そこで「言語対策の根本方針」として、①欧米語の駆逐、②共通語及び公用語としての日本語の採用、③各民族に民族語ないしは国語の決定、普及という三点を示している。また、池田は、日本軍政がこれまで圏内に流通していた英語、オランダ語などを駆逐することを最重要の課題としていたとも述べている^④。

こうして日本語は新たな宗主国の言語としてスマトラの言語社会に侵入した。『椰子真珠』は、直樹を通して、既に安定していたスマトラの言語社会が日本語と拮抗することはいかなる緊迫が起こるかを描出している。直樹は西国のある小藩の藩主で明治維新の功臣の孫息子であるため、外国語の知識を持っている。幼い頃から外国語に興味を示し、外国の小説を読むことが彼の趣味であった。直樹はオランダ語で書かれた小説も読むことができる。日本語以外の言語能力も持っているものの、直樹はスマトラに住む人々に対していつも一方的に日本語でのみ話し、他人が自分の意図を理解しているかどうかを無視する場面がたびたび記述されている。

たとえば、お常の家でアフマド、センベック、惇一郎、楊と飛行機の不時着という出来事を回想していた際に、アフマドは「もし君が乗っていたら？」と気軽に直樹に問いかける場面がある。ここでアフマドはマレー語もしくは英語で話しかけたとしよう。しかしアフマドに対して直樹は不作法にもマレー語を用いずに日本語で叫びながらアフマドに応答するのである。さらに、会話の最後に直樹は「ゲッ」と「異様に響き声をあげてわ

らった」と記されているように、話し相手を不愉快にさせる雰囲気を作り出すのである。直樹の態度を見たお常は次のように自分の考えを述べている。

人間といふものは不思議なものである。直樹のその日本語の意味がみんなに通じたらしいのである。部屋ではマレー語とオランダ語と英語が使われ、彼らは日本語といへばフジヤマとゲイシヤくらいしか、アフアムドなどはそれすら知らないのだが、それでもすぐ直樹の気持ちはわかってしまった。直樹はわかるうとわかるまいと、人がどう思はうと斟酌するやうな男ではないから、自分の気持ちを吐き出すのに一番都合のいい言葉を使ったのであらう。(『椰子真珠』一〇四頁)

右記の引用からは、日本語がスマトラの言語社会に新たな言語として認められていたことが窺える。現地人の日本語の知識は「フジヤマ」と「ゲイシヤ」に限られているとされているが、直樹の粗野な話し方によって、日本語で彼が伝えようとしている意味が「わかってしまった」。その一方、直樹にとって「話す」という行為は、他者とメッセージを伝達しあう行為ではなく、単に自分が言いたいことを吐き出し他者にぶつける行為に他ならない。そのため、彼は聞き手の言語能力を考慮することもなく、自分の事情のみを優先させ、自分にとって最も使用しやすい母語を用いて気持ちを伝えるだけなのである。

直樹の人物像は、相手の状況を斟酌しない利己的な存在として構築されている。しかし、前述した日本語・オランダ語・マレー語のヒエラルキーと当時の日本の文化政策という文脈に位置づけてみると、この場面は、占領地における新たな支配者となった日本軍政の側に直樹が属していることを自ら強調する行為としても読み取れる。異言語である日本語はまだ日本軍政下にある現地人には馴染んでいない言葉であるため、強制的もしくは一方的に彼らに投げかけられるばかりなのである。

直樹のスマトラにおける滞在期間については作中で明確化されてはいないものの、彼が日本からスマトラに出発しようとした日に、大通りには多くの小学生たちが旗を持ち、「バンザイ」を叫びながら行進し、その光景を見た直樹は「大場鎮といふ町が一昨日占領されたことを知った」。この場面は、『椰子真珠』で唯一となる時間を指示する手がかりである。大場鎮は上海近郊の要衝であり、一九三七年一月二六日に上海派遣軍によって攻略された。直樹がスマトラに出発したのは日中戦争と時を同じくしていることになる。

直樹は、家の使用人に対しても言語使用の面で粗野な態度をとる。一九三七年からスマトラに住み始めたため、彼は現地語を十分に話すことができたと推測できる。アフマッドによれば、直樹は彼に対して、「若い者同士といふのか、マレー語を使ったり英語を使ったりして話し相手にしようとしてみたが、直樹は気が向かなければ返事もしなかつた」という。直樹は実際に日本語以外にも、オランダ語、マレー語、英語を話すことができるので

ある。しかし、異国に居住しているにもかかわらず、直樹は母語である日本語以外の言語を話すことには消極的である。さらに、彼は異国人と日本語で話す時、しばしば声を荒げる。アフマドの質問を答える時、彼の妹であるクスタリナ妃と邂逅する時や家で働く現地人と話す時に、直樹は彼ら彼女らの社会的位置を無視して、大きな声でコミュニケーションを取る。たとえばそれは、左記の引用にあるように、現地人の使用人との関係において顕著に現れる。

青年はまた頷をしゃくってインドネシア人にただ一言「チャリ」と言った。インドネシア人は担架を置いてぽかんとして旦那の顔をみつめた。日本語の問答が彼らに解る筈はないからチャリだけで何を探すのか見当はつくまい。彼は歯みつくやうに追ひかけて呶鳴った。「バカ、チャリ。」

バカとはマレイ語で遺伝とか血統、家柄、天性といふことである。交尾といふ意味もある。小作は日本語のバカであると説明もしない。が二人は旦那トゥアンの権幕に恐れをなしたか横つ飛びに駆け出して行った。惇一郎は何を探し出して来るかと心配になったが間もなく戻って来て、怖々と復命した。別段へんなものも提げてはゐなかつた。

「テイダ、アダ。」

「やっぱりテイダアダさうですよ」（『椰子真珠』六八頁）

この場面の直樹と使用人のインドネシア人との会話の発端は、朝倉惇一郎が、怪我して
いる自分を山からお常の家まで背負って運んでくれたバタック人に感謝を伝えようと思
立ったことであつた。お常の家にそのバタック人の姿が見当たらなかつたため、惇一郎は
直樹に彼を探そう頼んだ。直樹は使用人にバタック人を探そう命じたが、彼はただ一
言、「チャリ」（探せ）とだけ言うと、使用人はその真意を把握できなかつた。使用人が自
分の命令に適切に応じない姿を見て、直樹はもどかしくなり、「バカ、チャリ」とコード・
スイッチングをする。

この場面には、スマトラ社会の多言語状況に関する問題が四つ現れている。第一に、中
途半端な現地語の使用である。直樹は現地語を使つても、一言だけしか発さないため会話
が成立せず、メッセージも伝わらない。第二に、侮辱するためのコード・スイッチングで
ある。ここでのコード・スイッチングは、話し相手を見下すと同時に話し手の優位性を強
調する役割を果たしている。第三に、ある言葉が同じ表記で書かれていても、他の言語で
は意味が異なるため、使用するときには説明が必要になるといふことである。直樹は日本
語における「バカ」といふ言葉の意味を説明しないため、当初からの誤解が解決しないま
ま会話が続けてしまう。最終の第四は使用人にとって何を探すのかが不明であるため、彼
は適当に「テイダ、アダ」（ありません）と答え、直樹は彼の言葉をそのまま惇一郎に伝達

した。この場面には、言語による情報伝達の失敗が滑稽に描き出されているが、すべての失敗の原因は、異言語とその話者に対する直樹の無礼な態度である。

直樹は南方に進出した一民間人であり、政治権力とは無縁な存在である。しかし、「外地日本人」という側面から見ると、直樹は南方における日本軍政を代表しているのと言える。たとえ母国から離れても、自らのアイデンティティを構築した「日本」・「日本人」・「日本語」という要素の結合から逃れることはできない。スマトラ社会における新たな支配者である日本軍は、宗主国語としての日本語のヘゲモニーを強化するため、現地語及び敵の言語を圧迫した。長らくスマトラに存在した言語社会に緊張を強いるかのように現地の外国人および現地人を脅かす直樹の一方的な行動は、「日本語」・「日本人」をスマトラの言語階層の最上位に置こうとする努力として読むことができる。作中には同時代の戦争について一度も言及されることがないため、一見すると多民族間の平和な共同体が提示されているようにも思われる。しかし、理想郷のような共同体のなかには、「新宗主国」、「旧宗主国」、「現地人」の言語をとりまく関係から、不安や混乱が生起しているのであり、これは、曖昧な言語戦争として解釈できる。

第三節 言語ヘゲモニーにおけるお常の役割

他者との関係性において、お常は直樹とは対照的に描かれている。直樹が粗野で自己中心的な人物として描写される一方、お常は他人に配慮し、どの国の出身者に対しても親しみを覚える人物である。彼女は負傷した異国人たちに居場所を与え、皆が全快するまで治療し、暖かく世話をする。そして、直樹が他の同居人たちと問題を起こすと、お常は常に仲介者となり、問題を解決しようとする。お常の家はあたかもユートピアであるかのよう

に、民族、社会階層、職業を区別せず、多様性に開かれた平和な空間である。お常はスマトラの人々と同様に、複数の言語を運用することができる。いわゆる「からゆきさん」であったころ、オランダ人の客が多かったためだと思われるが、彼女は日本語のほかにオランダ語の能力を習得している。そして、女性の性労働が禁止されて以来、北スマトラのシヤンタル街で雑貨屋を開いた。ここでもさまざまな民族的背景を持つ客たちと対面する経験があったため、現地語を習得する機会を得た。雑貨屋を経営した経験から、お常はマレー語よりオランダ語の方が巧みであるが、会話に際して言語を選択する場合には、日本語、オランダ語、マレー語を自在に使用する。西成彦は、『外地巡礼』において、長い鎖国から開放された日本では、エリートや軍人に始まり、からゆきさんなどのような「進取の気性に富む内地日本人の暗躍ぶりはまさに「外地の日本語文学」が好んで描くところとなった」と指摘している^⑧。お常はまさにそのような人物の一つの典型であ

る。

お常は二〇年前に長崎天草からスマトラに渡って来た。明治時代から南洋へと渡って来たからゆきさんは、シンガポールに集まり就労していた。しかし、彼女たちにとって、シンガポールが最後の目的地であったわけではない。競売で漏れた女性たちはマレーシアのクアラランプル、ペナン、蘭印の港町へと送られた。シンガポールから最も近い港町は北スマトラのメダン市であり、これがお常の南進の順路であると推測される。北スマトラには広大な農園があったため、農園で働く白人を接待する海外売春婦の需要が高まっていたのである。一八九七年のデータによると、北スマトラにおけるからゆきさんの人数は三百人を超え、年を経るにつれてその数が増加していき、一九〇一年にはメダン市だけでも四千人ほどのからゆきさんがいたと記録されている^⑩。

当時、外地で身を売るため進出した女性たちは、日本では「国辱として仕様のないあばずればかりのやうに」思われたと作中に記述があるが、お常の描写については、からゆきさんをとりにくく固定観念を払拭するような人物形象がなされている。「実際には日本人の芸妓などよりずっと家庭的で純情な世話女房式の女が多かった」と書くことで、作家はからゆきさんを庇うかのように、お常を通して外地における日本女性の役割を照射している。また、作中に「その家に日本人の女があるかどうかは玄関をはいれずすぐ解るといはれてゐた」とあるほど、床の磨き方や和風の飾り物など、お常が家を隅々まで管理している様

子から日本人女性の特徴が肯定的に記されている。さらに、お常は阿姆斯特ダム商事組合のジェネラルマネージャーと結婚した美代と二人でお茶会を催すなかで、日本から届いた虎屋の和菓子を用意してある。つまり、お常は社会資本と文化資本を有した日本人女性を模倣することで、異国でも日本文化を保持しつづけているのである。このように、外地の日本人の中で、日本を代表する人物は惇一郎や直樹ではなく、お常なのである。内地で「国辱」とされたからゆきさんは外地で日本人女性の優秀な美德を象徴し、彼女らが実践した日本文化・習慣によって日本の代表者の役割を担っている。

飛行機の不時着で怪我をした患者たちは全員、無事に回復したため、お常の家を去ることになった。彼らが帰路につく前に、お常は快気祝いを兼ねた送別会を開催し、饗宴を準備した。お常はさまざまな日本料理を供した。それを見たオランダ人のセンベックは、お常と下記のような対話を始める。

その夜お常の心づくしでセンベックもよばれて来た。センベックは松葉杖をつけばひとり歩き出来るほどになつてゐた。食堂にはいつたとき二人は思はず感嘆をあげた。

「おゝ、コレ、シャシミ」

自称日本通であるセンベックはさしみ皿を指して得意さうに言った。日本のすゝきに似たスナギンといふ魚を使ひめづらしい包丁の冴えをみせてわさびだの花つききう

りだの型どほり美しいつまをあしらってある。お常がうれしさうに笑ふと、センベックは更に肉とねぎを盛った大皿とこんろを指して、次に叫んだ。

「コレ、スキヤキ、コレ、マルン（うなぎ）カバヤキ、コレ、ウダン（えび）テンポラ、コレ、ティラム（かき）えゝ、コレ、コレ、．．．」（中略）

センベックは親指を上に向け、バグウス、バグウス、と頻りにインドネシヤ風のしぐさでほめてゐる。（『椰子真珠』一四五頁）

右記の引用には、お常の家における多言語状況が活写されている。オランダ語を解するお常に対して、オランダ人のセンベックは日本語とマレー語を組み合わせて話している。センベックは会話の途中、「コレ、ウダン（マレー語のえび）テンポラ（日本語の「天ぷら」）とも、オランダ語の発音で「天ぷら」とも考えられる」というように、日本語とマレー語のコード・スイッチングを行っている。センベックが日本語をわずかに理解していることは確実であるが、なぜ彼がオランダ語を使わずにお常の母語である日本語を選択して会話するのかという問題は、スマトラにおける社会階層化した言語使用の問題を追究する本論文にとって重要な論点である。

センベックのコード・スイッチングを検討しよう。センベックがマレー語で言葉を発したのは、日本語による表現方法がわからない事柄を埋め合わせるための行動であったと思

われる。しかし、彼のマレー語と日本語の知識が不十分であるにもかかわらず、母語に頼らず懸命にこれらの言語で話していることに鑑みれば、センベックが母語で応答しないということとは、日本に対するオランダの降服として解釈することもできるだろう。

右掲の会話には、多言語状況における過去と現在における社会的イデオロギーの共存が表象されている。旧支配者であったオランダ及び宗主国語であるオランダ語が今や無力となった。以前のスマトラの社会階層では最上位にあったオランダ語が、新支配者の言語である日本語に取って代わられたのである。当時、日本の言語政策は「欧米言語の駆逐」と「現地語の尊重」^⑧を主眼としていたため、オランダ語の勢力を駆逐しつつ、マレー語の拡大を図っていた。言語の戦争とは旧宗主国語と新宗主国語の間での争いであり、マレー語は中立的な位置を占めていた。

ここで、安田敏朗が『言語帝国主義』のなかで提起した、「言語そのものが権力なのか、それとも言語そのものは中立で、権力が利用する道具にすぎないのか」という問いは重要である^⑨。『椰子真珠』における日本語・オランダ語・インドネシア語（マレー語）の闘争から考えると、言語そのものが権力なのではなく、権力が中立な言語を利用しているのではないかと考えられる。オランダによる政治はインドネシアの植民地支配を強化するため、旧リంగాフランクであるポルトガル語の勢力を払拭し、政治と知識産出の領域ではオランダ語の使用を拡大した。日本の場合は、大東亜共栄圏を実現するため、日本語を大東亜共

通語とし、「指導国家」としての権力を強調した。その一方で、支配されたインドネシア側は、双方の支配者から独立を求める道として、オランダ語と日本語という支配者の言語も利用した。オランダ語によって独立運動に役立つ西洋の知識を獲得しつつ、日本軍政の言語政策をインドネシア語の普及の契機としたのである。

日本語に降服したオランダ人であるセンベックは、言語使用について強制を受けず、自発的に日本語を使用し、日本文化も体験している。これが可能となるのは、お常に拠るところが大きい。これまでお常は日本文化の媒介者として外地で日本文化を紹介することで、現地社会の言語階層における日本語のヘゲモニーを強化している。小森陽一は「民族や人種としての「日本人」、国家や国籍としての「日本」、言語としての「日本語」という関係はへ三位一体」のように結合し、「日本文化」はその統一のもとに成立していると述べている^⑧。お常にはこの四項の結合が反映されており、外地にありながらも「日本語」と「日本文化」を守りつづけている。つまり、お常は内地であれ、外地であれ、人種が日本人の場合には日本国籍に属し、日本語で話す場合には日本文化と不可欠な関係を持っているということを示唆する存在である。小森も「人種や民族が、自らは決して選択できない項目であり、国籍に関してもその選択がきわめて困難であるに対して、言語と文化の領域については、一人の人間として選択をすることができない」と主張している^⑨。二〇年を超えてスマトラに住むお常は「言語と文化」を選択できるはずだが、彼女は「日本語」、「日本文化」

を絶ゆまず継承することによって、その四項の結合を体現しつつづけているのである。そしてスマトラにおける言語と権力のディスクールにおいて、日本文化を宣伝するお常は、旧支配者のオランダ人であるセンベックが自発的に日本語を習い、日本文化を体験することを促すことで、彼をして日本語のヘゲモニーを内面化させる役割を果たしているのである。

結

本章は小山いと子が体験したスマトラの多言語状況から生れた小説『椰子真珠』を考察してきた。長期にわたるスマトラの滞在で、小山は厳密な現地視察や現地人との交流会を豊富に得ることができた。この経験は小山の文学に還元され、彼女は豊かな言語世界と多彩な社会としてのスマトラを描出できたのである。『椰子真珠』の特徴は、スマトラの多言語状況と登場人物たちの複雑な意思疎通のありようにあると言えるだろう。

本章では二つの観点から登場人物を取りまく多言語状況を考察した。第一節では現地の状況に注目し、スマトラにおける言語世界を構築した社会階層とその変容を明らかにした。スマトラの言語世界はそもそもさまざまな土着民族の言語によって構築されていた。しかし、オランダによる植民地化や農園の労働移民の流入によってスマトラの社会階層が変化した結果、オランダ語が言語階層の上位を占めた。第二節と第三節は、「外地日本人」を通

してスマトラにおける日本語の普及を考察した。現地人・現地語に対して圧力を加えた直樹の行為からは、日本の言語植民地化が読み取れる。「日本語で叫ぶ」という直樹の暴力は、スマトラの言語階層における「日本語」の権力を強調する行動として解釈できるのである。対照的に、お常は外地における日本の代表であり、お常が紹介した日本文化によって日本語の普及が促進された。結果として、オランダ人のセンベックまでもが自発的に日本語で会話を始めたのであり、お常が言語ヘゲモニーを活性化させた成果としてみる事ができる。

『椰子真珠』は戦時中から戦後に至るまでに執筆されたという事実にもかかわらず、戦争の描写が一切見当たらない。しかし、作中における日本語と異言語の対峙から（曖昧な）言語戦争が進行していたと考えられる。旧宗主国の言語であるオランダ語、新宗主国の言語である日本語、さらに被支配者の言語であるマレー語、これら三つの言語間の闘争によってスマトラの言語階層が揺るがされた。すなわち、日本語がオランダ語にかわって言語ヘゲモニーを握ることによって、旧宗主国は新宗主国に降伏したのである。

小山が戦時中のほとんどをスマトラで過ごしたせい、作中でスマトラ以外の地域の状況に言及されることはない。『椰子真珠』には言語の問題のほか、異文化とアイデンティティ、故郷への旅愁などといった外地日本人が直面した問題をとりあげているが、戦時中の内地日本人もしくは内地の状況は語られない。スマトラへの局所性は、作中における多

言語状況の描写にも見ることができ。スマトラはポリフォニーの空間、さまざまな言語が響きあう状況を表象する一方、日本は回想や登場人物の夢という形で遠く離れた過去として登場する。

『椰子真珠』はそのタイトルが示すように隠された宝石のごとく作中には興味深い箇所が実に多く残されている。とりわけ忘却される外地日本人と彼らのディアスポラの状況は現代の視点から読むと新しい視角が得られることだろう。スマトラの多言語状況のほかに、元からゆきさんのお常、オランダ人の島妻（ニヤイ）に採用された美代という外地に移住した日本人女性についても今後、さらなる考察が必要である。そして、作中には真の「椰子真珠」とたとえられるソルタンの娘、クスタリナ王女も登場する。「国辱」として描かれるからゆきさんと純粋かつエリートの現地女性の対照的な構図は意図的に設定されており、その対照化の効果について、今後の研究課題として設定したい。

注

① 『椰子真珠』 「あとがき」 （中央公論社、一九四九年二月一〇日 三七八頁）

② 「あとがき」によれば、「椰子真珠」とは「幾百万の椰子の実の中にただ一つあるかな
　　しかの、非常に稀な生ることのある美しい珠玉である」という。ここには科学的説明は
　　ないものの、非常に稀な真珠であるため現地人にとってそれは半ば非現実的存在である
　　が、あるいは現実存在するかもしれないものとして知られている。

③ エステート・タナアエルラジャは北スマトラ州アサハン市エステート・タナラジャを
解明したと思われる。作中にはエステート・タナアエルラジャがメダン市よりもリオ州
との境界近くにあるため、アサハン市の位置と合致している。

④ もともと直樹の本名は山城直樹であるが、スマトラに出发する時に高橋権造という名
前で記録された。「直樹」はお常の呼び方でありながら、直樹自身は権造と自称してい
る。作品全体で、彼の名前は「直樹の権造」と記されている。

⑤ 西成彦『外地巡礼―越境的日本語文学論』（みすず書院 二〇一八年一月、四三頁）

⑥ 前掲、西成彦『外地巡礼―越境的日本語文学論』（みすず書院 二〇一八年一月、二六
四―二六五頁）

⑦ Michael Van Langerberd. 『Class and Ethnic Conflict in Indonesia's
Decolonization Process: A Study of East Sumatra, Indonesia No.33』 Cornell
University Press 一九八二年四月、三―四頁） <https://www.jstor.org/stable/3350925>

⑧ ジャバのマレー語は、高級マレー語と下級マレー語の二つに区別される。高級マレー語
（High Malay）はソルタンの宮殿やイスラム教のコーラン（Quran）の翻訳で使用され
る一方、下級マレー語もしくは市場のマレー語（Low Malay / Market Malay）が日常生活
で使用される。下級マレー語を基礎として、ポルトガル語、サンスクリット語、アラビア
語、中国語などの影響も受けながらインドネシア語が構築された。（Kees Groeneboer.

1998. Gateway To The West; The Dutch Language in Colonial Indonesia 1600-1950 -
A History of Language Policy (translated By Myra Scholz). Amsterdam; Amsterdam
University Press. (二五頁)

- ⑨ Sitti Djaoerah. 1997. *A Novel of Colonial Indonesia* by M. J. Soetan Hasoendoetan. Translated and with an Introduction by Susan Rogers. University of Wisconsin; Madison. Center for Southeast Asian Studies Monograph 5. (三頁)
- ⑩ ミナンカバウはスマトラ西部に住む民族である。
- ⑪ マドラサは正式的なイスラム学校である。オランダ植民地時代、イスラム教育はモスクとイスラム寄宿学校に制限されていたが、一九〇九年、西スマトラのバトゥサンカル市で最初のマドラサが設立された。その後、西スマトラに限らず、その他の地方にもマドラサが続々と建設されており、女性専用のマドラサも一九一五年に設立された。
- ⑫ Kees Groeneboer. 1998. *Gateway To The West; The Dutch Language in Colonial Indonesia 1600-1950 - A History of Language Policy* (translated By Myra Scholz). Amsterdam; Amsterdam University Press. (二二三～三〇頁)
- ⑬ 同前、(二〇八頁)
- ⑭ 同前、(二七四～二八〇頁)
- ⑮ 池田浩士「大東亜共栄圏文化」とその担い手たち『大東亜共栄圏の文化建設』(人文書院 二〇〇七年七月、三一四～三一五頁)
- ⑯ 前掲、西成彦『外地巡礼―越境的日本語文学論』(みすず書院 二〇一八年一月、二六七頁)
- ⑰ Shimizu Hiroshi, Hirakawa Hitoshi. 1999. *Japan and Singapore in the world Economy; Japan's Economic Advance into Singapore 1870-1965*. London; Routledge
- ⑱ 安田敏朗「帝国日本の言語編制―植民地期朝鮮・「満州国」・「大東亜共栄圏」(一)」『言語帝国主義とは何か』(三浦信孝、糟谷啓介編者)(藤原書店 二〇〇〇年九月、七二頁)
- ⑲ 同上
- ⑳ 小森陽一「へ日本近代文学」という問い」『へゆらぎの日本文学』(NHKブックス

② 「 839」 一九九八年九月、六月
同上

序

佐多稲子の短編小説「挿話」は『新潮』（第四十年第七号、一九四三年七月）に発表され、一九四七年、『旅情…小説集』（飛鳥書店）に収録された。その後は続々と『佐多稲子作品集 第十五卷（一婦人作家の随想）』（筑摩書房 一九五九年）、『佐多稲子作品集 第五巻』、続いて『佐多稲子全集第三卷（素足の娘）』（講談社 一九七八年）に再録された。

「挿話」は佐多稲子のスマトラでの経験に基づいた作品である。戦時中、佐多は林芙美子らとともに陸軍省報道部が発令した「新聞、雑誌記者、女流作家南方派遣指導要領」によって南方視察に派遣された。一九四二年一月一六日^①にシンガポールに到着したのち、マレー半島を回り、シンガポールに戻った後は臨時徴用作家^②と呼ばれる作家たちは自由行動を許され、佐多の場合はスマトラに赴いた。スマトラの経路に関して、「スマトラ各地を巡ったか、資料が不足していて跡付けられない。各地を折々に訪れたとも考えられるが、一応の経路として、バンダアチエ↓タケゴン↓トバ湖↓ニアス↓ブキティンギ↓パダン↓シヤンタル↓メダンを想定しておく」と北川秋雄が指摘しているように、佐多は主にスマトラの北部と西部に滞在した^③。一九四三の早春に、祖母が死去したため、四月の中旬にシンガポールから出発し、台湾経由で帰国した^④。「挿話」には「メダンの滞在が二カ月ほ

ど」という記述があり、年譜と合わせて、実際には佐多が一九四二年一二月末から翌年の三月までメダンに滞在したことが記されている。このように佐多稲子の南方経験は北部スマトラを中心に展開したと言えるだろう。

「挿話」の分析に先立って、北部スマトラを舞台に据えた戦時中の作品を概観しておきたい。帰国して一カ月後、佐多は一九四三年六月八日と九日の『東京新聞』に「南の農園」という連載記事を発表し、北部スマトラの広大な農園の状況を報告している。それ以前に、『文芸』（一九四三年六月）に「南の女の表情」という西スマトラの女性たちとの交流を書いた通信文を寄稿しており、本作品の後半には北部スマトラの民族、バタック族も少し触れられている。一九四三年七月一〇日の『読売報知』には、「南方より帰りて」という三回に渡る連載があり、第一回の「働く人の協力」にはメダンで過ごした正月について記されている。第二回の掲載（七月一三日）は「日本人の逞しさ」というタイトルのもと、北部スマトラのニアス島に渡った時に出会った日本の青年について書かれている。最後の第三回（七月一四日）は「女と服装の問題」として、現地の女性の服装について詳述されている。一九四三年八月の『新青年』には、現地の服装と履物についての話題を取り上げた「マレーの下駄」という文章が掲載されている。そして、一九四三年九月の『オール物語』では、日本占領下のメダン市を舞台として敵国であるオランダと現地人の混血児について語った小説「髪の嘆き」を發表している。

佐多の戦時中の作品は小説と通信ものという二つのジャンルに分けられる。それぞれ北
部スマトラで徹底的に行った視察の成果が発揮されており、外部の視点に立って対象を観
察するという佐多に特徴的な筆致が窺える。鳥木圭太は「旅行者の見物であったと語るよ
うに、観るべきものとして用意された植民地の情景を、外部の人間の視点から観察するよ
うに切り取るという点」が佐多の紀行文の特徴であると指摘している^⑤。

右記の作品はいずれも南方にある事物や現象を観察して題材にしているが、この点は現
地人の生活に溶け込んで内部の視点から南方を捉える林芙美子のスタイルと対蹠的である。
林芙美子の南方紀行文は現地人の立場に同一化し、現地の生活の内部から自分が観察し感
受したことを語っている。佐多の場合は、鳥木が言及しているように、「外部の人間の視点
から」周囲にあるものを観察し表現するため、戦時中の作品には佐多自身について語る作
品はあまり見られない。それゆえ、本論文は北部スマトラの農園で暮らした際に小説化し
た作家自身の経験が描き出されている「挿話」を研究対象とした。佐多稲子のスマトラ体
験を考察するため、「挿話」を中心として、長期に渡って滞在したサンパリ農園を舞台にし
た作品を分析する。

「挿話」はメダン市から自動車で一五分の距離にあるサンパリ農園という煙草園に居住
する日本女性の一日について語っている。本作品は、主人公と語り手が重ね合わされてい
る。作品は農園の中にある一軒のルマ・ブツサール（直訳すると大きな家）に住んでいる

主人公が異国の日常を適応しようとした描写から始まる。この巨大な農園の中に建つ農園の旧支配人の家には、一人の日本人女性が滞在している。家の主人と家族が遠く収容所に送られて以降も、家の状態は主人がいたときのままであり、仮の主人である主人公に不安を起こさせる。ある夜、米を盗んだ苦力の騒ぎ音で主人公が拳銃を持ち出すほどにただならぬ気配が漂った。翌朝、三〇年に渡って南方で暮らしている矢島という外地日本人が主人公の家に訪れ、矢島はインドネシア人女性と結婚して、生まれる子供は皮膚がまっ黒について文句を主人公に打ち明けたところで作品が終わる。

「挿話」の先行研究として、尹小娟は「佐多稲子の戦中と戦後―南方慰問を巡る一考察―」において「挿話」と「髪の毛」を取り上げ、「挿話」における「皮膚の色」による差別の問題に注目している。「皮膚の色を気にながらも受け入れようとする日本人の姿を描く佐多の捉え方は、いかにも安易だといえる。そこには、皮膚の色を気にかけること自体に、無意識の差別、自覚されざる日本人としての優越意識が潜んでいるのである」と指摘している^⑥。そして長谷川啓は「佐多稲子の大東亜戦争・2」において「挿話」における現地人の皮膚の色への軽蔑について「この戦争による日本の成功者についてはなかなか好意的な書き方である」と述べている^⑦。このように、先行研究では、作品の主軸を作家の南方体験よりも人種問題に見出し評価してきた。南方体験の作品化という側面からは、長谷川が「南方行きから直接生まれた短編小説「挿話」と「髪の毛」についても同様のことが

言えるのである。ともにメダンで見聞したことを作品化したものだが、これまでの悲哀感にそそられるような傾向とは違って、戦争状況の中で不適さに居直って対象を見据えているような筆致である」と評価している。いずれにしても、「挿話」は常に「髪の毛」と並列されて評価の対象となっており、独立した作品としての考察がまだなされていない。

「挿話」には主人公を取りまくさまざまな異国の音に溢れており、論者はこの点に関心を寄せている。主人公の日常には異国の音がバックグラウンドミュージックのように、日常の行動と共に流れており、それが発生した違和感、旅愁、不安など多岐にわたる感情が主人公の心理に影響を与えている。ある場面では「無気味な夜鳥の音」と「現地人の騒ぎ」を聞いた後、主人公が護身のために拳銃を出して、スマトラの日常の夜の景色が暴力的場面へと転じる。作家の側面から考えると、作中における「音」によるスマトラの描写が現地に対する作家の知覚と関わっていると考えられる。

文学テクストにおける音の位置づけについては、アンナ・スネーツが『Sound and Literature』において両者の関連性を理論化している。文学作品を執筆・受容する過程は、確かに「書く」「読む」という静寂に満ちた視覚的作業が中心を占めるが、文学テクストにおいては実際のところ発声、リズム、環境が作り出すさまざまな音を意味するサウンドスケープ、騒音といった音の要素が機能している。音それ自体は事物の存在を指し示し、個人と環境や社会との結節点となる。スネーツは同時に、文学作品は単に音を描写してそれ

を内部に保存するという機能だけでなく、音の構成と受容の過程が政治的・文化的枠組みの象徴として機能する点にも注目している^⑧。

スネーツの議論を踏まえて、本論文は三つの観点から「挿話」の音について考察したい。第一に、スマトラ農園を描き出すサウンドスケープの意味を明らかにする。第二に、異国の音と主人公の心理との関係性を考察し、最後に、矢島による現地人の「皮膚の色」への侮蔑を主人公が「聴く」過程を考察し、スマトラについての作家の知覚を探る。

第一節 スマトラ農園におけるサウンドスケープ

サウンドスケープは自然音・人工音を制御して作りだした音の環境と定義される^⑨。本論文では、この定義に依拠しつつも、サウンドスケープを文学が作り出し、あるいは音と音の間に仲介する表現と意味づける。サウンドスケープという枠組みを通して音を環境として理解すると、人間と境遇に築くのに役に立つ道具となる。マリー・シェーファーの『世界の調律』では、サウンドスケープという研究領域について「音響学と音響心理学からは、音がどのような物理的特性を持ち、それが人間の胸によってどのようなように解釈されるかを学ぶ。社会からは、人間が音に関してどのような行動をとり、音が人間世界、すなわち想像

力や心霊瞑想の世界のために人間がどのような理想的なサウンドスケープを創造するかを学ぶ」と説明している^⑩。

「挿話」の前半部には、主人公の一日を取りまくスマトラ農園の多様な音が顕著に描かれる。朝から夜まで、主人公の周囲から聞こえてくる音によって、時間の切り替えが判然と描き出される。スマトラ農園におけるサウンドスケープを例示すると、小鳥の鳴き声、苦力の子供たちの声、太鼓の音といったスマトラの朝の音風景が挙げられる。作品内のサウンドスケープの構成は、朝、夕方と夜という時間の推移とともに変化していく。各サウンドスケープは主人公の心情に影響を与え、音と時間の変化に伴い、主人公の心理の状態もまた変わって行く。音に対する主人公の反応や音を呈示する表現によって、当時のスマトラ滞在に対する作家の心理的な側面を考えるための手がかりが得られるであろう。

「挿話」におけるスマトラのサウンドスケープを考察する前に、主人公の「聴く過程」を理解するために、まずは作品の舞台について触れておく。作品の舞台は、サンパリ (Sampari) 農園であり、その描写から作品世界が開示されていく。農園の真ん中には旧支配人が所有していた住宅、ルマ・ブツサール (大きな家) がある。現在のところその家は主人公が幾人かの現地の使用人とともに住んでいる。「家の周囲は生垣にかこわれた二千坪ほどの青々とした芝生で、カンナの花や仏柔花が陽に抵抗するように強い色彩で大きく咲いている」という描写から、物語の冒頭で早くもこの邸宅の人々が孤絶した様子が窺え

る。家の一階にはコックや下男などが住んでおり、主人公は一人で二階の部屋で暮らしている。周囲を眺めると膨大な煙草園ばかりで、極度の静けさの中で、いかなる音が発せられても主人公の耳にそれが届く舞台設定となっている。

右記で記述された舞台の情報から、佐多稲子は北スマトラ滞在中に二度にわたって農園で暮らしていたことが分かる。「挿話」の舞台は北スマトラ州デリ・セルダン郡サンパリ村にあるサンパリ農園である。作中の表現によれば、この二千ほどの煙草農園で佐多は二月ほど滞在していた。一方で、「虚偽」、「ある夜の客」、「年賀状」といった作品は北スマトラ州の首都であるメダン市から車で二時間の距離にあるジャンタル町のサイザル農園が舞台である。「虚偽」の記述によると、佐多はこの農園に四、五日間滞在したという^⑩。スマトラ滞在中に、佐多が最も長い時間を過ごした農園は、サンパリ農園であったことが明らかになる。

「挿話」におけるサウンドスケープの考察に移ろう。主人公の朝の音風景は、天井に巣を作った雀たちが「やかましく轉って飛び交う」音から開示されている。「これだけはどこにもいる雀」とあるように、主人公にとって内地と変わらない風景を前に安心感が呼び起こされる。しかし、同時に裏庭では猿たちが木の枝を移動しながら「ざわざわと騒がしい」音を立てていることにも気づいている。両方も「騒がしい」朝の八時の描写であるが、主人公は「熱帯国の猿たち」より「どこにもいる」雀の方に親近感を感じている。

つづいて、朝の音風景は次のように描写されている。

もつとも早い時間には、太鼓の音で出て来た苦力たちが、鍬をかついでこの家の前を一例に並んで仕事に通ってゆくのも見られる。太鼓の音は、丁度お寺のお勤めの太鼓のように、だんだん早くなる打ち方で、一日の間に太鼓の音は何度も聞かれた。その度に私は内地に通うなつかしい音を感じ、そしてその音で行動をする苦力たちの、食事や昼休みのときを知るのだった。

暫くすると、大分離れた所にある部落の小さなスコラ（学校）から、苦力たちの子供の歌声が聞こえてくる。もう紀元節はとうに過ぎているのに、まだ、雲にそびゆる高千穂の、と、歌っていて、椰子の木のむこうから歌詞もはっきり伝わってくる。四角の反って尖った牛車の屋根が、生垣の外をことごと働いてゆく。耳の垂れた白い瘤牛の鷹揚な面ざしは、汚れた更紗の布をジャバ風に平たく頭に巻いた苦力の黒い頭よりも美しい。一時から三時まで太鼓の音で昼休みになると、ただ花たちがいよいよ鮮明に色をきそうばかり、あたりはしーんとしてしまふ。

ここで記されている太鼓はイスラム教の礼拝時間を知らせるためのものである。牛皮で巻いた木製の太鼓は常にモスクに置かれており、現地語ではベドゥグ（Bedug）と呼ばれる。

イスラム教徒は一日五回礼拝をするため、礼拝時間ごとに太鼓の音と礼拝時間を知らせる歌がモスクから流される。「もっとも早い時間」とは朝の礼拝時間を指す。インドネシアでは、宗教においてイスラム教が最も広く信仰されており、イスラム教の習慣がインドネシア全体に自然に受け入れられている。礼拝時間を示す太鼓の音はスマトラ農園の苦力の通勤時間と休憩時間を知らせるために使用される。太鼓の音が流される時間と頻度は主人公にとって馴染みのない南の風物という可能性があるが、太鼓の打ち方が日本の太鼓と似ているところがあるため、主人公に「なつかしい音」だと感じさせ、郷愁を呼び起こさせる。

太鼓の音に加えて、異国でも歌われている日本の歌が主人公のスマトラに対する親近感を醸成している。歌のなかで日本の初春の風景が「椰子の木」を暗示する熱帯の景色に転移しているように感受されている。ここで注目すべきことは、苦力の子供たちが学校で日本の歌を唄うことができるという描写が、日本語の普及の根拠として提示されているという点である。日本統治期以前のインドネシアにおける教育はオランダ植民地で制限されており、貴族や富裕な家庭の子供たちのみが教育を受けられた。しかし、以上の引用にはスマトラの社会階層^⑩の最下層に置かれた苦力の子供たちも学校へ行けることが、日本占領下で可能になったと解釈できる。やはり戦時中に執筆された戦争宣伝を遂行する作品であるため、「挿話」にも南方における日本占領の賞賛が挿入されている。

スマトラ農園における朝の音風景には、どこにもいる雀の鳴き声、太鼓の音、日本の歌

を唄っている子供たちの声など主人公にとって馴染み深い音で満たされている。そのため、今この異国において一人で生活しているとしても、主人公は内地を思い出させる音を聞くことで、完全に異国に住むという感覚からは距離がある。しかし、午後三時頃の太鼓の音が打たれて以後、生徒たちが学校から家に帰り、苦力たちも職場に戻り、家の周りは静謐に満たされることになる。この三時頃の太鼓の音は、朝のサウンドスケープから場面を切り替える機能を果たしている。次の場面に入る前に、太鼓の音の後に「ただ花たちがいよいよ鮮明に色をきそうばかり、あたりはしーんとしてしまふ」と一時的に周囲の音が休止する様子が描かれているのである。

夕方のサウンドスケープに注目しよう。最後の太鼓の音を聞いた後、主人公は家の外の風景から家の中の音へと集中の対象を移す。最初に耳に入った音は熊蜂が飛び回る音である。「まっ黒な熊蜂のもの憂くうなりながら部屋の中を飛びまわるのがうっとうしい」と記述され、ここには音が表現されていないにもかかわらず、熊蜂から発生した音が想像できるかのようなのである。このような手法は「音と文学」の文脈で「仮想の音風景」(Virtual Soundscape)と呼ばれる。「まっ黒な熊蜂」が放った「うっとうしい」音は、視覚的に捉えられるばかりでなく、熊蜂の動きの結果として生じる音が主人公の神経が高ぶらせているかのように、聴覚的に主人公、そして読者の耳に届くのである。

このように音を想像させる描き方は作中で度々現れている。たとえば、「栗鼠の太い尾っ

ぼをからませながら飛んだりすべったりしている」、「大蜥蜴が赤い舌をはいて部屋のうちをうかがったこともある」、「丸い頭、ちろちろと働く赤い細かい舌、気味の悪い戦慄だけがいつまでも私の感覚に残る」などの表現である。栗鼠と大蜥蜴の描写には何も音を示す表現が見当たらないが、熊蜂と同様に、それぞれの動物の行動の結果から発せられた音が聴覚的に暗示されている。特に、前段落では「あたりはしーんとしてしまう」という記述があり、舞台の静かさが強調されているため、その次の動物たちの行動が自動的に聴覚的に受容されるのである。

つづく場面では、庭の入口にある扇椰子の葉が落ちて「おもえぬ厚い音を立てて」、「は」と人の胸にもものものしい瞬の感じを残して地上に横たわる」と記されている。ここには音の描写が重ねられている。音の強度は、熊蜂や栗鼠の動きの「弱音」から「は」と人の胸にもものものしい「印象を与えるほどの「厚い音」へと展開していく。同時に、下の部屋からは「コックやボーイたちの何かわからぬ話声が聞こえる」。つづいて「音もなく陽の光が疲れてくると、守宮がかん高く鳴き出し、南国の夕べの憂愁をかき起こす」。日が沈みかけて周囲が暗くなる時期は「音もなく」、邸宅全体が暗く静けさに包まれているのは対照的に、「守宮がかん高く鳴き出す。守宮の音はその後も登場しており、「天井や壁で守宮の活動は忙しくなり、ときどきぺたっと無気味な音を立てて落ちるのがある」という。暗い静寂の中で、無気味な守宮が高音を発するという描写によって、憂愁な南国の夕べが

強調されている。

朝のサウンドスケープと比較すると、夕方のサウンドスケープには主人公にとって耳に馴染まない音ばかりである。朝の風景のなかでは子供たちが日本の歌を歌っているのとは対照的に、「コックやボーイたちの何かわからぬ話声」が聞こえてくる。言葉とリズムに馴染んでいる「紀元節」の歌は言葉の意味が解らないコックやボーイたちの声に転じ、主人公のなかに言語による疎外感が湧いてくる。さらに、夕方に現れた音に対しする主人公の感覚は馴染み深いものではないためより一層の注意を引きつることで、それらの音への反応として感情表現が数多く記述されている。「うっとうしい」、「はっと人の胸にもものしい瞬の感じを残して」「憂愁」という言葉は、スマトラ農園の夕方が主人公の疎外感や孤独感を喚起する音風景である。

守宮は夜まで鳴きつづけているが、蚊や地虫などのような虫の音が「夜の静寂をふかめる」。ここで注意すべきことは、主人公が注意深く聞いている音は、小動物や小さな虫から発せられているという点である。これには複数の理由が考えられる。第一に、周囲が極めて静かな状態であるため小動物の声までも聞こえてくるという理由が考えられる。第二の理由として、自分にとって馴染みがない異国の音ばかりに取り囲まれている主人公の心に不安や恐怖が去来しているがゆえに、小さな音でも脅迫的に聞こえてきってしまうというところが挙げられる。以下に引用するように、日が暮れていくにつれて、主人公は心細くなっ

ていくとともに異様な音を聴いてしまい、想像力が繊細になってくるのである。

夜半にふと目覚めると、巨人の咳か、怪鳥の叫びかと思う恐ろしい声が裏のあたりに聞こえている。長い間何の声とも分らぬまま、南国の夜の怪しい気配に身をゆだねて聞いている。

深夜の暗闇が訪れるにつれて、主人公の耳に届いた音は空想と混じり合ったものである。かのように、主人公の恐怖心を高めている。その恐怖のきっかけは源を捕捉することができない異国の音への違和感と疑惑である。主人公にとって馴染みのない音は、危険の到来を感じさせ、悪い状態へと駆り立てるような音として受け止められている。このように、スマトラ農園の夜のサウンドスケープは、無気味な小動物や「巨人の咳か、怪鳥の叫びか」という不思議かつ底知れぬ恐ろしい音によって形象化されている。

以上に見てきたように、作品の中に登場する音が近代的な音ではないという点は重要である。作中で近代文明と結びつく農園の工場や車が描出されているとはいえ、これらの描写からは音が生じず視覚的に描かれている。一方、動物の音を数多く描き出すことで、スマトラが野性的で危険な場所として位置づけられることになる。文明を表現する唯一の音は、学校で子供たちが日本の歌を唄う声である。これは日本占領下で野蛮なスマトラがよ

うやく文明化されているということを宣伝する戦略が伏在しているものと考えられる。

第二節 不敵さの喪失

佐多稲子の小説「虚偽」において、主人公の年枝は、南方へ渡航する際に現地へと向かっている自分の「不敵さ」について考えている。中国への戦地慰問の経験があるために、年枝は兵隊とともに戦場へ赴く先にありうる死を恐れていないとされている。確かに、プロレタリア作家である佐多は革命運動に奮闘した時期に警察に追尾されたり留置場に送られたりした経験があり、「年枝は恐怖から逡巡したことがなかった」という彼女の性格は、作家の経験を色濃く反映している。さらに、中国の戦場で得た経験も年枝の不敵さを増幅する。「虚偽」の中では、「たしかに彼女の今日の凶太さは、この船に乗るまでに何度か飛行機に乗り、鉄砲の音のする塹壕にも寝てきたという経験が、彼女の経験の上に金網を張ってきたものにちがいがなかった」とあるように、南方へと赴く前に生死の境に置かれた中国の戦場の経験が彼女の神経の「凶太さ」を形成している。

確かに自分の「凶太さ」を理解するには年枝が他の理由を加えて、「むしろ彼女は、兵隊とともに戦場へゆく自分に意識的な虚偽を表面におくことをもって、その凶太さを理解した」と先が述べられた理由を改正するように書き加える。しかし、ここで注目したいのは、

南方への途次と現地に到着した後の年枝の心理状態の変容である。「虚偽」においては「年枝の経験する微妙な心理は、所詮、旅の間中続くものだった」という記述がある。つづいて「メダンの近郷は、所謂、宝庫と口々に宣伝するゴム林や煙草園やサイザル畑で埋まっていた」と語られているように、年枝の心理は恐らくメダン滞在中に変容したと考えられる。ここから「挿話」を通して、メダンでの主人公の経験に焦点化し、その心理状況の変化を検討してみたい。

「挿話」を考察する際に「虚偽」の主人公について言及するのは、「挿話」と「虚偽」には幾つかの共通点があるからである。双方ともに北部スマトラの農園が舞台となった作品であるだけでなく、作家が主人公と限りなく重ね合わされたかたちで、作家が自らのスマトラ経験について語っているという共通点もある。それゆえ、「挿話」の主人公の心理状況を探るために、「虚偽」の主人公を参考にすることもできる。作者・語り手・主人公の混在性について、小林裕子は「境界があいまいになるという文体的特色は佐多稲子の作品にしばしばみられるものである」と指摘している^⑧。戦後に発表した「虚偽」においても、作家と主人公を同化するという側面は「挿話」に通底している。しかし、「虚偽」は戦後に書かれた作品であるため、南方が回想の形で登場し、作家の羞恥心や戦争協力への反省などの要素が混入している。

「虚偽」で描かれる主人公の不敵さは、暫くスマトラで滞在している「挿話」の主人公

のそれと対照的だと考えられる。前節でスマトラ農園の一日の音風景を考察したが、そこから主人公の情緒と心理状態の展開が窺える。朝には明るく親近感がある音に満ちていた音風景も辺りが暗くなるにつれて「憂愁」、「怪しい」、不安や恐怖という感情を招く音で満たされていくことになる。その結果、未知の異国の音に対して主人公は空想と緬い交ぜになつた不安を高ぶらせていく。

たとえば、日が暮れる直前に外の巨木には帰巢する蜂の「編隊飛行の爆音かともがうその音に、いつとき家の周囲はとり巻かれてしまう」と描写されている。蜂の様子は具体的に描かれていないものの、「ただその旺盛な羽根の音だけがいつときあたりに響きわたるのであった」とあるように、その音の強度が想像される。蜂の羽音は「編隊飛行の爆音」と表現され、戦場へ行った経験あるいは戦争への想像を背景としてこの表現が生まれたと考えられる。主人公にとって蜂の音は、見えない敵が発する恐ろしい音に追いかけられるかのような不安を感じさせるものである。「編隊飛行の爆音」という表現は、蜂の羽音を誇張するかのよう周囲の静寂と主人公の恐怖とを強調している。

未知の音の到来によつて不安に苛まれるという経験は、主人公がスマトラ農園の家に滞在して四、五日目の夜に前庭から「けたたましい男の叫び声」を聴いたときにも起こる。以下に引用する箇所は、そのときの主人公の異常な反応を表現している。

まだこの家に私が移って来て、四、五日目の夜のことだった。私は網戸のベッドに横になって、本を読んでいた。啄木鳥の声のみ窓近くの梢に聞こえていた。突然、前庭の方に向けたたましい男の叫び声が起こり、続けさまに幾人かの男の声がそれにつづいて、ただならぬ気配である。叫んでいる言葉の意味のわからぬのが、一層何事かと怪しまれた。私はすぐ起きて網戸を出て寝巻をズボンに取りかえた。その時、下から駆け上がって来てエマが扉を叩いて、

「ニヨニヤ」

扉を開けて、「なに？」と、一声をただすと、エマは大きな眼をむいて、唇を突き出しながら、両腕をかき合わせて慄えてみせる。私は、もしものときの用意にと、渡されている女用の拳銃を、さすがにエマに見られるのははばかれて、隠して持ち出す。皮の袋に入ったまま、拳銃はどしりと重い。その間に男たちの声は幾らか鋭い調子をおとし、高い話し声になっている。洋風の長い寝巻をきたエマと連れて立って露台へ出てみると、懐中電灯の光が二本三本と、何かを探している。夜露に露台の石が冷えて、星が美しい。

ここには主人公が感じた恐怖が頂点に達するまでの一連の音風景が描写されている。啄木鳥の音から夜の音風景の描写が展開する。しかし、突如として「けたたましい男の叫び

声が起こり、続けさまに幾人かの男の声がそれにつづいて、「何事が起こったのか詳らかにならず場面は異様な状態となる。文中には「けたたましい叫び音」という表現によって、音の強度が高いレベルに達していることが強調されている。それに加えて、「幾人かの男」が叫んでいる言葉は意味が不鮮明であり、女中のエマが伝えた情報も身ぶりで表現されているため、主人公は自分が現在直面している状況について一切把握できない。強度を持った音が日常に突如として介入してきたことと異国の言葉が理解できないことが主人公の不安や恐怖を誘発している。果たして、自衛のために主人公は拳銃を持ち出すほど暴力で対応しようとする差し迫った状態に置かれるのである。

スマトラ農園を視察するという使命について、佐多自身は「ある夜の客」^④で「ゴム園の多いこの島で、サイザル、ラミー、マニラ麻などの栽培をしてゐるその大きな農園を、スマトラ産業のひとつとしてみておけ、とすすめられて出かけたにすぎません」と語っているように、農園に関する知識を事前に収集せず、派遣された目的さえ知らなかったと語っている。作家自身と限りなく重ね合わされた「挿話」の主人公もまた、現地の知識が不足しており、その不足した部分を想像力で補うという戦略を用いている。

拳銃を持ち出すことについて、長谷川啓は「日本人が没収した大きな一軒家に一人住み、護身用に拳銃まで持たされているから、南方体験がいかに荒々しいものであったかがうかがえる」と述べている^⑤。長谷川の指摘をもとに、日本占領下のスマトラ農園の状況につ

いて確認したい。

オランダ植民地下の北部スマトラは、ゴム、煙草、椰子、サイザルなどを栽培するための広大な農園が経営されていた。しかし、日本軍政が敷かれた以降、多くの農園は食料作物の開拓に転換した。このことについて早稲田大学大隈記念社会科学研究所が刊行された『インドネシアにおける日本軍政の研究』のなかで、以下のように述べている。

東部スマトラ、特にメダン周辺のデリー煙草耕作地は一九四〇年当時洋戦争と共にこれらの輸出は全く杜絶し、生産もそのほとんどを停止せざるを得ない情勢となった。しかしながら、その生産の全面的停止はすぐれた生産技術の温存の為に得策でないとの見地から生産面積の減少の措置がとられ、五、五、四八八ヘクタールに煙草栽培面積を減少し、二八、九三三ヘクタールを八年輪作の各種新規栽培用地として温存し、残余の一五七、七一〇ヘクタールの広大な栽培地を食料作物栽培地に転換した^⑧。

戦争によって日本の輸出入に制限が課せられていたため、日本占領下の南方では現地の軍政が「自給自足」の方針を採用した。具体的には、各地方の軍政は米やとうもろこしのような主食用の農産物の生産量を増加しつつ、戦争を支えないと思われる農業を停止し食料作物の開拓を多様化する政策を打ち出した。一九四二年の初期にデリー、セルダンにお

ける四万二千ヘクタールに及ぶ煙草園では、米とその他の食料作物の栽培のために暫定的に現地人と農園労働者が割り当てられた。日本占領下はスマトラにある農園が続々と閉鎖されることになったが、農園労働者との闘争までには至らなかった。土地の分配制度によって各家庭は食料の自給自足を達成することができたからである。この政策は、現地住民とエステート住民の間に厳然として存在した社会的障壁を緩和し、農園支配人の覇権を解消することによって、日本軍政側に利益をもたらすことになった^⑩。

言い換えれば、日本占領下のスマトラはオランダ植民地期と比較すれば十分に落ち着いた状況である。主人公の家に訪問した矢島もスマトラが安全であることを強調し、主人公が拳銃を持ち出した話を聞いた途端に笑い、「たいしたことはございませんよ」と述べる。矢島はスマトラでは自衛のために拳銃など必要がないと思っているのである。南方に派遣された女性作家たちの間にも、管見のかぎりでは拳銃を自衛手段として常備していたことを示す記録はない。佐多稲子だけが拳銃を保持して南方各地を旅しているのである。前述したように、プロレタリア作家という経歴を背景として、猛烈な経験を持ったため、常に周囲を警戒しなければならなかった過去が「挿話」の主人公の行動に色濃く反映していると考えられる。

南方に赴く前に主人公が持ち合わせていた不敵さは、スマトラ農園を取りまく現実に対峙したことで徐々に失われていった。中国の戦場で「鉄砲の音のする塹壕にも寝てきた」

経験と、戦争がないスマトラで「男のけたたましい音で拳銃を出す」という主人公の行動と比較したとき、作家の心理情態の変化が明らかになる。この心理的变化は、現地で聞こえてくる音が要因である。

一般的に、意思疎通を目的とする場でその障害になる音、もしくはは目的を達成するのに不必要な音は騒音とされる。夕方から夜にかけて主人公が聞いた音は、危険や憂い、孤独感を催させるばかりの騒音である。ここで騒音は、人間の感情を突き動かす誘因として機能している。

論者は旧支配人の家に住んでいる「仮の住まいをする旅人」である主人公の「不安」がその一つの理由と考えられる。家は持主が去っていった状態のままであるため、先住者の気配が濃密に残っている。主人公にとっては「苦力たちの向こうみずや、深夜の無気味さよりも、部屋々々に残る先の主の体臭の方が気にかかる」と記されており、その結果として「異国に住む人たちの感覚は却って旅人の私よりは用心深くて、始めの三日四日は代わる々に誰か止まって呉れた」とある。主人公は支配人の位置に立っているにもかかわらず、付近には日本人がおらず、農園の自然やそこで交わされる言葉についての知識が不足しているため、自分の孤独と無力とを感じている。さらに、旧支配人の存在は、この家にいまだに影を落としているという事実が主人公の不安を倍加させている。

この部分は林芙美子のスマトラ経験に基づいた小説「荒野の虹」[®]と類似している。「荒

野の虹」には、現地の人が「今収容所にいるオランダ人がまた帰ってくる」と言ったことを受けて、スマトラの贅沢な暮らしを味わった慰問団の女性が「まるでお金持ちのうちへ留守番に来てゐるやうだつて」と発言する。佐多稲子自身が「この戦争の本質を知っていた」^⑩という意識をもつて戦争協力に加担したこととその利益も得るのである。しかし、南方に到着して現地を實見した後で、佐多の意識は変化していく。「いわば戦争そのものがぬすみでしよう」という「虚偽」における年枝の指摘は、林芙美子が表現した「金持ちの人の留守の家に来た泥棒」と通底している。戦争協力から得た利益に対して、主人公は実際に「恥辱」が痛感した。さらに、旧支配人の存在の痕跡が残存しているため、主人公が彼らはいつかまたこの場に戻ってくるかもしれないという不安も浮かび上がってくる。主人公は農園の支配人の立場であり、邸宅の所有者になったとはいえ、この状況が永續するというわけではない。いつか主人公が旧支配人にその立場を奪還されるという懸念を抱くことで、以前は抱いていた不敵さを喪失した。それは、この場合、作家の心理状態の転換をも意味しているのである。

第三節 聴く過程における意識の懸隔

「音と文学」という視座から文学の音風景を考えようとするとき、音そのものに留まら

ず、音が耳に届くまでの過程もまた重要な論点になる。アンナ・スネーツによれば、「音と文学」は文化理論、評論、文学テクストにおける音が発生するエネルギーに注目する。しかし、文学の可能性は、音の保管・構成・受容の力に認められる。すなわち文学研究における音風景を考察する際に、聴取した結果としての音が齎す意味やその象徴に限らず、音に対して聴き取るという態度そのものもまた注目すべきである^⑩。

音を聴くメカニズムについて、マリー・シェーファーは次のように述べている。

耳が自らを保護する唯一の方法は、好ましい音に集中するために好ましくない音をフィルターにかけて取り除いてしまうという極めて精巧な心理的メカニズムによるものである。目は外側に出しているが、耳は内側に引っ込んでいる。耳は情報をすい込む^⑪。

以上の引用で注目したいことは、情報を音として受容する際のフィルターのメカニズムである。ここでシェーファーが指摘しているメカニズムは、矢島の話を「聴く」主人公の行動を考察する際に有益である。主人公は矢島から聴いた話が別の事で聴こえている。主人公の聴く過程におけるフィルターのメカニズムによって「聴いた事実」と「聴きたい話」の間に懸隔が生じているのである。

考察に入る前に矢島の人物像について振り返っておきたい。主人公が拳銃を持ち出すほどの騒動が起きたあくる朝、三〇年前に南方に渡って来た矢島という男性が主人公の家を訪れた。矢島は福島出身であり、一二歳頃から既に南方に渡ったという。彼はもともとマレーで商売をしていたが、戦争の時に、軍の通訳を務めることになった。その後、マレーからスマトラへと移動し、今はゴム組合の仕事に従事している。主人公がパダンへ旅行したときに、矢島をマレー語の通訳として採用したことが二人の出会いの契機となった。

矢島は一六歳のインドネシアの「純処女」と結婚しており、現在、妻が妊娠していると、情報を主人公の耳に届いた。主人公は矢島に祝いの言葉を送ったが、矢島が重要なことを告白するかのように、生まれてくる子供の皮膚の色について打ち明けた。すなわち、「もうすこし色でも白ければ、内地へ連れて帰ってもいいんでございますけど、なにしろ真っ黒なんですから、人様の前へも出せないのでございますよ。ひと目で分かりますからね。この、色の黒いというのは、どうにもなりません」と矢島は自身の子供の皮膚の色について心配していることを主人公に語るのである。

矢島の言葉に対して、主人公の反応は次のように述べられている。

真っ黒だ、と矢島さんが言うとき、それは人間の皮膚の色を指しているのだとは思えない突っ放した響きで聞こえるのだが、この地で今こそ晴々と働ける日本人として、自

分の生活のすべてを何はばかりなく人前にも出したい矢島さんの、それは渴するような切ない愛憐の情のもつれかとも聞こえたのであった。

「挿話」における「皮膚の色」の位置づけについては既に、先行研究で論じられるところである。長谷川啓は「大東亜共栄圏のおかげで胸をはって生きられるようになった日本の男を描いており、インドネシアの女性と結婚しながらも妻の皮膚の黒さを気にかけて蔑視し、人前にも出せないと嘆く側面をえぐり出している」と矢島の人物形象について指摘している。しかし、ここには人種と皮膚の色による識別について触れられておらず、「この戦争による日本の成功者についてはなかなか好意的な書き方である^②」と作家の文体の特徴に論点の比重を移している。尹小娟は同様の指摘をしており、「皮膚の色を気にかけてながらも受け入れようとする日本人の姿を描く佐多の捉え方は、いかにも安易だといえる^③」と述べるように、矢島の描き方を考察した。しかし、尹は「皮膚の色を気にかける」という矢島の描き方自体に「無意識の差別、自覚されざる日本人としての優越意識が混じっているのである」とも指摘している。ここには「インドネシア人に対する人種の違いを超えた「切ない愛憐の情」を寄せる日本人のイメージを描こうとしている作者の姿勢が窺える」と結論づけられている。このように、尹は「挿話」における人種差別を明確に指摘しているが、作家のモチーフがまだ不明だと思われる。

ジョン・E・ダワーは『容赦なき戦争』において日本人が抱く優越感の契機を詳しく検討している。ダワーによれば、このように本質化された徳目は「神々しく継承されてきた日本の皇統のもとで、清浄さを反映していた」。それゆえ、日本人が自分たちを「指導民族である」と意識し、自称していたのである。つまり、日本人の優越感は身体的・知的な側面にあるのではなく、神話の正当化、世界の未来像という自己認識にあるのである。「戦時中、日本の公式文書は、白色人種と有色人種との戦争と称することを避けるべきである」という警告を終始一貫して繰り返した^②と述べているように、大東亜戦争を人種の身体的優越性に基づいた戦争ではないという見方が強調している。

「挿話」の舞台となった北部スマトラは、そもそもさまざまな民族や宗教、社会階層から構築された社会であるため、人種差別の問題が歴史的に重要な位置を占めてきた。もつとも顕著であるのは、白色の土地所有者が有色な苦力に対して非人道的に使役していたということである^③。戦時中、オランダの支配から日本占領へと移りかわっても、人種問題が消え去ったわけではない。ダワーによれば、「戦時中「血の純潔」は、日本人のみならず占領地域の土着民に関しても多くの日本の役人の関心事であった。たとえばインドネシアで日本人は、「混血児」が特に取り扱にくいグループであると知り、ヨーロッパ人の血の割合に応じて異なる欧亜混血の八つのカテゴリーを作るということさえした」とある。「つまり異民族との結婚は、大和民族の「国民精神」を台無しにするということだった」^④ので

ある。

このように、北部スマトラ社会における人種差別を背景として、子供の「皮膚の色」を心配する矢島の不安が喚起されているのである。しかし、人種差別に起因する矢島の不安は重要な問題であるものの、作品の中では人種問題よりも南方で「晴々と働ける日本人」という矢島の人物形象の方が強調されている。

作品の前半では異国の音が多く取り上げられる一方、後半は「妻子のまっ黒な皮膚」についての矢島の対話がほとんどを占めており、いずれにしても主人公は聴く立場に立たされる。しかし、主人公は「突っ放した響き」だと感じられた矢島の皮膚の色の語りを別の「音」で受けとめる。主人公が現地における社会問題の事実を耳にしたが、聴く過程は必ずしも客観的であるわけではなく、フィルターを通して自分なりの好意的な「音」になるように変換していく。そこには確かに尹小娟が指摘したように「直接ではないものの、日本人の人種上の優越性を描く方法を採ったのである」という指摘は正鵠を得ている。しかし、「ある夜の客」^⑩を参考にすれば、以前の日本人はオランダ人によって「横目に見られた」とあるように人種差別を受けていたため、現在支配者側にたつ日本人は、差別をしていることになる。こうした主人公の「聴く」態度は日本人の優越性を象徴しつつ、以前の日本人が経験した人種差別が他の民族への差別を正当化する役割を果たしていると考えられる。

結

南方の経験に基づいた作品の中で、「挿話」は「耳」のために構想されたような作品である。佐多稲子は「挿話」を通して、南方の風物を聴覚的に捉えている。確かに、「戦地を見たい」^⑧と言う作家の期待が他作品には窺えるのだが、「挿話」ではこれに「聴く」という要素が追加されることになった。しかし、この作品について、佐多稲子全集のあとがきでは記述が見当たらないため、恐らくは軍による指令に沿うように南方の状況を日本の読者に伝えていたと考えられる。作家は「挿話」を通して「他者への視覚」と「個人への聴覚」を主題化することで視聴覚的小説という魅力を持つ作品である。

これまで展開してきた「挿話」の考察は次のようにまとめられる。第一節では、本作品がスマトラ農園のサウンドスケープをとおして時間の経過とそれによって変遷する主人公の心情の変化が提示されている点を指摘した。朝は耳に馴染んでいる音に包まれることで、主人公の心理は平静であるが、日が沈むにつれて、内地にはない異国の音や知らない言語の音に包まれることで、主人公は憂愁を感じ、疎外感や孤独感に苛まれている。深夜になると、より馴染みのない音ばかりが聴こえるため、主人公の不安と恐怖心が掻き立てられる。時間の変化に伴い、聴こえる音が馴染みのない音に浸潤された音風景へと転じ、主人

公の不安が高まってくるのである。

第二節では、前節の音風景の分析に基づき主人公の心理状態の転換に着目した。「挿話」は作家と主人公が重ねられており、作家の経験を反映することによって主人公の心理の手がかりが得られる。南方へと出発する前に、プロレタリア作家という背景と中国への戦地慰問の経験とによって作家は死に対して恐れないう不敵さを持っていた。しかし、南方の現実に直面したのち、現地についての知識の不足や周囲に日本人がいないという孤独感、さらに異国の音に苛まれる毎日が主人公の心に不安を募らせる。さらに、現在の家に先住者気配が残っているため、主人公が所有者の地位を奪還されるということも不安の要因となっている。主人公は、このような不安を抱くことによって、中国の戦場で鍛えられていたはずの不敵さが、逆説的にも戦争がないはずのスマトラで喪失し、臆病な性格を持つ人物へと転換してきた。その絶頂として、米泥棒を追いかける下男の声を聴いた後、主人公は自衛のために拳銃を持ち出したのである。つまり、主人公は支配者の立場にあるにもかかわらず、旧支配者の陰に追尾される不安や農園に関する自らの親しみの希薄さによって、心理状態が変わっていくのである。

最後に、第三節では、主人公と矢島の会話に焦点化して、両者の間で駆動している音を聴くときのフィルターのメカニズムについて考察した。主人公は皮膚の色が「まっ黒」の子をもつ矢島妻子の話聴いた過程で、「聴いた事実」と「聴こえた話」という二つの「音」

の懸隔が生じている。「聴く」過程でフィルターが介在する理由は、日本人としての優越性が浮き彫りとなることで、人種差別を経験した日本人の差別を正当化するためだと考えられる。主人公は矢島が告白した人種問題に関する現地の事実を無視しようとして、日本占領地における日本人の成功者の姿勢に注目している。同じ舞台である「髪の嘆き」にもメダン市の人種問題が描かれているが、「挿話」にも日本人の優越性という主題が取り上げられている。

先行研究において「挿話」は「これまでの悲哀感にそそられるような傾向とは違って、戦争状況の中で不敵に居直って対象を見据えているような筆致である」^④と評価されている。しかし「音」と「文学」の視座からテキストを分析すると、スマトラ農園で日本人一人生活している主人公は音風景によって象徴される現地の風物に対して疎外感、孤独感、不安を感じている。一方で、音によるスマトラの描き方はスマトラを野性的な場所として描写することによって、作家はオリエンタリズムに刺し貫かれた視線でスマトラを眺めている。「挿話」は個人としてのスマトラ農園の滞在中に感じ経験したことを伝えつつ、支配者としての優越と不安という二面性をも浮き彫りにする作品である。

注

④ 望月雅彦『林芙美子とボルネオ島く南方従軍と『浮雲』をめぐる』(ハヤシの実ブツ

- クス 二〇〇八年七月、四八頁)
- ② 神谷忠孝、木村一信『南方徴用作家…戦争と文学』(世界思想 一九九六年三月、八頁)
- ③ 北川秋雄「佐多稲子―南方派遣と『若き妻たち』のこと」『南方徴用作家』(世界思想社 一九九六年三月、二七〇頁)
- ④ 伊原美好「年譜―佐多稲子の戦時下の見直しとして」『日本文学論叢 第三二号』(法制 大学大学院日本文学専攻研究誌 二〇〇三年三月、一八頁)
- ⑤ 鳥木圭太「女性作家の見た(南方)―林芙美子と佐多稲子のスマトラ」『論究日本文学』(立命館大学日本文学会 二〇一七年五月、五頁)
- ⑥ 尹小娟「佐多稲子の戦中と戦後―南方をめぐる一考察」『跨境…日本語文学研究』(高麗 大学校日本研究センター 二〇一八年七月、一五一―一五二頁)
- ⑦ 長谷川啓「太平洋戦争期の佐多稲子・②」『佐多稲子論』(オリジン出版センター 一九九二年七月、一九六頁)
- ⑧ Anna Snaith. 2020. *Sound and Literature*. University of Cambridge press.
- ⑨ 日本サウンドスケープ協会によると、日本語ではサウンドスケープが「音の風景」と役され、専門的には個人、或いは社会によってどのようなように知覚され理解されるかに強調点に置かれる音環境。 <http://www.soundscape-j.org/soundscape.html>
- ⑩ R.マリー・シェーファー『世界の調律 サウンドスケープとはなにか』(鳥越けい子、他訳)(平凡社 二〇〇六年五月、二六頁)
- ⑪ 佐多稲子「虚偽」『佐多稲子全集 (私の東京地図) 第四卷』(講談社 一九七八年三月、三三五頁)
- ⑫ そもそも北部スマトラは多様な社会であり、遠い昔から社会階級が設立されていた。その最上に置かれたのはプランター(栽培者)の西洋人、外国人の事業者、続いてマレ族とバタック族の貴族、政府に働く人、オランダ教育を受ける人など、最下には農園の苦力である。
- ⑬ 小林裕子「私の東京地図―多声的「私」」『佐多稲子―体験と時間』(翰林書房 一九九七年五月、一〇九頁)
- ⑭ 佐多稲子「ある夜の客」『群像 第十三卷 第十号』(講談社、一九五八年九月、九九頁)
- ⑮ 前掲、長谷川啓「太平洋戦争期の佐多稲子・2」『佐多稲子論』(オリジン出版センター

- 一九九二年七月、一九六頁)
- ⑯ 早稲田大学大隈記念社会科学研究所「日本軍のインドネシア占領とその社会の政治、経済、社会的構想への影響」『インドネシアにおける日本軍政の研究』(紀伊國屋書店 一九五九年五月、二七〇頁)
- ⑰ Ann Laura Stoler. 1985. *Plantation Policy under the Japanese* 『Capitalism and Confrontation in Sumatra's Plantation Belt, 1870-1979』 Yale University Press (九五頁～九八頁)
- ⑱ 林芙美子「荒野の虹」『改造文芸』(一九四八年三月号)で初出、引用したものは『林芙美子全集 第七卷』(文泉堂 一九七七年四月刊行)
- ⑲ 佐多稲子「時と人と私のこと(3)―くぐりぬけと狎れ合いと」『佐多稲子全集 第三卷 素足の娘』(講談社 一九七八年二月、四〇三頁)
- ⑳ Anna Snaith. 2020. *Sound and Literature*. University of Cambridge press.
- ㉑ R.マリ―・シェ―フ―『世界の調律』(平凡社 二〇〇六月、四一頁)
- ㉒ 前掲、長谷川啓「太平洋戦争期の佐多稲子・2」『佐多稲子論』(オリジン出版センター 一九九二年七月、一九七頁)
- ㉓ 前掲、尹小娟「佐多稲子の戦中と戦後―南方をめぐる一考察」『跨境.. 日本語文学研究』(高麗大学校日本研究センター 二〇一八年七月、一五一～一五二頁)
- ㉔ ジョーン・W・ダワー『容赦なき戦争.. 太平洋戦争における人種差別』(平凡社 二〇〇一年一月、三五二頁)
- ㉕ Ann Laura Stoler. 2002. *Carnal Knowledge and Imperial Power: Race and the intimate in colonial rule*. London; University of California Press. (二七～二八頁)
- ㉖ 前掲、ジョーン・W・ダワー『容赦なき戦争.. 太平洋戦争における人種差別』(平凡社 二〇〇一年一月、四六〇頁)
- ㉗ ある夜の客」には「日本人は蘭人に横目に見られたですもんね。今にみる、とおもつてゐたですけど、今度は奴らも日本人の底力を見たでせうね」というふう記述される
- ㉘ 前掲、長谷川啓「太平洋戦争期の佐多稲子・2」『佐多稲子論』(オリジン出版センター 一九九二年七月、一七六頁)
- ㉙ 同前、一九七頁)

本博士論文は、戦時中インドネシアに派遣された女性作家の文学作品に注目し、ジェンダーと植民地主義との関係性、インドネシアでの体験における二面性、作家たちのインドネシア観を析出することを目標とした。研究対象としては、一九四二年から一九四四年までインドネシアの諸地域を旅した経験を持つ、林芙美子、小山いと子、佐多稲子の作品を取り上げた。以下では、各部各章の概要をまとめる。

第一部では、林芙美子の作品を中心に、ジャワ、ボルネオ、スマトラというインドネシアの三つの地域に滞在した経験に基づいた戦中から戦後の作品を考察した。出発前の作家のインドネシア観から戦後において現地での記憶を表現する過程を究明した。第二部では林芙美子とともにインドネシアに派遣された小山いと子と佐多稲子の作品の考察することで、各作家のインドネシア行の本質を浮き彫りにするとともに、作家によるインドネシアの表象について論じた。

第一部第一章は林芙美子が戦時中にものした紀行文、とりわけボルネオの視察結果をまとめた新聞記事である「赤道の下」、ジャワ農村での現地住民との共同生活を語る小品「南の田園」、スマトラ横断についての紀行文「スマトラ―西風の島」を考察した。これらの作品の内容やジャンルとしての特徴は、各地域における林の滞在時間の長さや接触した人々、

当地における軍政の方針によって異なるかたちで造形されている。各地域での滞在日数や視察の形態が異なっている。林は現地の特色を精緻に把握することができた。紀行文の内容と作家の南方従軍日記・手帳とを比較すると、紀行文の生成には実際に作家が訪問した地域と軍政の方針とが深く関わっていることが窺える。女性作家の南方行の順路と行動が自由であったとする従来の論の指摘とは異なり、実際のところ彼女たちも軍政の使命を背負いながら、自分なりの手段でその使命を果たしたのである。作家たちの作品には、国家の使命と作家自身の本心の間の絶え間ない交渉を見ることがができる。ボルネオを表象する際に、林は、国家が期待した「未開発の宝庫」としてのボルネオ像とは異なり、作家自らの生と文学とに内蔵されているボルネオ像であった川、とりわけボルネオ川のダイナミックな動きとその不安定さを喚起する川が、林の戦後文学にも嵌入している。また戦中と戦後の連続性・非連続性については、戦時中に書かれたボルネオにおけるオランダ植民地の政策が戦後満州における日本政府の失政に対する批判の論拠として用いられていることに着意し、戦中と戦後の切り替えが暗示されている点を指摘した。

第二章から第四章では、林芙美子が戦後に執筆した作品に注目している。第二章では「古い風新しい風」を取り上げて、ボルネオを軸に戦前から戦後に至るまでのさまざまな転換点を考察した。戦前、ボルネオへと出航する前に、英国作家アグネス・キースの『ボルネオ…風下の国』を受容した林は、西洋人が描かれたボルネオの「のびのび暮らす」、「幾人

の使用人の家で住む」といった想像が浮かび上がる。ボルネオを、西洋眼鏡をとおして眼差すことで、内地の尾道での退屈な毎日とは対蹠的な場として想像・構築されているのである。しかし、作家自身のボルネオ体験は想像とは異なり、再び退屈な日々へと転じた。戦後、主人公は内地に戻り、作品の結末ではボルネオで生まれた子どもが消え去ると同時に日本で無名な子どもが誕生したことは、敗戦後で新しい時代を迎える戦中と戦後の切り替えを示唆するものである。

第三章は同じくボルネオを舞台とした作品「ボルネオダイヤ」を取り上げて、南ボルネオの名産物であるダイヤモンドをボルネオで行われている日本植民地の多面的な現実を凝縮したものになる。作中に登場する一粒のダイヤモンドは、各人物のそれぞれにとって別の意味を呈示する。軍属である真鍋にとって、ダイヤモンドは男性としての不誠実と欲望とが凝縮されている一方、支配者の位置からはボルネオにおける植民地支配への欲望と軍政の失政に対する怒りの象徴である。真鍋の妻にとって、ダイヤモンドは夫婦の愛情を超えた疑似的愛国心の具象であり、球江にとってダイヤモンドは支配された身体と戦時中の不安定な恋愛の象徴である。いずれも各人物はダイヤモンドを通して愛情を表現しようとしたが、戦時中の国の政策・命令によってそれを失敗した。結局、ボルネオのダイヤモンドは現地における日本植民地を表象しつつあり、ダイヤモンドと関わる人物たちのロマンスも国による植民地化されたことを暗示する。

第四章は「荒野の虹」を対象に、スマトラから帰還した復員兵の自己喪失から自己発見までの過程を考察した。まず、復員後に直面した Tabula Rasa、すなわち白紙化ことによつて、主人公は自己喪失に陥った。しかし、スマトラで知り合った女性慰問団のセキ子との邂逅によつて、自分に共感してくれるだけでなく自らのスマトラの記憶を反映できる存在を見出したことで、敗戦後の惨めな日々から立ち上がるかと決意したのであった。白紙化による自己喪失と自己発見の過程は、荒野に現れる多彩な虹として表現されるように、戦後の新しい時代を迎える楽観的なニュアンスが託されている。一方で、スマトラの記憶を反芻することによつて、作家が実感した二面性、すなわち「生と性」そして「占領者としての恥」を見出したのだった。

第二部では、林芙美子と共にインドネシアに派遣された女性作家、小山いと子と佐多稲子の作品を考察した。第一章は小山いと子『椰子真珠』を対象として、スマトラにおける多言語状況における旧帝国語と新帝国語の微妙な言語戦争を作品中から読み取った。スマトラの多様な社会階層内の言語ヒエラルキーを詳述し、直樹の人物造形を通して、作品が既に確立されたスマトラの言語社会に新権力とした日本語が浸出していく過程を描いている点を指摘した。その一方、外地で日本の伝統文化を実践するお常の行動によつて、日本語のヘゲモニーが拡張されていく。作中で戦争の描写は一切描かれないものの、作中では、旧帝国語のオランダ語、被支配側のマレー語（インドネシア語）、新帝国語の日本語の摩擦

という「戦争」が言語状況に出来していることを論じた。

第二章は佐多稲子の「挿話」に焦点を当て、作中に登場する「音」を手がかりにして作家のスマトラ滞在中の心理を考察した。農園におけるサウンドスケープは、「スマトラについて知識の不足」「日本人一人の孤独感」「馴染んでいない音ばかりに巻き込まれる毎日」を主人公に強く意識させるため、彼女の不安を喚起する。さらに、今住んでいる家に旧支配者の陰が色濃く残存し自身を捕縛しているように感じ、南方へ行く前に持ち合わせていた不敵さを喪失した。最後に、現地における人種差別の問題に対して、「聴いた事実」と「聴きたい話の間に懸隔が生じている主人公の「聴く」行動が人種差別を経験した日本人が現地人を差別することを正当している点を明示した。それまでの論述を踏まえた上で、「挿話」を作家の支配者としての優越性と旧支配者への不安という二面性が露呈している点も明らかにした。

これまで本研究が行なってきた戦時中のインドネシアを経験した複数の女性作家の文学的分析を通して、最後に構造的な問題を抽出する。作家のインドネシア観は滞在の地方及び現地人との交流によって形成されたため、インドネシアの捉え方がそれぞれである林芙美子はインドネシアを舞台として借りるように、インドネシアにいた日本人を注目する。小山いと子は多文化共生のインドネシアを捉え、一方佐多稲子はインドネシア滞在中の個人的な感想・知覚を着目する。林と小山は現地人との接触、インドネシアの自然と文化の

光彩に対する認識を持っているためか、インドネシアを「ダイヤモンド」、「真珠」といった宝石の言葉を用いて表現する。その一方で、佐多は現地人との交流があまり述べられず、ほとんどの時間を一人で過ごしたために、インドネシアに対して親近感を見出さない傾向がある。

戦争とジェンダーの視点からみると、これらの女性作家のインドネシアにおける戦争協力への活発的な加担を見出すにも関わらず、彼女らのインドネシア派遣およびそこから生れた作品は「緊迫感なし楽しい旅行」に過ぎないと厳しく評価された。当時の現地の政治や社会文化の状況を視野にいれ、彼女らの赴任地の意義を究明しつつ、不安、恐怖、挫折、うしろめたさ、恥といったようなこれまで指摘されていない作家たちの本心は、この博論における発見の一つである。

彼女らの南方（インドネシア）の経験から題材とした作品は中国従軍の作品と比較される傾向があるため、インドネシア派遣の作品を「戦争の色が薄い」という指摘がよくなされてきた。これは現地情報の不足、さらに南方を一つの地域として見なすという視点で研究が行われてきたことが大きな原因だと考える。ここではミクロ的な視点の重要性を強調したい。南方を一つ大きな地域として見るより、一つの地方に注目してその地方の特色を把握することは、文学と地域研究の関わりから生み出される新たな可能性を探究していく試みの過程で、従来以上に考慮されてしかるべき要目である。

「戦争の色が薄い」という評価に対して、「戦火がない戦場で戦争を描く」この女性作家の特徴と魅力を表面化する。日本占領下のインドネシアは特に、女性作家が滞在中、確かに悲劇的な戦闘はすくなく、日本の戦争宣伝のおかげで当時日本軍はオランダの植民地からの解放者として大歓迎されていた。それゆえに、作中には戦争の描写がほとんどない。しかし、この女性作家は滞在経験に基づいて、自分なりの戦争を描き出した。芙美子の場合は現地の軍政の搾取と圧制、小山は旧宗主国のオランダと新宗主国の日本の間の曖昧な言語闘争、佐多は旧支配者のオランダに対する不安から「戦争がない」インドネシアで戦争を描写する。

また、インドネシアの経験に基づく女性作家の作品は、「緊迫感なし楽しい旅行」に過ぎない、あるいは「作家という立場からよりも女性の立場から書いている」というような激しい批判を受けた。ここで露呈しているのは、女性作家の作品を評価する基準に内在するジェンダーの非対称性である。彼女たちの作品を評価する際には男性作家が書いたものを基準に評価すると考えられる。しかし、国家との関係において、女性作家は女性作家たる特徴を明示する戦略として、女性らしさを強調する。作中で慰安婦、女性慰問団、「からゆきさん」を登場させることで、彼女たちに日本のシニフィアンとしての役割を意図的に担わせている。身体を支配される女性とその移動は、「日本」もしくは「帝国領土」を象徴し、帝国主義とジェンダーの枠組みを揺るがすアンチテーゼでありつつ、国家の抑制に対

する女性作家のネゴシエーションを明示している。

女性作家の文学と植民地との関連性において、女性作家の文学は「非政治的」「個人的」というスタイルを女性作家の特徴である。植民地という文脈の上で、女性の立場が被支配者とあまり変わらず、国家によって圧迫されることによって、この女性作家は支配者の立場で立たされているにもかかわらず、自分をそのように見ることはできない。作品には現地人との関係、あるいは現地人の登場し方から反映する。作中にインドネシア人があり登場しない（林芙美子）、あるいは日本人とインドネシア人に対して支配者―被支配者のヒエラルキー的な描写が見当たらない。

植民地という空間において自身が経験した旅に基づく女性作家たちの文学は、権力、家長制、ジェンダー規範との関係性と永続的に結びつけられている。女性作家たちは、家長制社会との接触の末に、男性作家と共に戦場へ赴き、同様の危険性や負担を抱えたとしても、彼らと同等には扱われず、「臨時」というラベルを貼られている。ジェンダー規範と日本帝国主義という権力との関係性において、彼女たちは帝国の領土に渡り支配側の立場であるにもかかわらず、国家による支配を内面化していた。それゆえ、作中には被支配者である現地人との関係が窺われず、自分の支配者の側面を描出することに臆するかのようになり、外地においても「日本」というアイデンティティの紐帯から解放されないままである。

日本帝国主義のエージェントとして、南方、とりわけインドネシアに派遣された女性作家は、西洋の植民地主義から逃れることはできない。彼女たちは西洋の視線を内面化してインドネシアを眼差しつつ、旧支配者であるオランダの植民地主義の陰に迫尾されるような不安や競争に対峙する。このように、インドネシアにおける日本帝国主義は実際に西洋の旧支配者・日本帝国主義の新支配者・インドネシアという被支配者の三角関係のなかで、女性作家はインドネシアを認識し、描出していたのである。

参考文献

日本語文献…

- ① 高山京子 「林芙美子と戦争」 『林芙美子とその時代』（論創社 二〇一〇年五月）
- ② 望月正彦 『林芙美子とボルネオ島く南方従軍と』 『浮雲』 をめぐって』（ヤシの実ブック
ス 二〇〇八年七月）
- ③ 中川成美 「女は戦争を戦うか」 『語りかける記憶 文学とジェンダー・スタディーズ』
（小沢書店 一九九九年二月）
- ④ 桜本富雄 『文化人たちの大東亜戦争 P.K.部隊が行く』（青木書店 一九九三年七月）
- ⑤ 朝日新聞 「新聞と戦争」取材班 『新聞と戦争』（朝日新聞出版社 二〇〇八年六月）
- ⑥ 倉沢愛子 『日本占領下のジャワ農村の変容』（草思社 一九九二年六月）
- ⑦ 中野聡 『岩波講座 アジア・太平洋戦争 7 一支配と暴力』（岩波書店 二〇〇六年五
月）
- ⑧ 倉沢愛子 『資源の戦争 「大東亜共栄圏」の人流・物流』（岩波書店 二〇一二年九
月）
- ⑨ 後藤乾一 『和期日本とインドネシア』（勁草書房 一九八六年三月）
- ⑩ 野村康三 『野村徳七の海外事業 ―野村東印度殖産株式会社と野村ブラジル農場』（敷

- 島印刷株式会社 一九九七年一〇月)
- ⑪ 正木恒夫『植民地幻想―イギリス文学と非ヨーロッパ』(みすず書房 一九九五年七月)
- ⑫ 西正彦『外地巡礼―「越境的」日本語文学論』(みすず書房 二〇一八年一月)
- ⑬ 加納美紀『女たちの〈銃後〉』(イザラ書房、一九九五年八月)
- ⑭ 田中宏巳『復員・引き揚げの研究』(新人物往来社 二〇一〇年六月)
- ⑮ 朴裕河『引揚げ文学論序説 新たなポストコロニアルへ』(人文書院 二〇一六年十一月、一〇頁)
- ⑯ 坪井秀人『「帰郷」の語り／「移動」の語り伊豫谷敏夫・平田由美編』(平凡社 二〇一四年一月)
- ⑰ 川島武宜『離婚(現代家族講座 第五卷)』(日本図書 二〇〇八年四月、二一頁)
- ⑱ 安田徳太郎『食と生の発端』(光文社 一九五一年十月)
- ⑲ 筒井清忠『昭和史講義【戦後右辺】(上)』(ちくま新書 二〇二〇年八月)
- ⑳ 増田弘『大日本帝国の崩壊と引き揚げ・復員』(慶應義塾出版社 二〇一二年十一月)
- ㉑ 馬場マコト『従軍歌謡慰問団』(白水社 二〇一二年十月)
- ㉒ 早稲田大学大隈記念社会学研究所篇『インドネシアにおける日本軍政の研究』(紀伊国屋書店一九五九年五月)
- ㉓ 池田浩士『大東亜共栄圏の文化建設』(人文書院 二〇〇七年七月)

- ②④ 安田敏朗 『言語帝国主義とは何か』（三浦信孝、糟谷啓介編者）（藤原書店 二〇〇〇年九月）
- ②⑤ 小森陽一 「へ日本近代文学」という問い」『へゆらぎ』の日本文学』（NHKブックス 「839」一九九八年九月）
- ②⑥ 神谷忠孝、木村一信 『南方徴用作家…戦争と文学』（世界思想 一九九六年三月）
- ②⑦ 長谷川啓 『佐多稲子論』（オリジン出版センター 一九九二年七月）
- ②⑧ R.マリー・シェーファー 『世界の調律 サウンドスケープとはなにか』（鳥越けい子、他訳）（平凡社 二〇〇六年五月）
- ②⑨ 小林裕子 『佐多稲子―体験と時間』（翰林書房 一九九七年五月）
- ③⑩ ジョン・W・ダワー 『容赦なき戦争…太平洋戦争における人種差別』（平凡社 二〇〇一年十二月）
- ③⑪ 後藤乾一 『日本占領期インドネシア研究』（龍溪書舎 一九八九年十月）
- ③⑫ 後藤乾一 『東南アジアから見た近現代日本―「南進」・占領・脱植民地化をめぐる歴史認識』（岩波書店 二〇一二年五月）

英語文献：

- ① Leo T.S.Ching. 2001. *Becoming Japanese; Colonial Taiwan and the Politics of*

- Identity Formation*. London; University of California Press.
- ② Robert Thomas Tierney. 2010. *Tropics of Savagery; the Culture of Japanese Empire in Comparative*. London; University of California Press.
- ③ Sara Mills. 1991. *Discourse of Difference: An Analysis of Women's Travel Writing and Colonialism*. London; Routledge.
- ④ John W. Dower. (1999). *Embracing Defeat*. United States; W.W Norton & Company.
- ⑤ Kees Groeneboer. 1998. *Gate way To The West; The Dutch Language in Colonial Indonesia 1600-1950 - A History of Language Policy* (translated By Myra Scholz). Amsterdam; Amsterdam University Press.
- ⑥ Sitti Djaerah. 1997. *A Novel of Colonial Indonesia by M. J. Soetan Hasoendoetan*. Translated and with an Introduction by Susan Rogers. University of Wisconsin; Madison. Center for Southeast Asian Studies Monograph 5
- ⑦ Shimizu Hiroshi, Hirakawa Hitoshi. 1999. *Japan and Singapore in the world Economy; Japan's Economic Advance into Singapore 1870-1965*. London; Routledge
- ⑧ Anna Snaith. 2020. *Sound and Literature*. United Kingdom; Cambridge University press.
- ⑨ Ann Laura Stoler. 1985. *Capitalism and Confrontation in Sumatra's Plantation Belt, 1870-1979*. London; Yale University Press

⑩ Joshua S. Goldstein. 2001. *War and Gender*. United Kingdom; Cambridge University Press

⑪ Nira Yuval-Davis, Floya Anthias. 1989. *Woman-Nation-State*. London; MacMillan

インドネシア語文献：

① Suriansyah Ideham. 2007. *Sejarah Banjar*. Banjarmasin : Balitbangda Kalsel

② Meta Sekar Puji Astuti. 2008. *Apakah Mereka Mata-mata? Orang-orang Jepang di Indonesia (1862-1942)*. Yogyakarta : Penerbit Ombak

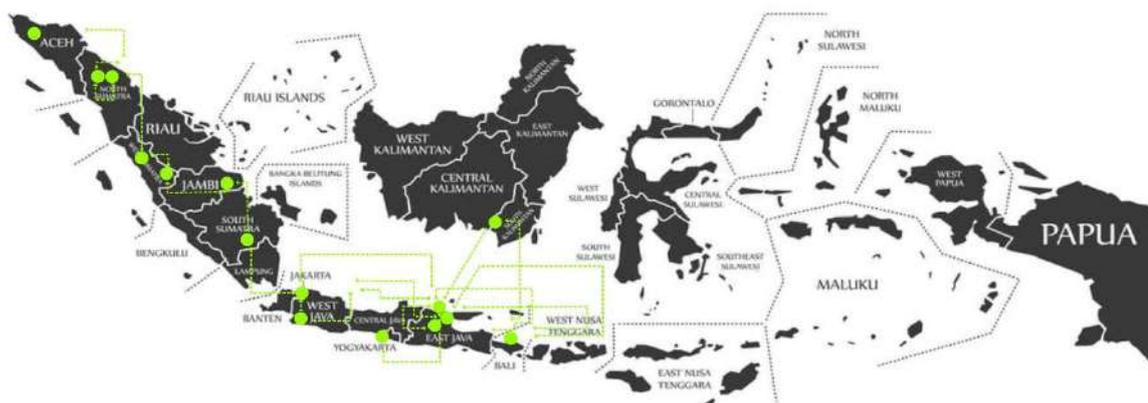
オランダ語文献：

Van Velden, Dr. D. 1963. *De Japanse Internerings kampen Voor Burgers Gedurende De*

Tweede Wereldoor Log (The Japanese Civil Internment Camps During the Second World War). Uitgeverij T. Wever B. V., -Franeker

滞在マップ

① 林芙美子



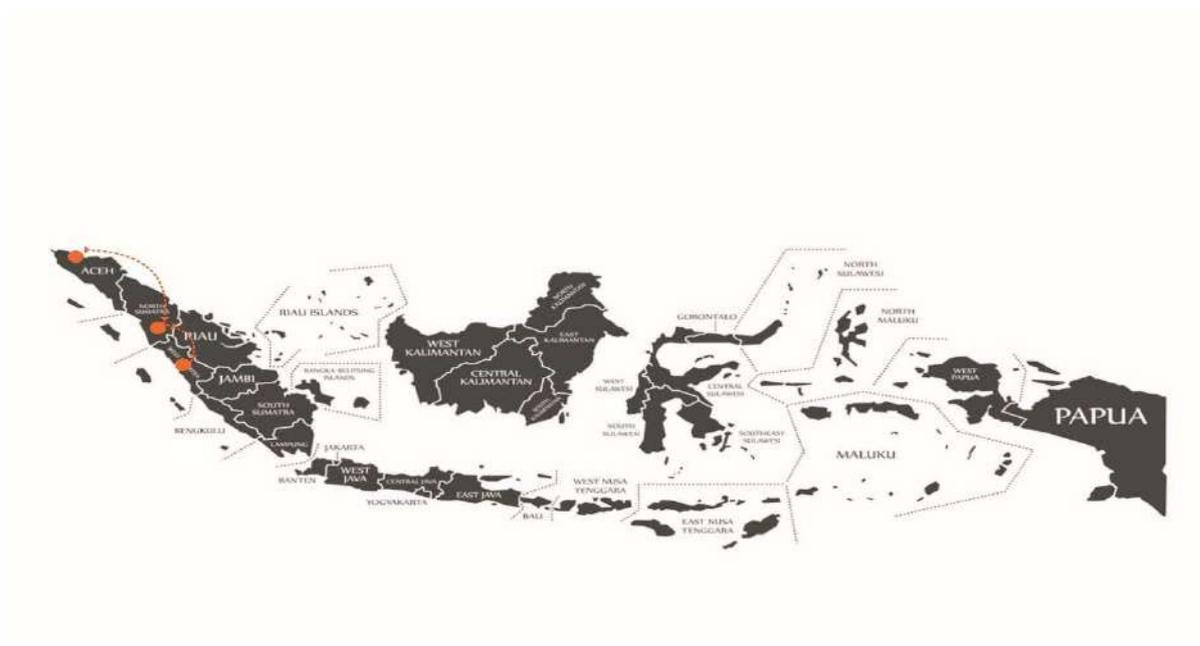
滞在の日程

- 1942年10月31日 広島宇品港から南方へ出発
- 1942年11月16日 シンガポールに到着
- 1942年12月9日 インドネシアのジャカルタに到着（シンガポール、マレー半島を旅回った後）
- 1942年12月14日 東ジャワのスラバヤに到着
- 1942年12月15日 スラバヤから南ボルネオのバンジャルマシンへ
- 1943年1月6日 スラバヤに戻り
- 1943年1月12日 モジョケルト州トラウス村に到着
- 1943年1月18日~23日 再びスラバヤへ
- 1943年1月25日 バリ島のデンパサル市に到着
- 1943年1月26日 バリ島のキンタマニ市に訪問
- 1943年1月28日 スラバヤに戻り
- 1943年1月30日 汽車でジャカルタへ
- 1943年2月3日 西ジャワ州のスカブミに訪問

滞在の日程

- 1942年10月31日 広島宇品港から南方へ出発
1942年11月16日 シンガポールに到着
1942年12月~1943年 スマトラ島→ジャワ島→バリ島→スマトラ島
1944年 北スマトラ州メダン市に
1944年12月末 帰国

③ 佐多稲子



滞在日程

- 1942年10月31日 広島宇品港から南方へ出発
1942年11月16日 シンガポールに到着
1942年12月20日 インドネシアのアチェーに到着
1942年12月30日 メダン市へ (1943年4月中旬まで)
(この間にアチェー(Aceh)→アチェー州のタケゴン (Takengon) →北スマトラのトバ湖(Toba Lake)→北スマトラのシボルガ(Sibolga)→北スマトラのニアス(Nias)→西スマトラのブキチンギ(Bukit Tinggi)→西スマトラのパダン(Padang)→北スマトラのメダンにもどり (Medan))
1943年4月15日 メダンからシンガポール、マニラ経由で帰国
1943年5月18日 日本に到着